

# 日本統治期の台湾・朝鮮における 「国語」教育（下）

鳥井克之・熊谷明泰

## 序

本研究は、植民地統治下の台湾及び朝鮮における「国語」（＝日本語）政策に関する考察を行うものであり、とりわけ初等教育段階における「国語」教育に焦点を合わせたものとなっている。

本稿（上）では、鳥井克之氏（現在、関西大学名誉教授）が日本植民地統治下の台湾における公学校と国民学校における「国語」教科書であった『國語讀本』に関する論文集の翻訳とその解題を行った。

本稿（下）においては、筆者（熊谷）は植民地統治下の朝鮮における「国語」政策を取り上げて考察を加える。特に、「皇民化」（皇国臣民化）政策の一環として、主に国民学校の生徒を媒介にして朝鮮民衆の家庭内言語にまで「国語常用」施策を浸透させることを企てた朝鮮総督府の「一日一語運動」を取り上げる。また、本稿末尾に「釜山日報」（釜山広域市立市民図書館蔵）に掲載された「国語常用・国語全解」運動関連記事を紹介する。

なお、本稿は関西大学学術助成基金による助成金（2003年度～2004年度）を得て行った共同研究「日本の植民地言語政策についての研究－戦時体制構築との関わりに焦点を絞って－」（研究代表者：熊谷明泰、研究分担者：鳥井克之）の研究成果の一部である。また、本誌第48号（77頁－230頁、2004年1月）、同第49号（1頁－57頁、2004年8月）にて発表した「植民地下朝鮮における徴兵制度実施計画と「国語全解・国語常用」政策（上・下）」（熊谷明泰著）に引き続いて公表される研究成果でもある。

# 朝鮮総督府による「一日一語運動」の構想と展開過程<sup>1</sup>

熊谷明泰

## 1. はじめに

本稿は、朝鮮総督府が行った「国語常用・国語全解」運動の一施策として実施された「一日一語運動」をとり上げて考察するものであるが、これから見られるように、朝鮮総督府の「国語」政策は植民地時代末期に至ると、朝鮮民衆が朝鮮語によって日常言語生活を営むことまで厳しく抑圧する形で遂行された。

アジア・太平洋戦争下の1942年5月8日、朝鮮でも1944年度より徴兵制度を施行するという閣議決定がなされ、朝鮮民衆を戦争に駆り立てるためにも、低迷していた「国語」普及率を急速に高めることが緊急の課題とされていた。また、朝鮮民衆を「皇民化」させるためには、全朝鮮民衆に「国語」を習得させる「国語全解」と、「国語」を少しでも解する者にはあらゆる場で可能な限り「国語」を用いさせる「国語常用」を推し進めることが、不可欠な課題であると考えられていた。

当時、最も「国語」の普及が遅れていたのは農村部であったが、「国語常用」運動が最も浸透していなかったのは、都市部、農村部を問わず家庭内での言語生活であった。そして、職場などでの社会生活では「国語」を用いる人々も、家庭内では朝鮮語生活を営むという、日朝両言語のダイグロシヤ状況を呈していた。こうした言語状況にあって、朝鮮総督府学務局編輯課長島田牛稚は次のような談話を発表し、「国語常用」の徹底を指

---

1 本稿は平成15年度・16年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(研究課題名:「植民地下朝鮮に於ける徴兵制実施計画に伴う「国語常用・国語全解」運動の展開様相」、研究責任者:熊谷明泰)の下で行った研究成果の一部でもある。

示した。

「国民学校では教室で先生と問答し、運動場でも常に先生と接してゐる関係から、いつも国語を使ふ。それが中等学校になると、先生と会話する機会が少くなり、殆んど話を聴くだけにとどまり、運動場でも先生は姿を見せぬので生徒同士は自然、鮮語を使用する。専門学校ではそれがなほ酷くなり、学生はノートをとるだけだから、国語使用の時間は極めて僅かなものになる。家庭に帰れば全く鮮語使用であるから、学校で国語を教へても使ふ機会がないといふのが偽らざる現状である。教へるだけでは不可ない。使はせるやうに仕向けることが大切である。」<sup>2</sup>

とりわけ、婦人たちの「国語」普及率は低く、国民学校で「国語常用」生活を営む子供たちも、家庭内では朝鮮語一色の生活を営んでいた。しかしながら、これは単に親兄弟に「国語」がわからない者がいるからという理由からだけではなく、朝鮮民衆は心の底から「国語常用」に抵抗していたためでもあった。「内鮮一体」というスローガンのもと、「国語常用」運動は朝鮮固有の地名や人名を日本漢字音で発音させる、いわゆる固有名詞の「国語読み」を朝鮮民衆に強要することすら辞さなかった。当時、「創氏改名」（1940年2月11日より実施）が進められていたが、その上、国民学校などでは「家庭で必ず創氏改名の名前を国語で呼ぶことにし、児童にはお母さんが旧名（元来の名前－注）で呼んだ場合は、答へずに注意を申上げること」を「月例母姉会」の「基礎的申合せ事項」に定めて、毎日、専任の訓導がその指導を担当することにした<sup>3</sup>という。「内地式」の名前に変えさせ、その上本来の名前を呼ぶことすら禁じるような、ことばの響

---

2 「釜山日報」1942年5月3日付夕刊記事「全鮮国語一色運動/思ひ切つた手段で/使はせることが先決/島田本府編輯課長語る」

3 「釜山日報」1942年5月3日付夕刊記事「先づ母親から/一日一語通信講座/水晶国民校の校外常用化運動」

きに込められた肉親の情まで踏みにじる「国語常用」のやり方が、朝鮮民衆から受け容れられるはずもなかった。朝鮮総督府警務局長が第79回帝国議会（1941年12月）において、「殊に寒心に耐へざる」こととして、「充分国語を解する中等程度以上の学生乃至官公吏の一部には、殊更に同僚間朝鮮語を使用せむとする傾向あるやに認めらるる」（『第七十九回帝国議会説明資料』）と説明するほど、「国語常用」政策に対する朝鮮民衆の反発は激しかった。

朝鮮総督府は「国語全解」と「国語常用」を推し進めるために、さまざまな対策を講じたが、それらは非情極まりないほど朝鮮民族のプライドと人間性を傷つける形で進められた。しかし、こうした歴史的現実には日本社会では十分に語り継がれることもなく、教育されることもないまま今日に至った。韓国との間で歴史認識の違いを巡ってぎくしゃくした関係が続く事の背景には、植民地言語支配を例にとってみても、歴史的事実に対する日本社会の無知・無理解に原因がある。およそ、韓国や朝鮮民主主義人民共和国の人々との対話を進めるための基本的な歴史認識が存していないのである。

そんな中、近代史の捉え方をめぐって、日本の近隣諸国、とりわけ韓国、朝鮮民主主義人民共和国、中国との間で摩擦が絶えない今日、日本社会の一角では植民地支配を正当化する類いの、時代に逆行した歪んだナショナリズムが台頭している。朝鮮に対する植民地支配から生起したさまざまな歴史問題に関する認識についても、こうした現象が見られる。このことを示す事例を一つ取り上げてみたい。

読売新聞（2005年1月26日付）は、2004年12月、三省堂（以下、S社と称す）発行の中学校用文部科学省検定済英語教科書『NEW CROWN 3』の内容の一部に誤解を招く記述があったとして、同社が英文の書き換えを決めたことを報じた。

書き換えられた英文は上記テキスト72頁から74頁に載せられた

“Language-Life of a people”という母語の大切さをテーマにした読み物教材の74頁の部分である。この箇所はウェールズ語がイングランドとの関係の中で衰退していく経緯を述べる中で、他地域の例として植民地下の朝鮮における「国語」使用強要政策に言及した部分である。以下に、書き換え前後の英文を紹介する。

<書き換え前>

Korea was a colony of Japan for thirty-five years. The Japanese government forced the Korean to use only Japanese. It was really painful for them to stop using their own language. They could not use it again in public until the end of World War II. (朝鮮は35年間、日本の植民地でした。日本政府は朝鮮人に日本語だけを用いることを強制しました。彼らにとって、みずからのことば（朝鮮語）が使えないようになることはとても辛いことでした。彼らは第二次世界大戦終結時まで二度とおおやけの場で朝鮮語を用いることが出来ませんでした。)

<書き換え後>

Korea was a colony of Japan for thirty-five years. Korean school children had to learn Japanese as the ‘national language’. Later, Korean language classes became optional. It was really painful for them. This system lasted until the end of World War II. (朝鮮は35年間日本の植民地でした。朝鮮の生徒たちは「国語」として日本語を学ばなければなりませんでした。後に、朝鮮語の授業は随意科目となりました。このことは彼らにとってほんとうに辛いことでした。この制度は第二次世界大戦終結時まで続きました。)

この書き換えは、2004年10月中旬にS社編集部に寄せられた実名及び匿名による複数の人々からの執拗な「問い合わせ」に端を発している。「問い合わせ」の趣旨は、“植民地時代の全期間にわたって朝鮮人に「国語」使用を強制したと読めるが、それは事実と異なるのではないか”という趣

旨のものだった。朝鮮民衆に対して、官公署や学校においてのみならず、家庭内言語としても「国語」の常用を強要する政策は、「皇民化」政策が展開され始めた1937年から実施されたものであり、植民地時代の全期間にわたるものでなかったことは事実である。

また、出版・報道等に関しては、植民地時代末期に至ると朝鮮語によるものが厳しく抑圧・禁止されたとはいえ、朝鮮語版の朝鮮総督府機関紙「毎日新報」が1945年8月15日の解放後まで刊行され続けていたし、パブリックな朝鮮語によるラジオ放送も続けられていた。それは解放直後まで続き、朝鮮放送協会傘下にあった21のラジオ放送局のうち、たとえば京城放送局（JODK）は朝鮮総督が降伏文書に調印し、北緯38度線以南で米軍による軍政が開始された1945年9月9日に第一放送（日本語による放送）が廃止されるとともに、第二放送（朝鮮語による放送）が第一放送に変更されている。「国語」の普及率が低い言語状況下では、植民地統治政策の効果的な浸透を図るうえで、朝鮮語による出版・報道を続けることのメリットが考慮されたためだった。<sup>4</sup> 従って、書き換え前の“*They could not use it again in public until the end of World War II.*”という記述は厳密性に欠けると言わざるを得ない。そして、中学校3年生レベルの英語教科書では、限られた語彙や構文のみでもって、当時の言語状況を厳密かつ簡潔に記述することには困難が伴ったとはいえ、このような指摘を受けた以上、S社

---

4 朝鮮語版の朝鮮総督府機関紙「毎日新報」1942年4月13日付朝刊記事「国語常用徹底強化/南総督 知事会議でも要望する方針」には、「国語」と朝鮮語の併用に関して、次のように書かれている。「国語の普及と、情報の宣伝と啓発の立場から見た諺文の併用とは決して相反するものではなく、諺文の併用によって地方の農山村の下層階級に進学指導の徹底を図り、ひいては皇国臣民教育を刷新して、内地の習俗と文化の修得を強化するため、これに関する総合的な関連性については、現在、関係各局の間で慎重に具体案を考慮中である」。また、朝鮮放送協会長甘庶は朝鮮語放送（第二放送）を続ける統治政策上の意義について、「現在の日本の状態といふものを知らせて、我々は皇国臣民であるといふことを認識させる。そのために、朝鮮語によつて八十五%の人達の知識を昂めて行く。そういふ意味で、第二放送といふものは大切なものであります」として、「そういふ具合ですが、第二放送、詰り朝鮮語をやめるといふことはできない」と語っている。（本稿所載「釜山日報」1942年5月23日・24日付記事）

としては何らかの回答を示さざるを得ない窮地に立たされていたことは、よく理解できる。

しかしながら、この問題の核心は、「歴史的事実を質す」という大義を振りかざしつつ、実際には、いわゆる「自虐史観」や「偏向教科書」に対する偏狂なナショナリストによる攻撃の一環であった点にある。植民地時代の全期間にわたるものではないにしても、朝鮮民衆が「皇民化」政策のもとで「国語常用」を強要されて苦痛を味わったことは紛れもない事実であり、検定教科書にこのことが明確に書かれたことに対する彼らの嫌悪感を示すものであった。

S社編集部に対する執拗な「問い合わせ」は、まさに4年に1度めぐってくる教科書採択の時期に焦点を合わせたかのようにして集中的に行われた。これは、S社教科書の販売実績に悪影響を及ぼしかねないものだった。「問い合わせ」の過程やその内容は、彼ら自身の手によってインターネット上の掲示板に克明に書き込まれている。

その書き込みの中には、たとえば「問題箇所は、“民族にとってことばとは何か？”というタイトルで、ウェールズの言語弾圧と、朝鮮を扱っています。薬味に沖縄の方言札を添えていることなどから判断しますと、“極悪非道の日本”をイメージさせるための印象操作ありありの構成ですね。こんなものを紛れ込ませた犯人はだれだ？」というものがあるが、この文面からは、朝鮮民衆に対する植民地言語支配について、いささかも良心の呵責を感じていない様子が伺われる。

また、S社編集部との間になされた電話での問答の一場面が、次のように書き込まれている。

「（S社の当該教科書が－注）日韓併合時の歴史について説明しようとしたのではなく、あくまでも“民族と言葉”というテーマで書かれたものだと主張されるので、“英語を学び始めてたった三年目の義務教育に相応しいテーマですか？”と言ったら、“テーマは編集委員会できめられるものなので…”とのこと。“それに、確かに併合時に日本語の強制はありまし

たが、それがダメだというテーマであるなら、義務教育で強制されているこの英語の教科書そのものを教科書で否定することにはなりませんか”といたら絶句されました。真摯に丁寧に対応しようとしてくれているのは判りましたが、どうも全体的に思考停止の印象を受けました。」

この書き込みから見えてくるものは、朝鮮民衆が宗主国日本の言語を「国語」として押し付けられたことと、日本の義務教育で「外国語」として英語を教えることとを、その「強制」性において同一視してしまうという「思考停止」状況が、むしろS社に議論を投げかけた側に存していたのであり、こうしたこじつけでしかない発言に対しては、S者の担当者は「絶句」せざるを得なかったのだろう。

S社は、「問い合わせ」を受けて2週間も経たない異例の速さで、教科書を書き換えることを明らかにした時、「電凸スレは無駄じゃないですよ、無駄じゃないですよ皆さん！」とか、「まあ、自分の非を認めて訂正したわけですから、大成功ですな。今までTBSとか相手にしてたから、戦果の違いにビックリですわ」などと歓喜している。ちなみに、「電凸（デントツ）」とは「電話突撃隊」の略称で、組織的に各メディアに対して電話攻勢を掛け、「偏向」に対する圧力を繰り返し加えるグループのことである。朝鮮民衆に対して「国語常用」を強制した事実の記述を教科書から抹消させたことを、「大成功」とか「戦果」などと表現するところからも、彼らの屈折した思考と悪意に満ちた計画性を読み取ることができる。

この「デントツ」とS社編集部とのやり取りの根底には、朝鮮植民地支配に対する基本的認識の相違が横たわっている。「デントツ」は教科書記述の不備を槍玉に挙げつつ、植民地支配が朝鮮民衆に与えた屈辱感や精神的苦痛を日本の子供たちが理解できる方向に記述改変を要求するのではなく、これを隠蔽する方向へ向かわせるために策を弄したのだった。S社にすれば、検定教科書とはいえ、数十万の中学生によって使用されている教科書であるため、その売れ行きを左右しかねない「問題」の解決を急ぎたかった事情は理解できる。とはいえ、不条理な日本語強要政策によって味



わされた朝鮮民衆の屈辱感をより等身大に描写できるよう、もう少し前向きの解決策が考慮できなかったものかと惜しまれる。なお、この読み物教材は、当該教科書2006年版から他の教材と差しかえられた。

今日、卑劣な匿名性のもとで、インターネットを使って歴史認識を歪めようとする動きは止まるところを知らない勢いである。朝鮮総督府の「国語常用」政策の「強制性」有無を問う議論がなされるとき、ここで取り上げた英語教科書の記述をめぐる議論でも見られるように、「史実を検証する」という建前のもとで、植民地言語支配がもたらした歴史問題を意図的に覆い隠そうと目論む一群の人々の存在自体が問題なのであり、こうした人々の歪んだ歴史認識と倫理性が、まず問われなければならない。冒頭で長々と英語教科書の「事件」を紹介したわけは、現代の歪んだナショナリズムに対する警鐘として、本稿が取り上げる植民地言語支配の事実に対する考察が重要性を帯びていることを確認したいが為である。

朝日新聞<sup>5</sup>のインタビューに応じた在日朝鮮人の詩人<sup>キムンジョン</sup>金時鐘氏は、植民地時代に非業の死を遂げた詩人<sup>ユンドンジュ</sup>尹東柱のことに触れつつ、「（尹東柱は一注）失われゆく朝鮮語への哀惜の念から、自分の言葉を守ろうとただけです。国家総動員体制の中で、時局とは関係のない詩を朝鮮語で書いたこと自体が、優れて政治的、民族的でした」と語っている。抒情詩を書いていた尹東柱は、同志社大学英文科在学中の1943年夏、治安維持法違反容疑で逮捕され、福岡刑務所に収監されていた1945年2月、27歳で原因不明の獄死を遂げている。この疑問死の直前、尹東柱は朝鮮語で叫び声を上げたといわれているが、その場にいた刑務所の人間たちには届かなかった。

同じく1943年秋に起こった朝鮮語学会事件も、朝鮮語の規範化とその普及を行うこと自体が民族独立を図るものであるとして、治安維持法違反に問われた事件であった。当時、50歳代を中心とする第一線の朝鮮語研究者31名が検挙され、2人の獄死者まで出している。1942年から一段と強化さ

---

5 2005年12月2日夕刊文化面

れていった「国語常用」政策は、自らの母語である朝鮮語を慈しむ事すら罪に問うほど厳しく展開されたのであった。植民地下朝鮮で朝鮮総督府が繰り広げた「国語常用」政策のもとで、当時、一体どんなに酷いことが朝鮮民衆に対して行われたのかについて、日本社会では未だによく認識されていない。従ってこれに対する歴史認識も日本社会ではほとんど空白のままのように思われる。この意味で、本稿が取り上げるテーマは現代的な課題を担っているとも言えるだろう。

## 2. 「一日一語運動」の始まり

太平洋戦争下の1942年5月8日、日本政府は閣議に於いて「朝鮮同胞に対し徴兵制を施行し、昭和19年度より之を徴集し得る如く準備を進むること」を決定したが、これを契機として「国語常用・国語全解」政策の徹底が図られていったことについては、拙稿「植民地下朝鮮における徴兵制度実施計画と「国語全解・国語常用」政策（上・下）」（本誌第48号・49号掲載）や、拙著『朝鮮総督府の「国語」政策資料』（関西大学出版部、2004年）で論じた。なお、『昭和十七年度府尹郡守会議報告書綴』に収められた「国語常用・国語全解」運動に関する各道知事からの諮問に対して地方行政機関が作成した答申書（以下、「諮問答申書」と称す）など、本稿で引用した資料の多くは、上掲拙著に収められているものである。

本稿では、「国語常用・国語全解」政策を遂行するため、「国語を解しない者」に対する「国語」普及の一方策として展開された「一日一語運動」を取り上げて、朝鮮総督府の「国語」強要政策について考察することにする。

「国語常用・国語全解」運動は、「国民総力運動」として展開されたが、当時、官製運動を主導していた国民総力朝鮮聯盟は、「国語常用・国語全解」運動を担う中核的な運動母体だった。1942年5月6日、第44回国民総力朝鮮聯盟指導委員会<sup>6</sup>は「国語普及運動要綱」（本稿所収「釜山日報」1942

年5月7日付夕刊1面記事参照のこと）を決定し、その後朝鮮全域で展開された「国語常用・国語全解」運動の具体策を画定する上でのモデルとされた。上記「指導委員会」は朝鮮総督府第1会議室で開催され、南次郎総裁（朝鮮総督）<sup>7</sup>、大野緑一郎副総裁（朝鮮総督府政務総監）、波田・川岸新旧事務局総長らが出席している。

「国語普及運動要綱」は、朝鮮総督府司政局において学務局、警務局、情報課、国民総力朝鮮聯盟との協力のもとで作成された上、国民総力朝鮮聯盟指導委員会の「協賛」を得たものとされ、このことから官製運動として首尾一貫していたことは明らかである。そして、この「国語普及運動要綱」を基調として、朝鮮各道のそれぞれの地域に適した実施案を作成させ、朝鮮全土で一斉に「国語常用運動」を展開させることにしていた。<sup>8</sup>

「国語普及運動要綱」が決定された翌日、「釜山日報」1面に掲載されたコラムは、「国語常用」とは「話し渋らぬ様に」すること、「国語全解」とは「眼と耳を開けてやる」ことだと、支配者的発想のもとで簡潔に説明している。いわく、「要するに、国語常用への普及運動は、国語は解し<sup>なが</sup>ながら話し渋ってゐるものと、国語をぜんぜん解せずに語らうにも語れずに居るものとの二つであるから、話し渋らぬ様に円滑作用と、国語の全解へ眼と

---

6 この組織については、当事者によって次のような説明がなされている。「行政組織と国民運動組織を全く一体とし、従来あった各種の精神運動の助長奨励又は指導監督施設、関係団体の下部組織は、同一目標たる町洞里部落聯盟及び愛国班に発展的統合を遂げ、総力運動に帰一したのである。そのため、総督府及び各道内に国民総力課がおかれ、従来の精動（国民精神総動員朝鮮聯盟－注）委員会を廃して「国民総力運動指導委員会」が総督府内に組織された。これは政務総監を委員長とし、関係局課長、朝鮮軍関係官、総力聯盟専務理事その他を委員とし、国民総力運動の基本方針を調査審議するを目的としたものである。」（『朝鮮に於ける国民総力運動史』、国民総力朝鮮聯盟編、p.45、1945年4月）

7 同上書同頁に、朝鮮総督が総裁に就任したことにに関して、次のような説明がなされている。「総督と精動総裁は別々であったために、ともすると二元的であったことが深く反省され、総力聯盟では総督が総裁、政務総監が副総裁となった。これは大政翼賛会の総裁に内閣総理大臣がなるとの規定と呼応したものである。」

8 「京城日報」1942年5月7日付朝刊

耳を開けてやる啓発作用とを適切に行ふ事に尽きる」(「釜山日報」1942年5月7日夕刊)。

「皇民化」政策は、文字通り「皇国臣民」を作り出そうとするものであり、その政策の一環として行われた「国語常用・国語全解」運動は朝鮮民衆に「国語」を習得させ常用させようとするものであったと共に、「皇民化」政策に反対する「不穩」な人物をあぶり出し、植民地統治の安定的維持を図るためのものだった。

ここで、『朝鮮ノ国民総力運動』(朝鮮総督府、1943年3月)の記述をもとに、国民総力聯盟について概観をしたい。国民総力聯盟が展開した「国民総力運動」とは、「内地に於て大政翼賛運動の発足を見たるを機として、昭和15年10月従来の国民精神総動員及農山漁村振興運動を主流とする物心両方面の凡有運動を統合包摂して国民総力運動と称し、総督政治と表裏一体たる強力なる国民運動」であった。「国民総力運動」の目標は「国体の本義に基き内鮮一体の実を挙げ、各々其の職域に於て奉公の誠を捧げ、其の総力を結集して皇運を扶翼し奉る」ことにあるとされた。そして、「内地」の「大政翼賛運動」と同じ基本方針を掲げつつ、朝鮮の特殊性から生じる特異性の一つとして、「国体の本義に透徹、特に半島同胞の皇国臣民化に重点を置く」ことを挙げている。

国民総力聯盟の中央組織である「国民総力朝鮮聯盟」は京城(現在のソウル)に設けられ、総裁には朝鮮総督、副総裁には政務長官が就いた。その下に地方組織(括弧内に各総力聯盟の長に任命された行政職の職位、および1942年4月1日現在の組織数を記す)が朝鮮全土に組織され、「国民総力道聯盟」(会長：道知事、13)、「国民総力府・郡・島聯盟」(理事長：府尹・郡守・島司、241)、「国民総力邑・面聯盟」(理事長：邑長・面長、2,329)、「国民総力町・洞・里・部落聯盟」(理事長は総代または区長、65,080)が置かれていた。さらに、「国民総力町・洞・里・部落聯盟」のもとには、「内地」の「隣組」に類似した「愛国班」が組織され、班数360,482、戸代表班員数4,478,949名だった。『昭和十五年国勢調査結果要

約』（朝鮮総督府）によれば、1940年10月1日現在の朝鮮における世帯数は4,586,565世帯（うち、朝鮮人世帯4,406,206、内地人世帯167,142、外地人世帯109、外国人世帯13,108）であり、また『人口調査結果報告 其ノ一』（朝鮮総督府）によれば、1945年5月1日現在の朝鮮における世帯数は4,920,203世帯だったが、これらと比べると1942年4月時点で4,478,949世帯が「愛国班」に組織されていた状況は、ほぼ大部分の世帯を網羅していたものと見ることができる。このほか、官公署、学校、会社、銀行、工場、鉱山、大商店、その他の団体にも17,704の「各種聯盟」が置かれ、この下にも67,950の「愛国班」と2,600,747名の班員がおり、「各種聯盟」はそれぞれの所在地の「国民総力府・邑聯盟」の指導を受けていた（なお、1941年末現在、朝鮮半島内に居住する朝鮮人は23,913,063人、日本人は717,011人で、このほか「内地」在住朝鮮人160万、「満州、北支」在住朝鮮人約160万人と概算されていた）。

このように、国民総力聯盟は朝鮮総督府の行政機構と全く並行的に組織された官民一体の国策遂行機関であり、その「国民総力運動強化方策」には、国民総力朝鮮聯盟の運動は「総督府行政施策と表裏一体の関係を保つこと」、「朝鮮聯盟の運動に対しては其の主管事項に付、総督府関係局長に於て、之が円滑適正なる運行を期する為、密接なる協力指導に当ること」と定められていた。一部の人々の間では、植民地下朝鮮に於ける「国語常用」運動は「運動」であって、朝鮮総督府が政策的に「国語」を強要したものではなかったとする議論が見られるようである。しかし、「国民総力運動」として展開された「国語常用」運動は朝鮮総督府の指導下で進められ、明確に国家意思を体現したものであったことは、国民総力聯盟の組織様態をみても、全く疑う余地がない。

「国語普及運動要綱」決定に先立つ4月20日から23日まで、朝鮮総督府第1会議室で朝鮮全土の道知事を招集した定例各道知事会議が開催されたが、ここで「国語常用普及」問題が重要議題として取り上げられた。

この会議で、金村全羅北道知事は「国語一日一語運動普及票を作成し、

国民学校児童に教えて、簡単な日常語を家庭に普及せしめる。特に、該校訓導が各家庭を査察に赴けば、その普及の程度も判明するし、優秀なる家庭には標識を掲げて、これを表彰するなどの方法もある」と、「一日一語運動」の推進を提唱した。<sup>9</sup> このことを、「毎日新報」<sup>10</sup>は「一日一語解得を目標 国語全解に総力戦 知事会議を機とし普及に大進軍」という見出しの下、次のように報じた。

「金村全北知事は国語一日一語普及運動を起そうと主張し、南総督から称賛を受けた。その内容は、国民学校で先生が児童に対して、今日は家に帰ったら「この言葉」を家族に教えるようにと、日常用語を主として一日に一語ずつ教えてやろうというものである。このようにすれば、容易に国語を学ぶことができるので、いま全北で実施しているところだが、各学校の先生方は担任の児童の家庭を時々訪問して、その実績を調べたり、実地に指導したりしているということである。」

このほか、「国語常用問題は地方的、部分的に行う性質のものではなく、全鮮的にこれを展開して、その成果を期すべきである」（瀬戸威鏡南道知事）など、「国語常用」政策を推進させようと主張する各道知事の発言が相次いだ。<sup>11</sup>

「国語普及運動要綱」<sup>12</sup>は、その冒頭に書かれた「趣旨」において、「半島民衆をして確固たる皇国臣民たる信念を堅持し、一切の生活に国民意識を顕現せしむる為、悉く国語を解せしめ、かつ日常用語としてこれを常用せしむるにある」として、「皇民化」政策遂行のために、「国語」の習得・常用を目的とすることを明言している。これに続く「運動要目」では「(一)

---

9 「京城日報」1942年4月23日付朝刊

10 1942年4月24日付朝刊

11 「京城日報」1942年5月24日付朝刊

12 「京城日報」1942年5月7日付朝刊

常用に対する精神的指導」、「(二) 国語を解する者に対する方策」、「(三) 国語を解せざる者に対する方策」、「(四) 文化方面に対する方策」、「(五) 国語常用者に対する表彰及優遇的処遇」など7項目にわたる具体的方策を提示している。

「(一) 常用に対する精神的指導」では、「皇国臣民として国語を話し得る誇を感じ得せしむること。日本精神の体得、国語常用が絶対必要な所以を理解せしむること。大東亜共栄圏の中核たる皇国臣民として、国語の習得、常用が必須の資格要件たることを自覚せしむること」として、「国語」の習得・常用が「日本精神」の体得や「皇国臣民」化のために必要なことだと論じている。

「(二) 国語を解する者に対する方策」では、「官公署の職員は率先して国語を常用すること。学生、生徒、児童は必ず常用すること。会社、工場、鉱山等に於ても、極力常用を奨励すること。青年団、婦人会、教会その他集合に於いても、国語使用に努むること。苟<sup>いや</sup>しくも国語を解する者は必ず国語を使用することは勿論、凡有機會に国語を解せざる者に対する教導に努むること」などを列記し、官公庁、学校では「国語常用」をきびしく義務付け、その他の職場、団体等に対しては「国語」を解する程度に応じて「国語常用」に努めることを義務付けている。このように「国語常用」運動は、「国語」を解しつつも「国語」を常用しない者たちに対して、「国語常用」を強制するものであった。

そして、「(三) 国語を解せざる者に対する方策」では「国民学校附設国語講習所の開設。各道講習会の開催。国語教本の配布。ラジオによる講習。雑誌による講習。平易なる新聞の発行。常会（国民総力聯盟の末端組織の定例会－注）における指導。児童生徒による一日一語運動。各所在における国語を解せる者よりの指導」などを列記し、「国語」普及率の急速な向上を図るために、老若男女を問わず広範な層の朝鮮民衆に対する、地域末端での「国語」普及施策の樹立を求めている。その方策の一つとして「一日一語運動」が提唱されているが、これは主に国民学校に通う児童を媒介

にして、その母親など家族に対する「国語」普及を図ろうとするものであった。

「国語普及運動要綱」が決定された翌朝（1942年5月7日）の「毎日新報」（朝鮮語版朝鮮総督府機関紙）には、島田牛稚朝鮮総督府編輯課長の「一日一語運動」に関する以下の談話が掲載されている。そしてこの後、「一日一語運動」が達しうる効果については、島田のこの話がよく引き合いに出されるようになった。

「（前略）大体において国語を何語くらい解せば、簡単な対話をなしうるのだろうか。この方面の専門家である総督府の島田編輯課長に尋ねたところ、二百乃至三百語さえ分かればよいということなので、一日一語ずつ学べば半年乃至1年を要せずして、簡単なことばは聞き取り話せるようになるわけである。島田課長は次のように語る。

何語くらい分かれば、日常生活に必要な対話がなしうるのかという標準は、男女と生活水準によって異なり定め難いが、大体二百乃至三百語あれば簡単な対話はなしうる。だから総力聯盟において、無料で広く全朝鮮の各層に配布するために、現在作成している初歩教科書コクゴに収録した語数も250語から260語程度である。」

200語や300語程度の「国語」の習得で可能になるという「日常生活に必要な対話」や「簡単な対話」のレベルがいかなるものかについては、別途検討を要するところであるが、<sup>13</sup> このことよりも筆者が注目したいことは、

---

13 1942年4月20日に定例道知事会議の席上、瀬戸威鏡南道知事は次のような発言をして司政局と学務局からも大いに賛同を得たという。「国語解得は半島民衆の皇国臣民化にとって絶対的な要素として、これは都市よりも農村を中心として本格的活動を起こさなければならないというものである。そして、ある一定の期間を定めてこれを実践しなければならないが、特に農閑期を利用して駐在所、面事務所、学校教員、もしくは地方の知識青年学生達を総動員し短期間講習を実施するというものである。もう一つの方法は、国語が話せる者、もしくは話だけでも聞き取れる者は、絶えず勉強して覚え日常生活で使用するようにしなければなら



「一日一語運動」の狙いがアジア・太平洋戦争へと戦争が激化した当時、朝鮮民衆を対象として徴兵制度を実施するために、朝鮮民衆がアジア・太平洋戦争に協力するように「皇民」思想を植えつけようとするところにあった点である。「国語」不解得者に「一日一語」を普及し、これを常用させるということは、日々、朝鮮語の中に「国語」を混淆させていくことであった。すなわち、持続的かつ計画的に「国語」が朝鮮語を侵食するように誘導し、朝鮮語による言語生活など維持する価値もなく、無くなってしまっても構わないという民族虚無的な心情を朝鮮民衆に抱かせることを企んだものだった。

「毎日新報」は、島田の談話を掲載した翌日の社説で、以下のように「一日一語運動」の機能を説きながら、その推進を主張した。

「国語解得は決して困難なことではない。総督府の島田編輯課長の話によれば、日常会話をしようとすれば、三百個の単語さえあればよいということである。三百語を解得しようとするなら、1日1語ずつとして、わずか半年や、あるいは1年だけかければ可能なことである。それゆえ、老人も子供も、あるいは全く文字を知らない者でも、その気持さえあれば、1年以内に普通用いる言葉ぐらひは、十分に解得し得るのである。まず、1日1語ずつ学ぶことを実行せよ。そうすれば、1年後には容易な日用語は十分に用いることができるようになる。総力聯盟指導委員会において決定した要綱でも、さまざまな方法が列挙されているが、国民各自がこのように考えて、生活の本拠となる家庭においても、あるいは

---

ないというものである。そして今、ラジオや各国語講習所で使用している国語読本は難しすぎる点が多いので、これをもう少し分かりやすく実用的なものに改訂し、日常用いている挨拶ことばや目上の人に対する敬語や、農具の名称などを最大限150字以内で集めて新たな教科書として発行し、各家庭と講習所に配布するというものである」（「毎日新報」1942年4月21日付朝刊記事「農閑期に国語普及全解運動に一大拍車を/知事会議で瀬戸知事提唱」）。このような発言も影響したためか、その後、朝鮮の各地で簡易な「国語語彙集」の類のものが数多く編纂されていったが、これらの語彙集が残存している事実は確認できていない。

職域においても国語常用を徹底化するならば、半島2千4百万全員が国語を全て解得するのも、さほど遠いことではないだろう。」

朝鮮総督南次郎も1942年4月14日に開催された朝鮮総督府定例局長会議の席上、「国語は国民の指導精神と一体不離で、国語を離れて日本文化はない。即ち、半島人の真の皇国臣民化は、これに国語を解し常用せしめることが絶対要件である」<sup>14</sup>と述べているように、その「国語常用」とは、朝鮮民衆を「皇国臣民」化させるためのものであり、これを実現するために、朝鮮民衆の民族意識を支える朝鮮語の使用を抑圧・禁止することでもあった。当時、「国語」普及率が16%程度<sup>15</sup>の朝鮮社会において、朝鮮民

14 「大阪毎日新聞」西鮮版1942年4月15日付

15 「第八十六回帝国議会説明資料」によれば、1941年末における朝鮮人人口23,913,063人中、「国語を解する者」は3,972,094人（全人口の16.61%）、1942年末における朝鮮人人口25,525,409人中、「国語を解する者」は5,089,214人（19.94%）、1943年末における朝鮮人人口25,827,308人中、「国語を解する者」は5,722,448人（22.15%）となっている。なお、都市部と農村部の間では顕著な相違が見られた。京城府の「諮問答申書」によれば、「国語を解する者」の数は1940年末現在294,253人で府内総人口935,464人の38%となっている。ただ、上記の統計には「内地の本籍を有する者」（154,687人、うち男78,962人・女75,725人）〔『昭和十五年十月一日現在 朝鮮昭和十五年国勢調査結果要約』（朝鮮総督府）のよる〕が含まれており、これらはほぼ全員「普通会話に支障なき者」と見られるため、朝鮮人だけに限ってみれば、「国語を解する者」は約18%となる。さらに女性だけで見れば、「国語を解する者」総数101,786人から「内地人」75,725人を除いた26,061人が朝鮮人で「国語を解する者」で、これは朝鮮人総人口458,596の約5.68%であった。1941年現在では328,234人（このうち、「やや解し得る者」は男45,769人・女34,593人、「普通会話に支障なき者」は男180,679人・女67,193人）で府内総人口の40.2%だった。おそらく、府郡レベルで見るとき、この京城府の「国語」普及率がもっとも高いものと思われる。一方、農村部について「諮問答申書」（1942年5月）の記載をみれば、たとえば慶尚北道安東郡では「国語を解する者」は総人口152,068人のうち18,178人で約12%となっており、このうち学校に通う児童9753人を除いて計算すれば、5.5%という「国語」普及率を示していた。同じく慶尚北道義成郡では、1941年末現在「国語を解する者」は15,012人で総人口135,096人の11.1%だったが、義城郡内でもっとも高率を示したのは義城邑の21.9%、もっとも低かったのは北面の6.9%だった。また、江原道旌善郡の「諮問答申書」には「国語」を「やや解する者」は2,214人、「会話に差し支えなき者」は1,447人で、その合計3,661人は郡内人口の6%に過ぎないと記されて

衆を「皇国臣民」化するためには、当時蔓延していた「国語常用」運動に対する抵抗意識、拒絶意識を押さえ込まなければならないと朝鮮総督府は考えていたのであり、「一日一語運動」は、そのための施策のひとつでもあった。

かねてから、朝鮮民衆は「国語」を身につけている者でも、これを話そうとしなかった。このことに関連して、南次郎は1941年9月30日に開催された朝鮮総督府定例局長会議の席上、「近来、各学校、特に中等校以上の学校において、国語を使はず朝鮮語を使ひ、国語常用といふ建前が弛緩の傾向にあるとは、甚だ遺憾と思ふ。学校内では国語使用を不断に奨励し、努力してゐるにも拘らず、かゝることを耳にするのは実に残念である。家庭にあっては、やむを得ず朝鮮語を使はねばならぬ場合があらうが、教員、生徒は成るべく国語普及のために、家庭内でも国語常用に努むべきである。五大政綱の中にある教学刷新でも国語常用を謳ってあり、内鮮一体の上からも、かゝる事実の有することを遺憾とする。今後とも、なほ一段の工夫、研究を積んで貰ひたい」<sup>16</sup>と述べ、「国語常用」の不徹底を嘆きつつ朝鮮民衆の家庭内言語まで「国語」化させるよう指示を下している。当時、地方行政機関が作成した文書でも、「国語常用」に対する朝鮮民衆の抵抗を問題視しつつ、「学校児童を通じて学校と連絡を密にし、苟も学童たる以上は、

---

いる。これを「会話に差し支えなき者」だけで見れば、郡内人口の2.37%にすぎない。なお、これより10年以上前のことだが、朝鮮総督府は国勢調査を実施し、調査項目の一つとして「読ミ書キノ程度別人口」調査を実施し、朝鮮全土にわたり面（郡と里の間の行政区画）レベルでの詳細な調査結果を公表している。そのうちの『昭和五年朝鮮国勢調査報告 道編 第十一卷 江原道』（朝鮮総督府）によれば、上記旌善郡住民の識字状況は総人口57,082人のうち、「仮名及諺文ヲ読ミ且書キ得ル者」1,607人（2.8%）、「仮名ノミヲ読ミ且書キ得ル者」169人（0.6%）、「諺文ノミヲ読ミ且書キ得ル者」7,194人（12.6%）、「仮名及諺文トモ読ミ且書キ得ザル者」48,218人（84.5%）だった。つまり、日本語の仮名が読み書きができる者は全人口の3.4%、諺文（朝鮮文字）が読み書きができる者は15.4%だった。これを女性だけで見ると、「仮名及諺文トモ読ミ且書キ得ザル者」、つまりいかなる文字も読み書き出来ない者が全女性の97%を占めており、諺文が読み書きできる者2.8%、日本語の仮名が読み書きができる者は0.7%に過ぎなかった。

16 「京城日報」1941年10月1日夕刊

校庭内は勿論、家庭に於ても国語を以て会話に当る様、仕向けること。尚、学校職員に於ても、児童が学父兄<sup>やや</sup>に対し国語を以て会話する際、稍もすれば従来の旧習に捉はれ、兎角嫌忌するか、又は奇異なる事の様<sup>やや</sup>に取計ひ、笑止するが如き事なき様にするは勿論、学父兄に於て積極的に国語を以て□（対？）応する様、理解に努むること」<sup>17</sup>とか、「国語は国民意識の象徴でありまして、国語を日常の生活用語と為す所に国家觀念の眞の体得を期し得らるべきものでありますが、往々にして国語を解する智識層、或は学生等に於て、意識して、或は無意識の裡に朝鮮語を使用し、国語の常用を為さざる者がありまするは、<sup>まこと</sup>寔に遺憾に堪へざるところであります」<sup>18</sup>などと朝鮮民衆の抵抗について論じている。朝鮮人児童が、その父母兄弟と朝鮮語で話すことが「旧習」であると断言する「国語」政策が、広く受け容れられるはずもなかった。そして、学校に通う児童に対する「国語常用」運動が以前から行われてきたにも関わらず、次の新聞記事は、むしろ「国語」を使用したがない児童が増えていることを明らかにしている。

「内鮮一体は国語の常用からと、咸南道においては国語普及につとめ、特に学校生徒児童に対しては学校内はもちろん、家庭に帰つても国語を常用させ、一般人に率先垂範せしめる方針であるが、最近これら生徒児童のうち、校門を出ると国語を使用しないものが漸次増加傾向にあるので、当局では一般の協力を要望してゐる。」（「朝日新聞」西鮮版1942年4月11日付記事「児童を通じて国語の常用化」）

「国語常用」を忌避する傾向は国民学校の児童よりも中学生のほうが強かった。その対応策として、京畿道では1942年4月11日から道内各中等学校会議を何度か開催し、さらに道内各中等学校に対して一斉に通牒を發し、

---

17 慶尚北道知事諮問「管下ノ実情ニ即シ、国語ノ急速且全面的普及、並ニ其ノ常用ヲ促進セシムル具体的方策」（1942年5月）に対する慶尚北道善山郡の答申書。

18 黄海道の府尹郡守会議（1942年5月25日）で黄海道知事が行った訓示。

「国語常用」徹底指導のために実行している具体的方策を道学務課宛に報告させた。それらの報告には、以下のような方策を実行して「国語常用」の徹底を図っていると記されていたという。

「週当日記に“国語常用の状況欄”を作ること」、「生徒の中で国語常用補導委員会を設置すること」、「国語常用の誓約書を学校長に提出すること」、「月末に各学校ごとに国語常用成績を掲示し、生徒を反省させること」、「学級主任をして生徒の国語常用状況採点表を校長に提出し、進級の有力な材料とすること」、「就職斡旋に国語能力の優秀な者に優先順位を与えること」、「終礼を行う時や、学級懇談会の時に国語常用を誓約させること」（「毎日新報」1942年6月29日付朝刊）

当時、京畿道では配偶者を有する朝鮮人の道庁職員363人を対象として、家庭における「国語」解得状況と「国語常用」状況に関する調査を行っている。官公署は「国語」普及率が最も高い職域に属するが、京畿道庁職員の配偶者のうち「国語」のみで日常生活が可能な婦人は223名、何とか「国語」で日常生活が営める婦人は77名、「国語」がまったくわからない婦人は77名だった。また、「国語」を完全に解する婦人は全体の6分の1強であったという。しかしながら、職員のうち、家庭で「国語」を常用しているのは63人で、全調査人員の17%に過ぎないとして、「国語常用」運動は官公署職員の家庭から徹底しなければならず、朝鮮人職員の「国語常用」を徹底して励行させるために、京畿道で具体的対策を研究中であると、「毎日新報」（1942年7月4日付朝刊記事）は報じている。

また、1942年5月上旬から6月11日まで京畿道総力課が調査したところによれば、京畿道内の「愛国班」33,027のうち、朝鮮人班長30,754人（「内地人」班長は2,273人）のなかで「国語を話し書くことができる」班長は11,637人、「国語を知らず諺文のみ書くことができる」朝鮮語のみ書ける班長は16,850人、「国語も諺文も知らない文盲」の班長は1,267人だった。

つまり京畿道内の愛国班長のうち、その6割は「国語」を知らなかった（「毎日新報」1942年6月12日付朝刊）。国民総力聯盟が「国民総力運動」として「国語常用」運動を進める上で、その最末端組織である「愛国班」班長のこうした言語状況は、将来的にも相当な困難を伴うものだった。

こうした状況において、たとえば京城府では「国語全解運動」の施策要綱を決定し、1942年7月9日、管下の府尹、郡守<sup>ふいん</sup>に対して一斉に運動を展開することを指示したが、その施策要綱には「国語常用の雰囲気の醸成をはかるため」に、「国語使用に対する批判的、揶揄的、妨害的に出ることがないやうな充分な施策」をなすと決定していた（「京城日報」1942年7月10日付記事「踏み出す“国語全解” 施策要綱を府尹、郡守に指示 一斉に猛運動を開始」）。

2002年8月、関西大学人権問題研究室が韓国で実施した植民地言語支配に関する聞き取り調査（参加者：鳥井克之、梁永厚、熊谷明泰、市原靖久、吉田徳夫）でも、かつて、全羅南道光州府の中等学校に通った経歴を持つ方は、私の質問に対して、「ほとんどの親が朝鮮語しか話せないのに、家の中で「国語」で話すことなんかするわけはないだろう」とこたえ、また、中等学校の友人たちと指先をナイフで切り、「国語」を絶対に話さないようにしようという血誓を立てたことがあると語った。また、梁永厚<sup>ヤンヨンフ</sup>研究員は、この聞き書き調査の結果を簡潔な形でレポートにまとめている。調査対象者は植民地時代に「国語常用」政策の下で学校教育を受けた体験を持つ5名の高齢者である。少し長くなるが、このレポートから「国語常用」に関連する部分を以下に紹介する。

小学校時代について……入学のとき面接試験があり、先生から足し算、引き算を聞かれた。一年生の国語読本の最初のページは「ヒノマルノハタ……」であった。担任先生も朝礼訓話をする校長先生も、日本語でしゃべるのでなにがなにかさっぱりわからなかった。日本語は自分たちの言葉でないことを知っていた。「国語常用」では、後から脅かすと「アヤ」

「オムマヤ」（感動詞の一種－引用者注）と朝鮮語が必ず出るので、その方法で担任の先生の印章が押してある罰札（小さい紙札）を取ったりした。罰札がなくなると体罰があった。体罰をよく加える先生を集団で肥溜めに投げ込んだことがある。「日本語ができないと、出世できないぞ」という脅しが、しょっちゅうあった。

中学校時代について……私立と公立にはちがいがあった。私立では秘かに朝鮮語を使い合った。罰札などもなかった。公立では「国語常用」が厳しく、上級生が使わないから、と学校当局に訴え、上級生が大量に退学処分されたこともあった。その学年の人が、同窓会会員に少ないこともあって慙愧にたえない。（中略）

解放後のこと……学校の先生は同胞ばかりになったが、「今後は出世したければ英語をよく学べ」という先生がいた。改めてハングルを習い、韓国語による文章の書き方を学ばなければならなかった。それは日本語でまず文章を書き、韓国語に翻訳するといった段階、頭の中で考えた日本語の文章を韓国語に置きかえて書く段階、そして、ようやく韓国語で考え、韓国語で文章を書けるようになった。5年ほどはかかったと思う。小・中の教師になっても、はじめは韓国語が不十分であったが、40年余りを勤めるなかで、いつの間にか韓国語で考えるところへ変っていた。（梁永厚「韓国の「日本語世代」－訪韓・聞き取り調査レポート－」〔「関西大学人権問題研究室室報」第30号、2002年12月〕）

「毎日新報」（1942年6月22日朝刊）は「湧き上がる国語熱－知っていて使わないものは非国民 各地で走馬に鞭打つ普及運動」という見出しで、国民総力釜山府聯盟指導委員会において決定された「国語普及運動実施要綱」を紹介している。この中で、「国語を解する者に対して常用させる方策」の一つとして、「国語を解得しながらも、これを常用しない者に対しては、その勤務先、または所属団体と連絡を取って、その必行を期させること。更に必要な場合にはその住所、氏名、勤務先、所属団体名などを府聯盟に

通報すること」として、監視強制を強めることを決めている。当時、これよりも更に強硬な「国語常用」方策がさまざまに実施されていたが、このことについては本誌第48号掲載の拙稿にまとめておいたので、ここでは詳細には論じない。

児童生徒に対して、学校の内外を問わず「国語常用」を強いる地方行政機関が考えた方策の一例として、次のようなものがある。

「各学校に於ては、児童生徒に対し之が常用強化を図り、校内、及登校下校の途中、国語を使用せざるものは嚴重措置する方法を取ると共に、家庭に帰りても父兄の国語をするものは之を常用するは勿論、解せざるものと雖、日用の挨拶、短語等、家族相對に常に国語を使用せしめ、子供を通じ家庭生活に於ける国語の普遍化を図ること。」<sup>19</sup>

当時、婦人層における「国語」の普及状況はとりわけ低調であったため、婦人層の「国語」普及率を高めることも「婦人啓蒙運動」の重要な政策的課題としても取り上げられていた。同じく地方行政機関が作成した文書でも、「国語を解する者にして常用せざる傾向あり。特に、婦女子に於て然りとす。一般民衆をして根本理念を把握せしめ、国語に近づかしめ、親ましむる為には、之等解する者をして絶対常用を必須の要件とす。特に、家庭に於ける婦女子の常用は、国語普及上、頗る有力なり」<sup>20</sup>とか、「家庭の主婦として時局下、貯金、食糧、経済など家庭内に多くの力を持ってゐる婦人に国語を解せしむることは急務中の急務であり、ことに国民学校児童の如き折角覚えた国語も母親が解せざるため、家庭で用ひぬことは常用を破壊することになるので、婦人講習にも重きをおきたいと思ふ」（黄海道

---

19 上記会議で黄海道知事が下した国語常用徹底に関する諮問に対する載寧郡の答申書。

20 同上諮問に対する慶尚北道金泉郡の答申書。



海州府の府尹談話)<sup>21</sup>とか、「学校で如何に醇正な国語を教へ、これに習熟せしめるやうに努力しても、一步校門を出れば朝鮮語が耳をうち、家庭に帰れば朝鮮語で生活するやうでは、国語教育の成績を多く期待することができぬ」（朝鮮総督府学務局大槻芳広談話)<sup>22</sup>とか、「地方有力者、有士、名士等、指導者階級□者にして国語を充分解し、外部に於ては常に国語を使用するものも、一旦家庭に入りたる場合は、全く鮮語のみを使用するもの甚だ多き現状にして、寒心に堪へざるものあり。依つて、全鮮運動の展開に依り、之等有士の自覚を促し、“国語常用も先づ家庭から”のモットーの下に、急速実施を促すを要す。」<sup>23</sup> とかいう主張は、家庭内言語が朝鮮語である状況を打開しない限り、朝鮮社会における「国語常用」は実現し得ないことに言及しているものである。

江原道道知事から下された「国語生活の促進徹底」に関する諮問（1942年5月15日）に対して江原道淮陽郡が提出した「諮問答申書」では、「家庭国語会話は、家庭同志者間は相互遠慮する向、少なきものなるを以て、国語速急習得する一方策と思料し、国語理解者を有する家庭にありては、毎日夕食後、必ず国語会話を開催せしむることとし、之が反復励行によりて、全家国語習得の目的達成に資せしむ」という方策を提示している。しかし、これはまだしも穏やかな方であつて、江原道楊口郡が提出した「諮問答申書」では、以下に紹介するように、家庭内言語の「国語」化を進める方策として、親が「国語」が解しない場合でも、ひとまず「国語で対話」することを求め、赤ん坊に対しても朝鮮語で話しかけることを禁じるという強硬策を打ち出している。

「…（ハ）学校生徒、児童の絶対国語使用の励行＝生徒児童は、従来よ

21 「朝日新聞」西鮮版1942年7月12日付記事「各町毎に国語講習会/海州で開く」。

22 「朝日新聞」南鮮版1942年12月5日付記事「国語問題を俎上に/本府学務局大槻氏に聴く」。

23 咸鏡南道知事から下された国語常用の普及徹底に関する諮問（1942年5月）に対する元山府の答申書。

り朝鮮語使用禁止の学校の命令を固く厳守し、之が必ず国語使用を励行し来たれるところ、尚、家庭に帰りても日常会話（特に族称、衣服、飲食、家具器物類）は国語をモットーとし、喩へ父兄が未だ国語を解せざる場合と雖も、先づ国語で対話し、更に必要に応じ当分間通訳を為す<sup>ゆる</sup>緩しを与へると共に、該校訓導は各家庭を査察に赴き、其の普及、並<sup>ならびに</sup>指導の徹底を期すること。（二）赤坊に対する国語使用の指導＝初めて話を稽古する赤坊に対しては、爾<sup>じこん</sup>今、朝鮮語使用を絶対禁止せしむると共に、必ず語法に依り日用単語を習得せしむることを指導すること。』<sup>24</sup>

朝鮮総督府は、朝鮮民衆がアジア・太平洋戦争に協力し、徴兵制の下で一命をも差し出すようにさせる為には、皇民イデオロギーの注入が必要だと考え、このためには「国語常用」を実現することが重要課題であると考えていた。慶尚北道高尾知事が記者団との定例会見（1942年5月14日）で行った以下の談話も、そうした考えを表明したものであった。

「日本の兵隊が神兵と呼ばれ世界無類に強いことは、そもそも母性教育において、常に家庭にあつて皇室中心の感謝生活をなし、子供をして忠君愛国の精神に燃えたたせるからであります。この点、特に半島母姉婦人の自覚を促し、強く正しい忠良なる子供を育成し、名誉の軍人たらしむるの強い母姉の覚悟が必要であります。この機会に識者にあつては、広く半島母姉婦人に呼びかけ、来るべき徴兵制に対する理解と自覚につとめられるとともに、国語生活実践により日本精神把握に邁進せらるるやう、努力されたい。』<sup>25</sup>

---

24 江原道知事から下された国語常用徹底に関する諮問（1942年5月15日）に対する楊口郡の答申書。

25 「大阪毎日新聞」南鮮版1942年5月16日付記事「半島母姉婦人の子女教育に期待/高尾慶北道知事談話」

「一日一語運動」の狙いは、主に国民学校の生徒を通じて、「国語常用」が最も立ち遅れている一般家庭における「国語」の普及・使用を進めようとするものだったが、これは「国語常用」を白眼視する朝鮮民衆の民族意識を押しつぶそうとするところに、その意義が見出されていた。宗主国語の支配下で俗語の地位に落としこめられていた朝鮮語にとって、最後の砦ともいえる朝鮮民衆の家庭内言語を「国語」に取り替えさせようとするところこそ、「一日一語運動」が目指すところだった。なお、「一日一語運動」は、「国語普及運動要綱」を契機にして本格的な展開を始めたが、児童を通じて家族に1日当たり1語を教えさせるという「国語」普及方法は、京畿道金浦郡、京畿道坡州郡（1938年より実施）、黄海道黄州郡など一部の地域では、既に独自の実施されていた。

### 3. 「府尹郡守会議」における「諮問答申書」で講じられた「一日一語運動」の具体的方策

「国語普及運動要綱」が決定された1942年5月6日以後、各道で相次いで開かれた「府尹郡守会議」では、「国語常用・国語全解」についての諮問が道知事からそれぞれの下級行政機関に対してなされた。この諮問を受けて各地方行政機関から提出された「諮問答申書」は、「国語普及運動要綱」の骨子に沿って作成された。ちなみに、各道知事からなされた国語普及徹底に関する諮問のタイトルは以下のようなものだった。

「国語全解運動の現状に鑑み、之が強化徹底を期すべき具体的方策如何」（京畿道府尹郡守会議における道知事諮問、5月7日～9日）

「管下の実情に即し、国語の急速且全面的普及、並に其の常用を促進せしむる具体的方策」（慶尚北道府尹郡守島司会議における道知事諮問、5月11日～12日）

「向ふ五ヶ年を期し、道内半島同胞の男女老若を通じて国語の全解を期し、

且国語の常用を目標とし、其の実現を図らんとす。これが具体策如何」  
(咸鏡北道府尹郡守会議における道知事諮問、1942年5月12日～14日)  
「国語常用を急速に普及徹底せしむる方策如何」(咸鏡南道府尹郡守会議  
における道知事諮問、5月13日～15日)  
「国語生活の促進徹底を図るが為に採るべき方策如何」(江原道府尹郡守  
会議における道知事諮問、5月14日～16日)  
「国語普及と之が常用の徹底に関し、適切なりと認むる施策如何」(全羅  
南道府尹郡守島司会議における道知事諮問、5月14日～16日)  
「国語の普及徹底上、最も有効適切と認むる具体的方策」(慶尚南道府尹  
郡守会議における道知事諮問、5月25日～27日)<sup>26</sup>  
「国語の常用を一層徹底せしむる体的方策如何」(黄海道府尹郡守会議に  
おける道知事諮問、5月25日～27日)

これらの各道知事からの諮問に対して、各道の下級行政機関から提出され  
た「諮問答申書」には、「一日一語運動」実施のための具体的方策が随  
所に記されている。その多くは国民学校に通う児童を通じて実施しようと  
するものだったが、中等学校学生、愛国班、青年会などで実施する方策も  
講じられていた。

「一日一語運動」実施用の用語集や教材についても、以下のようなさま  
ざまなプランが立てられていた。なお、「諮問答申書」の原文には句読点  
がほとんど付されていないが、読みやすさを考慮し、適宜、筆者が句読点  
を追加して示した。また、原文は漢字・カタカナ交じりの文であるが、カ  
タカナをひらがなに変えて示した。旧漢字は新漢字に置きかえて示した。  
なお、判読不明の部分は□で示した。括弧内には「諮問答申書」を作成し  
た地方行政機関名を記した。

---

26 慶尚南道については、諮問に対する答申書の所在が確認されていない。

「平易、且つ実用的の家庭国語読本とも称すべき小冊子を編纂」（京畿道京城府）、「回覧板を通じて一ヶ月の教材を選定」（京畿道仁川府）、「国民学校教員をして、一日一語程度の絵文字を謄写刷にして、児童の家庭に配布」（京畿道高陽郡）、「一日一語普及票を作製し、学校より児童を通じて簡易なる日常語を家庭に普及せしむる」（京畿道始興郡）、「日常使用の簡易なる用語集を編纂」（京畿道始興郡）、「（一日一語習得チェック用の）カード」（京畿道金浦郡）、「各人毎に国語習学帖を設け、自己の習得したる単語を日々記帖し、記憶復習に努めしむ」（江原道淮陽郡）、「各家庭日常生活に日常必要なる単語毎日一語以上習得を目標として、単語カードを配布」（江原道淮陽郡）、「簡単なる国語教本を編纂」（江原道鉄原郡）、「国語に諺文を附したる日用語の単語カードを調製」、「国語速成読本を配布」（咸鏡北道富寧郡）、「一日一語票を作製」（全羅南道珍島郡）

また、「一日一語運動」の進捗状況をチェックする方策として、「毎朝会の際、校長より一語を指示し、児童は其の一語を家族の者に授けられたる父母兄妹等をしてカード書かしめたる上、翌日之を学校に持参、教師の査察を受けしめ…」（京畿道金浦郡）、「学校にありては、常に其の進捗状況に留意する」（慶尚北道安東郡）、「一週一回程度、右結果を調査し復習せしむる為、生徒児童の母を学校に集合せしむ」（慶尚北道尚州郡）、「学校の先生は時々家庭訪問と同時に其の状況激励をなし、成績優秀者に対しては校長より選賞」（江原道江陵郡）、「学校職員随時各家庭を訪問査察し、効果挙揚に努むる」（江原道洪川郡）、「受持教師をして月一回巡廻指導督促を加へると共に、其の成績優良なる児童には学年末表彰の方途を講ずる」（咸鏡南道文川郡）、「（日常単語の伝授状況を）学習帳に記入せしめ、教師は時々これを検閲」（咸鏡南道長津郡）、「実施状況を監視する等、一層指導の徹底を図る」（黄海道海州府）、「教職員は常に査察を厳にし、実行の徹底を図る」（黄海道松禾郡）、「之が成績は愛国班常会の際、郡、邑面、

学校職員調査督励をすること」(黄海道安岳郡)、「(児童の家庭に対して) 関係教職員をして其の結果を査察せしむる」(黄海道谷山郡)、「(愛国班員に対して) 愛国班を単位として、解得班員が主体となりて、其の班員に対し一日一語宛解得せしめ、其の結果を郡面職員をして査察せしむる」(黄海道谷山郡)「時々、其の成績を審査して、物資配給に考慮を加へる」(全羅南道光陽郡)、「毎日、其の状況を聴取採点する等、積極的に指導監督を加ふる」(全羅南道長城郡)、「一方、教職員に於ては随時巡廻、之が実践状況、並に実情を査察指導(実践は実績査察簿を備付、之に記入のこと)する」(全羅南道珍島郡)などの具体的方策が講じられていた。

次に、「諮問答申書」に書かれている「一日一語運動」実施に関する方策を、以下に一括して紹介する。

#### 「諮問答申書」に記載された「一日一語運動」実施のための具体的方策

「国民総力京城府聯盟の機構を通し、国語を解せざる愛国班員に対し、概ね区を単位とし国語普及短期講習会を開催せしむるの外、平易且つ実用的の家庭国語読本とも称すべき小冊子を編纂□各家庭に配布し、之が自習に便ならしめ、一日一語の解得を図らんとす。」(京畿道京城府)

「学校の生徒児童に対し、家庭に於ける国語常用の觀念を強固ならしめ、以て家庭に於ける国語未解者に対しては、生徒児童を通し一日一語を解得せしむるやう、指導せんとす。」(京畿道京城府)

「回覧板を通じ、一ヶ月の教材を選定し家庭を中心に修得せしむ(一日一語修得を目標)。」(京畿道仁川府)

「国民学校教員をして、一日一語程度の絵文字を謄写刷にして児童の家庭に配付せしめ、国民学校の児童をして之が伝授に当らしむ。」(京畿道高陽郡)

「児童を通じて家庭への指導(一日一語)。」(京畿道楊州郡)

「(国民総力朝鮮連盟の実践事項として) 臨地実物主義を以て、速成的に日常必要語の一日一語普及に努む。」(京畿道楊州郡)

「学校児童を通じて、一日一語解得主義による家庭への国語普及運動の徹底を計ること。」（京畿道漣川郡）

「（国語全解運動の強化徹底の具体的方策の一つとして）一日一語主義。」（京畿道抱川郡）

「国語解得者（特に国民学校児童）をして、其の家庭に於ける一日一語普及を必行せしむること。」（京畿道加平郡）

「学校児童に依る一日一語方法の実施＝本件実施を簡易ならしむる為、専門家をして1年（約300日）分を順序よく抜粋編纂せしめ、之を各学校に配布するを便とす。」（京畿道驪州郡）

「一．国語解得者に対する国語の常用を一層徹底せしむること。二．国民学校生徒を通じ、家庭に普及浸透せしむること。三．速に青年層に対する全解を促進する為、未解得者に対しては青年隊の事業として必ず講習会の施設を講ぜしむること。四．国語解得者を動員し、各部落毎に講習会を開催せしむること。五．先づ、日常生活に最も必要なる最少限度の用語を解得せしむるを主眼とした講習会用の手引を編纂配付せらるること。六．文字と共に解得せしむることも全解運動の初期として大量に先づ<sup>および</sup>耳及口より覚え語らしむることに重点を置くべきこと。」（京畿道利川郡）

「国民学校教育を中心として国語一日一語普及票を作製し、学校より児童を通じて簡易なる日常語を家庭に普及せしむると共に、学校児童に対し学校と家庭と連絡し、必ず家庭に於て国語を使用せしむること。」（京畿道始興郡）

「絵画と単語を配せる単語カードを月数枚発行、家庭に配布し居室に常掲せしめ、一定期日を経て一家の成績を記入して返送せしむ。」（京畿道富川郡）

「日常使用の簡易なる用語集を編纂して国語未解者全部に配付し、部落聯盟常会、<sup>および</sup>及愛国班常会に於て毎月二十五語以上を標準とし解得せしめ、翌月の常会に於て前月中に習得したる用語に付、約十分間会話を為さしめ、其の進度を点検し、国語習得に関し誠意ある者に対しては、特に優遇の方

法を考慮する等に依り、以て国語解得の促進を図ること。(中略) 国民学校教育を中心として、国語一日一語普及票を作製し、学校より児童を通じて簡易なる日常語を家庭に普及せしむると共に、学校児童に対し学校と家庭と連絡し、必ず家庭に於て国語を使用せしむること。」(京畿道始興郡)

「国民学校児童を介して、一定の系統案に基き、各其の家庭に一日一語の解得に努めしむ。」(京畿道富川郡)

「一日一語普及主義展開 = 各国民学校3年以上の児童を通じ、毎朝会の際、校長より一語を指示し、児童は其の一語を家族の者に授けられたる父母兄妹等をしてカード(雛形別紙の通)書かしめたる上、翌日之を学校に持参、教師の査閲を受けしめつつあり。特に霞城公立国民学校の如きは、既に相当の成績を揚げつつあり。」(京畿道金浦郡)

「既に一部の学校に於て実施し来りたる児童を通じて一日一語伝習会(管下炭縣校に於ては昭和13年より実施中)。」(京畿道坡州郡)

「(家庭用語の国語化を促進するため) 解せざる者に対しては、一日一語運動其の他の方法に依り口授を行ひ、漸次国語生活に導かしむること。」(慶尚北道大邱府)

「学校児童を通して、各家庭に対し一日一語教授主義を其の家庭に実行せしめ、且<sup>かつ</sup>国語を解する家族間の対話は務めて国語を以て使用するやう、措置訓育すること。」(慶尚北道達城郡)

「小学校に在りては、児童に対し一日一語主義にて其の家庭普及用語を授け、児童を通じ家庭の普及方法を講ずること(右は長期的に持続すること)。学校に在りては、常に其の進度状況に留意すること。」(慶尚北道安東郡)

「官公署、学校各種団体職員、並に<sup>ならび</sup>学校児童に対し、其の長より毎日国語一句宛の課題を示し、翌日迄に必ず家族全員に習得せしむる様指導すると共に、家庭に於ても可級的国語常用に努むること。」(慶尚北道青松郡)

「(国民総力聯盟の愛国班では) 毎日の朝会には各家庭の責任者(又は代表者)を集め、一日一語の指導をなす。」(慶尚北道慶州郡)

「学校児童を通じて、一日一語を各家庭に普及せしむること。」(慶尚北道



慶山郡)

「学童を通じて各家庭に及ぼし、先づ、生活上必須なる国語を一日一語宛習得せしめんとす。殊に、子女育成の任にある婦人に常用せしめ、母を通じて幼児に及ぼし、漸次全家族に常用せしむること。」(慶尚北道清道郡)

「学校児童を通じ、其の家庭に於ける国語未解家族に一日一句を習得せしむ。一日一句の選定は系統的に学校に於て之を授け、漸次国語習得熟を昂揚せしむ。」(慶尚北道高靈郡)

「平常の教へる方法としては、前項教本（各戸1冊ずつ配布予定の「簡易なる教本」一注）に基き、学校卒業者、及、現に通学中の児童ある家庭には、之等の者をして一日一語づつ教へること。」(慶尚北道星州郡)

「生徒児童をして一日一語宛家族に教へしむ。一週一回程度、右結果を調査し、復習せしむる為、生徒児童の母を学校に集合せしむ。」(慶尚北道尚州郡)

「(官公署、その他団体の)職員全員を通し、日々接する未解得者に対し、其の都度一人一日一語解得主義にて、之が教習に努めしむ。」(江原道春川郡)

「生徒児童は家庭に入りても、学校に於けると同様国語を常用し、父兄兄弟にして未解得者あるときは、一日一語解得主義にて之が教習に努めしむ。」(江原道春川郡)

「各愛国班に於て、班員中、国語未解者に一日一語習得を期し、班内学校児童等に就き、夜間機会ある毎に集合し、日常簡易なる単語の習得をなさしめ、各人毎に国語習学帖を設け、自己の習得したる単語を日々記帖し、記憶復習に努めしむ。各家庭単位の日常通用語の一日一語習得の実践を図ること。各学校にありては、学校児童を通し、各家庭に日常生活に実際必要なる単語毎日一語以上習得を目標として単語カードを配付し、之が実践に努めしむ。」(江原道淮陽郡)

「各家庭児童生徒に依る一日一語実行を為すこと。」(江原道高城郡)

「国民学校児童の在る家庭に於ては、国語未解家族に対し一日一語の新語

を修習せしめ、学校の先生は時々家庭訪問と同時に其の状況激励をなし、成績優秀者に対しては校長より選賞のこと。」(江原道江陵郡)

「学校児童を通じ一日一語普及。」(江原道三陟郡)

「各学校に於ては、生徒及児童を通じ、各家庭への一日一話の普及徹底に工夫すること。」(江原道蔚珍郡)

「昭和十六年末、郡内国語を解する者の数、男女を通じ<sup>やや</sup>稍解得者2,214人、会話に差支なき者1,447人、合計3,661人にして、全人口の約6%に過ぎざる現状に鑑み、全愛国班を通じ、左の方法に依り一日一話習得を企画すること。(イ) 主人、主婦何れか解する家庭に於ては、之が全家族の教授に当ること。(ロ) 家族中、解する者又は学校通学生ある家庭に於ては、之が教授に当らしむること。(ハ) 全然未解者家庭に於ては、一人以上必ず講習会の国語修得を受けしむること。」(江原道旌善郡)

「毎月、愛国日常会は勿論、講話会、座談会、其の他地方的郡民の各種会合ある場合には、其都度、主務者又は国語理解者をして平易なる国語を数語つつ教授せしめ、以て国語習得を一般国民運動たらしむること。」(江原道洪川郡)

「国民学校に於て国語一日一語票を作成し、児童を通じて簡単なる日常用語を家庭に普及せしめ、学校職員随時各家庭を訪問査察し、効果挙揚に努むること。」(江原道洪川郡)

「学校児童を通じて、一日一語の国語普及指導に努むること。」(江原道金化郡)

「児童を通じ、一日一語の指導を為さしむ。」(江原道鐵原郡)

「簡単なる国語教本を編纂し、国民学校児童を通じて普及を図ること。児童は家庭に於ける国語普及推進隊員たるの自覚を与へ、父兄一般に一日一語宛教へしむ。」(江原道鉄原郡)

「国民学校に於ては、児童を通じ、日課として一日一語を各自、家の国語未解家族へ習得せしむること。各青年隊に於ては、国語を知らざる隊員には隊自体の事業として、国語未解者に対して一日一語の研究を為さしめ、

急速的普及を図ること。」（江原道伊川郡）

「学校中心にて、児童を通じ一日一語主義を以て、之を家庭全般に及ぼし、受持教師をして月一回巡廻指導督励を加へると共に、其の成績優良なる児童には学年末表彰の方途を講ずること。」（咸鏡南道文川郡）

「学校生徒をして、自宅に於て夕食後等の適当なる機会に、簡易なる日常単語を毎日1、2語ずつ伝授せしめ、それを学習帳に記入せしめ、教師は時々之を検閲し、伝授方法を聴取り、注意激励を与へ、一般家庭に国語習得の興味を持たしめ、漸次普及せしむること。」（咸鏡南道長津郡）

「各機関の責任者は常に国語使用の状況に留意し、極力之が普及勸奨に努むるは勿論、各国民学校（含、簡易学校、改良書堂）に於ては、特に簡易なる会話用の国語を在学の全生徒に対し、一日に一語宛必ず選定し、之を児童を通じて家族の者に迄習得せしむる、所謂一日一語解得を目標とし、国語常用普及を図るを緊要策と認む。」（咸鏡南道三水郡）

「児童、生徒、学生を通じ「一日一語」の目標を以て、未解の家族に対し国語を習熟せしむること。」（咸鏡北道羅津府）

「各学校に於ては、国語一日一語普及票を作製し、児童に之を教へ、其の児童を通じて家庭の父兄に簡単な日常語を普及せしむるの方法を講ずるを、効果的なりと認む。」（咸鏡北道明川郡）

「学校の児童生徒をして「一日一語」主義を以て家庭に之を普及せしむると共に、中等学校生徒をして休暇中、本運動に協力せしむること。」（咸鏡北道吉州郡）

「学校生徒児童に対しては、国語常用の習性を涵養するため、学校内外を問はず朝鮮語の使用を厳禁し、之を通じて各家庭に必行事項として「一日一語」主義の徹底を期し、その普及を図ること。」（咸鏡北道鶴城郡）

「国民学校児童約四千名（約三千戸）を通じて、各家庭に普及徹底せしむる為、国語速成読本を配布し、未解全家庭に対し毎日一語宛一年間三百語内外を解得せしむる場合は、五ヵ年間約千五百語を会得し、簡単な会話の出来得る者約一萬五千人に達する見込とす。尚、在校生家庭に対する指

導督励には、専ら学校職員之に当たるものとす。」(咸鏡北道富寧郡)

「(中等学校以上の) 学校在学生を督励し、国語普及一日一語の信念の下に、其の家庭に国語を浸透せしめ、理解習得に徹せしむること。」(咸鏡北道穩城郡)

「各公立学校児童を通じて、一日一語指導表に依って各家庭に国語の普及を図り、国語常用を進ましむるを努めんとす。」(忠清南道瑞山郡)

「本道国民学校経営研究会に於て、学校児童を通じての国語普及策として、「一日一国語家庭化運動」を決議せられたる処、之が強化を図る為、学校職員の家庭訪問に際し、之等の実施状況を監視する等、一層指導の徹底を図ること。」(黄海道海州府)

「昨年十月、管下教育者会同の席上之を決定し、児童一人一日一語を家庭に教へ得る様申合せ、□□実施中なり。指導力低弱なる児童なるを以て所期の効果を得ざるも、更に上級生を中心に之が実績を収むる様、強化せんとす。」(黄海道延白郡)

「各学校に於ては、各地方の実情に照し、父兄母姉に伝授すべき言葉約三百語を予め選定し置き、朝会暮会等に於て全生徒児童に同日同一の一語を伝授することとし、一ヶ面内一語を充満せしめ、之が徹底を期すること。」(黄海道平山郡)

「聯盟毎月の実践要項に倣ひ、簡單なる日用語は一日一語とし、尚、実用語を毎月五語制を制定し、之を全聯盟員に呼び掛け、其の月分は必ず其の月に習得せしむるやうすること。」(黄海道甕津郡)

「学校の生徒児童は家庭に於ても国語を常用し、一日一語其の他の方法に依り、家庭之に倣ひ習得するやう、積極的に指導すること。」(黄海道長淵郡)

「学校児童を通じ、一日一語の普及を徹底せしむること。学校の児童に対し国語配当表を配付し、各々其の家族に対し必ず一日一語を授くるやう督励すると共に、教職員は常に査察を厳にし、実行の徹底を図ること。」(黄海道松禾郡)

「生徒児童は校庭内に於ては殆んど完全に国語常用をなすも、家庭に帰りては殆んど国語常用を為さざるは、父母兄弟中、国語を解する者なく、話す相手なきに依るを主たる原因とするに付、特に家庭婦人の啓蒙を図るべく、生徒児童を通じ日常最も多く使用する国語を一日一語宛父兄に習得せしめ、教職員は常に査察を厳にし、実行の徹底を図ること。」（黄海道安岳郡）

「現に学校に於て実施しつつある一日一語運動を強化し、其の徹底を期すること。」（黄海道黄州郡）

「内地人<sup>および</sup>及国語を解する朝鮮人は協力指導の態度、未解者は自己修学の態度を採り、以て生徒、児童の国語使用を奨励し、且つ国民学校等に於て奨励する「家庭一日一語修得運動」を了解協力すること。」（黄海道遂安郡）

「国語習得は家庭よりするを最も効果あるべきを以て、生徒児童による「一日一語運動」を徹底強化すること。」（黄海道遂安郡）

「各国民学校、簡易学校等の児童を通じ、一日一語を各家庭に普及せしめ、関係教職員をして其の結果を査察せしむること。愛国班を単位として、解得班員が主体となりて、其の班員に対し一日一語宛解得せしめ、其の結果を郡面職員をして査察せしむること。」（黄海道谷山郡）

「国民学校に於ては、国語に諺文を付したる日用語の単語カードを調製し、学校児童をして一日一語以上を其の全家族に伝授せしめ、時々、其の成績を審査して、物資配給に考慮を加へるも一方法なりと思料す。」（全羅南道光陽郡）

「一般家庭に於ては、学校児童を通じ一日一語の習得を必行事項とし、「国語の家」として国語普及常用の励行を図ること。八才未満の幼児に対しても、簡単なる日用語（例へば父、母、お早ふ、有難ふ等）は、努めて国語を習熟せしむること。」（全羅南道麗水郡）

「学校児童を通じ、父兄母姉に対し一日一語習得の奨励。此の際、学校児童を通じ父兄母姉に対し国語普及の趣旨徹底に努むると共に、一日必ず一語を習得せしむる習慣を<sup>じゅんち</sup>馴致せしむるは、<sup>けだし</sup>蓋効果ある方策なりと認む。」

(全羅南道高興郡)

「学校に於ては生徒児童を通じ其の父兄母姉に対し一日一語を勧奨し、学校に於ては父兄会母姉会を年四回位開きて習得状況を調査すると共に、其の実績に応じて奨励するを要す。」(全羅南道宝城郡)

「父兄に対し一日一語の習得を目標とし、児童をして必ず之を実行せしめ、以て毎日、其の状況を聴取採点する等、積極的に指導監督を加ふること。」

(全羅南道長城郡)

「生徒児童を通じて、学校生徒児童を通じ一日一語を励行せしむること。即ち、生徒児童の国語生活を徹底せしむると共に、予め一日一語票を作製し置き、之を与へて該生徒児童家族に及ぼし、一方、教職員に於ては随時巡廻、之が実践状況並に実情を査察指導（実践は実績査察簿を備付、之に記入のこと）すること。」(全羅南道珍島郡)

「各部落、各家庭を通し、一日一読必解を期する為め、総力聯盟の毎月実践必行要目に当月分の必解国語を加へ、得修せしむること。」(全羅南道済州道)

#### 4. 「一日一語」の語彙

「一日一語運動」は朝鮮全土で展開されたが、その際用いられたさまざまな語彙集などは、現在ほとんど残っていないようである。ただ、先に列挙した「諮問答申書」に書かれた「一日一語運動」実施のための方策のうち、京畿道金浦郡の「諮問答申書」には「一日一語」の雛形が紹介されている。それは1枚の表の形式になっており、国民学校3年生以上の児童に家庭に持ち帰らせ、父母兄弟に習得状況をチェックさせた後、学校に持参させて教師が「査閲」というものだった。この「一日一語」カードの雛型には、1日から31日まで、毎日習得すべき語が一つずつ記され、それぞれのことばに対して家族5人分の欄を設けてあり、各家族毎に習得状況をチェックさせるようになっている。1日から31日までに習得すべきもの

して、以下のことばが並べられている。

オハヨウゴザイマス、コンニチハ、コンバンハ、サヨウナラ、アリガトウ、ハイ、イイエ、ヘイタイサン、ヒコウキ、タ、ハタケ、オトコ、オンナ、ウシ、クサ、タベル、オテンキ、カゼ、アメ、オウキイ、チイサイ、アサ、オキル、バン、ネル、ガツコウ、センセイ、メンチョウサン、ウレシイ、アツマル、カエル

また、同じく金浦郡の「諮問答申書」では、将来の具体的方策の一つとして「国語の一斉指導日」を設定し、「月数回、一定日を指定し、各指導機関総動員を以て、別途制定の単語読本に依り一斉指導を為さしめんとす」としている。そして、『国語単語読本』を国民総力金浦郡聯盟で発行し、これを郡や面の職員に常に携帯させるようにして、「民衆の会合」の場で数語ずつ教えさせつつあるとして、この『国語単語読本』を紹介している。ただし、これは「一日一語運動」そのものの為に作成されたものとは言えないが、当時どのような「国語」の語彙を「日用語」として習得させ、日常的に使用させようとしていたかを知る上でも参考になるだろう。

この冊子は「一、本書は国語全解運動に関する各種講習会用の読本として編纂したるものなり。二、各種講習会は勿論、其他常会、各種集会の際利用されたり」という前書きの後に、653語の語彙リストを掲げている。この語彙リストには親族名称、動植物名などが多く含まれ、農村社会の日常生活語彙に重点が置かれる一方、動詞は8語しか選ばれていない。こうした語彙リストの習得によって想定される家庭内言語の「国語」化とは、朝鮮語の中に日常生活関連の「国語」語彙を混用させていく混淆言語化をすすめようとするものであったことが伺われる。実際に、以下に示すように「国語」語彙の混用を進める方針が「諮問答申書」にも記されている。

「国語を以て会話を為し得ざるもの<sup>いへど</sup>と雖も、一度解得したる国語は朝鮮語

使用の際に於ても常に之を混用し、国語常用に親しみを感ぜしむること。」  
(黄海道長淵郡)

「愛国班常会の都度、日常用語又は常会用語中、簡易なるものより選択し、  
2, 3語宛なりとも習得せしめ、次の常会に於ては必ず之を使用し、以て  
漸次全解を期せしむること。」(黄海道長淵郡)

「未解者に対しても、出来る得る限り国語を混用し、必要を感ぜしむること。」  
(京畿道長湍郡)

「国民学校児童を通じて家庭へ普及＝家庭に於て国語未解者に対しての混  
用奨励。家族への国語教授の奨励。日用語の簡易なるものを口授練習せし  
む。」(京畿道長湍郡)

「国民学校児童を通じて家庭へ普及。家庭に於て国語未解者に対しての混  
用奨励。」(京畿道長湍郡)

「<sup>やや</sup>稍国語を解する者も、鮮語と国語を混用し使用する様、指導すること。」  
(慶尚北道聞慶郡)

「愛国班常会等に於ては簡易なる単語は国語を使用し(ラヂオ放送に於て  
固有名詞を国語にて表はすと同様)、以て班員に対し国語習得熱を喚起せ  
しむること。」(黄海道谷山郡)

「日本、朝鮮、支那、満州、南洋、昭南島、佛印、印度等、其の他の国名  
又は地名と、天皇陛下、皇后陛下、皇太子殿下の尊称、其の他皇国民とし  
ての信念を深からしむるの主用語より始め、<sup>たとい</sup>縦令国語不解者なりとも国語  
にて使用せしむる様、指導<sup>じゅんち</sup>馴致を為さしむること。」(慶尚北道盈徳郡)

「固有名詞は少くとも、絶対的に国語を用ふること。」(全羅南道麗水郡)

「(1) 駅、停留場等の地名は勿論、其の呼称を国語読とすること。(2) 創氏改  
名等の人名呼称を鮮語読とする向あり。早急に国語読に改むること。(3) 物  
名にして従来のも、及新しき命名は総べて国語とすること。」(黄海道遂  
安郡)

「管内一般に各自住所氏名は国語にて呼称せしむ。」(京畿道開豊郡)

「創氏改名による固有名詞の発音の如きは、絶対国語たらしむること。」(全



羅南道濟州島)

「商業用語中、物品名、金銭計算等は国語を以てする様、仕向けしむること。」(咸鏡北道吉州郡)

「日用品の名詞、地名、官公署、人名等の固有名詞を始め、其の他時局用語、流行歌、民謡等は総て国語を以て通用せしめ、国語の民衆化、通俗化を図ること。」(慶尚北道醴泉郡)

「日常生活に関するものにて名詞等は努めて之が国語にて呼称対応する様、奨励中なり」(京畿道驪州郡)

「生徒、児童を有する家庭に於ては、是等を通じて日常用語は総べて国語を以て用を弁ぜしむる。」(慶尚北道醴泉郡)

「生徒児童は従来より朝鮮語使用禁止の学校の命令を固く厳守し、之が必ず国語使用を励行し来たれるところ、尚家庭に帰りても日常会話（特に族称、衣服、飲食、家具器物類）は国語をモットーとし、喩へ父兄が未だ国語を解せざる場合と雖も、先づ国語で対話し、更に必要に応じ当分間通訳を為<sup>ゆる</sup>□緩しを与へると共に、該校訓導は各家庭を査察に赴き、其の普及並<sup>ならびに</sup>指導の徹底を期すること。」(江原道楊口郡)

「国語普及には仮名の習得最も緊要なるに付、日用品其の他総ゆる物品の名称は仮名を以て表示し、之を会得せしむること。」(咸鏡北道会寧郡)

「半島人家庭の主婦は、其の大多数の者国語を解せざるのみならず、有識層の婦女子にして国語を解するも、家庭にありては之を使用せざる向多し。仍<sup>よつ</sup>て、此等有識層の婦女子に対しては、戸主を通じ、又は学校の生徒児童を通じ、積極的に国語の常用を呼掛くると共に、国語を解せざる主婦に対しては、家庭生活の内地化を強調し、食事、服制等根強き因襲を有する慣例ありと雖<sup>いゝども</sup>、急速に改善し得ざるものを除くの外、日常私生活に於ける各般の生活様式を内地化せしむることに努め、例へば真鍮製食器、匙、水鉢等の全廃運動を強化し、内地式の茶碗、箸を使用せしめ、朝鮮式箆笥、家具等の製造販売を制限し、之を内地式に改め、之が使用に当りては名称は勿論使用方法等を国語化し、漸次国語の使用を趣味化し、自ら進んで国語

を常用することに仕向くること。」(黄海道鳳山郡)

「事業場に於ける技術用語は国語を以て統一す。」(京畿道高陽郡)

「会社、工場、鉱山等に於ては特設国語講習所を開設し、日常単語は勿論、技術用語、工務上の用語等を速に修得させ、作業場に国語常用化を図らしむると共に、一般商店に於ても、数、暦、度量衡、貨幣其の他物品名は此の際一斉に国語使用に矯正実行せしめ、之か安易なる生活用語の活用促進を図ること。」(江原道楊口郡)

「工場、鉱山、工事場等に於ける道具名及技術用語は必らず国語を使用せしむること」(咸鏡北道吉州郡)

「業務用語は勿論、生活用語、社交用語等に至るまで一切国語を以てなすこと。」(慶尚北道奉化郡)

「諮問答申書」が出された「府尹郡守会議」の前に開催された朝鮮総督府定例知事会議(1942年4月20日～4月23日)において、江原道知事柳生繁雄は「国語」普及に関連して、「工場、鉱山などでの技術用語、工務上の用語は、これを国語で語らしめるならば、その普及も速やかに行はれると思料する」と述べている。こうした発言も「諮問答申書」において朝鮮語への「国語」語彙の混淆を「国語常用」施策として打ち出した地方行政機関が多く現れたこととも関係しているであろう。

ラジオもこうした「国語」語彙の混淆を推進していた。1942年5月当時、朝鮮放送協会傘下に8つの放送局(京城、釜山、平壤、清津、咸興、裡里、大邱)が開設され、それぞれ「第2放送」(朝鮮語によるラジオ放送。日本語によるラジオ放送は第1放送で行なっていた)では、「国語講座の外に毎日ニュースや官庁公示事項中で人名や地名等は国語を使用し、一日の放送中で少なくとも千五百語内外の国語が使用されてゐる」(「京城日報」1942年4月25日付記事)状況にあった。

また当時、咸鏡北道にあった国民学校の朝鮮人校長湯川利福は、「私の家は全家族、国語以外に話しません。従って、他の人にも国語がわかる人

には、絶対朝鮮語を使はない。そして、各種集会を国語普及の機会として、名詞、代名詞全部を国語で発音させて指導してゐます」<sup>27</sup>と、固有名詞のみならず名詞、代名詞全般にわたる「国語化」を指導していると語っている。体言の後に助詞が付き、日本語の「名詞＋スル」という形の動詞も「名詞＋hada」という朝鮮語の動詞の形と語構成上よく対応するため、混種語による派生用言の形成が容易である。また、「名詞＋hada」という語構成は形容詞にもなるため、「hada（하다）」はとても生産的な用言形成語尾である。さらに、「国語」の動詞にも「hada」が付き、「走る＋hada」（走る）、「はしる＋han saram」（走った人。hanはhadaの過去連体形。saramは「人」）のような混用表現が多用されたが、これらは用言語尾を朝鮮語に委ねた形での「国語」動詞の混用法だった。こうすることによって、「国語」の体言のみならず用言までも混用が繰り返されていった。このように朝鮮語の言語構造は日本語と酷似しているため、朝鮮語語彙の一部を日本語語彙に置き換えて混淆言語化させるのが容易であることが、「国語」語彙の混用を促進した。

京畿道京城府が作成した「国語全解運動」のための施策要綱（1942年7月上旬）でも、「創氏と旧氏名の国語読み、一旦習得した国語の常時使用、汽車、電車、自動車の行先、自己住居の町名、班名等」を「国語読み」することを決めていた。「旧氏名の国語読み」とは、たとえば「金明洙」という姓名を「キム ミヨンス」と呼ぶのではなく、「きん めいしゅ」と日本の漢字音で呼ぶことを強要するものだった。同様に、朝鮮の駅名、地名なども日本漢字音で呼べというもので、これは単に、次に紹介する「内地関係固有名詞」の「国語読み」からさらに進んで、朝鮮の固有名詞まで「国語読み」することを企てたものだった。朝鮮の地は大日本帝国の一部であり、朝鮮人は「皇国」の「臣民」なのだから、朝鮮のあらゆる固有名詞は日本語式に発音されなければならないという主張だった。そして、こ

27 「朝鮮日報」北鮮版1942年5月23日付記事「“国語を使へ” 移動座談会㊤」

これは朝鮮民衆の民族性を抹殺し「国民意識」を涵養しようとする「内鮮一体化」政策と軌を一にするものだった。

朝鮮語の中に意図的に「国語」の語彙を混淆させる政策は、「皇民化」政策が始められた年（1937年）の8月31日に断行された朝鮮語教育に対する措置、即ち学校教育において「内地関係の固有名詞」を「其の本来の読方に依らしむる」方針のもとで既に実施されていた（この時、高等普通学校における朝鮮式漢文の廃止措置も同時に断行された）。

朝鮮総督府学務局編輯課の安龍伯は「朝鮮語教授に於ける内地関係固有名詞の国語読みに就いて」（朝鮮教育会機関誌『文教の朝鮮』148号、1937年12月）という文で、このことについて詳しく述べており、「内地関係固有名詞の国語読み」は「国民精神涵養上極めて重大なる関係を持つ」としている。更に、朝鮮民衆を「皇民化」することとの関係について次のように論じている。

「朝鮮の民衆は国語を語ることに依つて、経済的並びに文化的活動の利便を図り、併せて内地の文化を理解し吸収せんとする現実的、實際的要求を充たすと同時に、国語に対する愛着に依つて、皇国臣民たるの自覚と誇とを持ち、国体觀念を全的に把持遷都する理想的要求を充足せしむることは最も喫緊事の一つである。實際に於て、斯かる氣運<sup>きゆうぜん</sup>が翕然として勃興してゐるのは、喜ばしき限りである。それにも拘らず、従来朝鮮語に於ては、如何なる固有名詞も朝鮮在来の字音に依つて唱へ、且つ読んで居つた旧套<sup>きゅうとう</sup>をその儘<sup>まま</sup>踏襲して、朝鮮語教授に際して内地関係固有名詞をも、朝鮮の漢字音を以て指導して來たのである。此は固有名詞の性格よりするも、国民意識涵養の必要よりするも、不適當なこと、云はねばならない。殊に畏れ多くも皇室関係の事項を、その本来の読方と異つた音を以て讀ましめてゐたことは、極めて不穩当なことである。此の意味に於て朝鮮語教授に於て、内地関係の固有名詞を全部国語読みにすること、したことは、必要且つ適切なことであつて、むしろその時期の晩<sup>おそ</sup>

きを歎ずるものである。」

この固有名詞の「国語読み」を、総ての「国語」語彙の混淆へと拡大させたり、たとえ一言でも「国語」のセンテンスを覚えたら、これを朝鮮語を話している途中でコードスイッチングさせたりしたのが、「一日一語」運動であった。

ところで、前で触れた『国語単語読本』（国民総力金浦郡聯盟発行）の単語リストをみると、朝鮮語からの音声干渉が反映された誤記が見られる。たとえば、マナイダ（まな板）、ヒョウダン（瓢箪）、ナンギンムシ（南京虫）、ユタチ（夕立）などは、有声音の後で無声音が有声音化する朝鮮語の音韻規則が干渉した結果である。ガミ（紙）、チャリ（砂利）の場合は、日本語語頭音の清濁が認識しがたい朝鮮語話者による誤記である。アスキ（小豆）、ススラン（鈴蘭）の場合は、破擦音を音素に持たない朝鮮語の特徴を反映した誤記であると考えられる。レンギョ（連翹）、ユタチ（夕立）は母音の長短が意味弁別的機能をさほど有しない朝鮮語の話者による誤記であるとみられる。マンエン（万円）は朝鮮語での言い方の影響を受けたものだろう。こうした例から、『国語単語読本』の作成過程に、何らかの形で朝鮮人も関与していたと推測される。また、軍事、皇室、軍国主義に関連する語彙が多く選ばれていることから、当時の「国語常用」の狙いが軍国主義化、「皇民化」政策の一環であった事もよく伺われる。

なお、『国語単語読本』に掲げられた語彙リストを以下に転載するに当たり、本稿筆者が大まかな語彙分類をしながら並べ替えて示した。また、若干の語彙のあとに（ ）内に語義の把握に役立つような注記を施した。この語彙リストからは、当時の朝鮮社会や時代背景等がうかがわれて興味深い。

[人体] ヒト、カラダ、カホ、アタマ、カミ、ヒタビ（額）、マユゲ、メ、ハナ、ミミ、クチ、クチビル、ハ、シタ、ホホ、アゴ、ヒゲ、カタ、セ、

セハバ、カタハバ、セナカ、ムネ、ハラ、コシ、テ、テノヒラ、コブシ、ユビ、ツメ、オヤユビ、ヒトサシユビ、ナカユビ、クスリユビ、コユビ、モモ、アシ、アシユビ、アシツメ、チチ、チブサ、ホネ、チ、キンニク

[時] アサ、ヒル、ユウカタ、バン、ヨル、ヨナカ

[形容詞・副詞] ハヤイ、ハヤク、オソイ、オソク、ヨイ、ワルイ、タカイ、ヒクイ、ヤスイ、ナガイ、ミヂカイ、オモイ、カロイ、オウキイ、チイサイ、フトイ、ホソイ、ヒロイ、セマイ、シロイ、クロイ、フカイ、アサイ、アカイ、アオイ、サムイ、アツイ、アタタカイ、スズシイ、カライ、シブイ、スッパイ、シヲカライ

[動詞] ネル、ヤスム、オキル、タベル、ノム、クウ、オエル、ユク

[医療] クスリ、チュウシャ

[親族名称など] オチイサン (お爺さん)、オバアサン、オトウサン、オカアサン、ニイサン、ネイサン、アニ、アネ、オトウト、イモウト、コドモ、オトコ、ダンシ、オンナ、ジョシ、オトコノコ、オンナノコ、ムスコ、ムスメ、オジヨウサン、オジサン、オイ、オバサン、メイ、オット、ツマ、シュジン、サイクン、オクサン、ゴシユジン、オクサマ、カナイ

[色彩名称] ムラサキ、ベニイロ、クル (黒)

[勉強・文房・事務用品] ヨミカタ、カキカタ、サンジュツ、ヅガ、エカキ、ホン、エホン、フデ、エンピツ、スミ、スズリ、ガミ (紙)、モノサシ、ツクエ、コシカケ、イス、コクバン、ハクボク、インキ、ペンサキ、ペンチク (ペン軸)、マンネンヒツ、ナイフ、コガタナ

[郵便・通信] フウトウ、テガミ、ヂョウブクロ (状袋)、ハガキ、キツテ (切手)、インシ、カワセ、フリカヘチョキン、チョキン、デンプウ、デンプ

[金銭・数詞] カネ、オカネ、ゼニ、イツセン、ニセン、サンセン、ヨンセン、ゴセン、ロクセン、ナナセン、シチセン、ハツセン、キユウセン、ジツセン、イチエン、ニエン、サンエン、ヨンエン、ヨエン、ゴエン、ロクエン、ナナエン、シチエン、ハチエン、キユウエン、ジウエン、ヒ

ヤクエン、センエン、マンエン（1万円）、オクエン、チョチク

〔飲食物〕 タベモノ、リヨウリ、ゴチソウ、メシ、ゴハン、ミズ、ユ、オユ、ツケモノ、アサメシ、アサゴハン、ヒルメシ、ヒルゴハン、パンメシ、バンゴハン、ミソ、ショウユ、チャ、オチャ、シル、オシル、オカス、シルコ、ゼンサイ（善哉）、サケ、オサケ、ス、モチ、モチシル（餅汁）、アブラ、トウフ、カンヅメ、サトウ、アカサト（赤砂糖）、シラサト（白砂糖）

〔食器類〕 チャワン、ドンブリ、サカツキ、ハシ、サジ、ワリバシ、トクリ、オゼン

〔住居関連〕 イエ、カオク、ヘヤ、オンドル、モノオキ、テンジョウ、カベ、ト、モン、ショウジ、タンス、ショウジガミ、オシイレ、ロウカ、ニワ、ニワサキ、スイジバ、カマ、カマド、ベンヂョ、ヂリガミ

〔家電〕 ラヂオ、チクオンキ、レコード、チクオンキハリ

〔日常生活用品〕 ランプ、デントウ、ロウソク、マッチ、デントウカサ、デンキタマ、ゾウキン、ホウキ、チリトリ、チリハタキ、ソウヂ、ヤカン、ドビン、ナベ、ワン、ヒ（火）、ヒバチ、ヒバシ、ハイ、シチリン、ジウノウ、ゴトク、スミ、モクタン、スミビ、タキギ、ケムリ、ビン、セッケン、シャボン、ハミガキ、ハブラシ、カサ、アマガサ、ヨウガサ、カメ、バケツ、ホウチョウ、マナイダ（まな板）、センメンキ、タオル、テヌグヒ、ステッキ、タバコ、キセル

〔衣類・寝具〕 キモノ、イフク、フトン、ザブトン、カケブトン、シキブトン、ボウシ、クツ、ハキモノ、ウワギ、シタギ、シャツ、タビ、クツシタ、ズボン、サルマタ、フントシ（ふんどし）、マクラ、ゲタ、ゴムクツ、ワラヂ、オビ、チョクキ、サイホウ、ハリ、イト、ノリ、ヒノシ、アイロン、センタク

〔海産物〕 サカナ、メンタイ、タイ、グチ、エビ、エビツケ、イワシ、イリコ、サバエ、

〔野菜・穀物・植物〕 ネギ、ダイコン、ハクサイ、ナツパ、トウカラシ、

イモ、サツマイモ、チャガイモ、チシャ、シュンキク（春菊）、モヤシ、  
ホウレンソウ、キウリ、ヒョウダン（瓢箪）、ムギ、アワ、ヒエ、イネ、  
モミ、ヘチマ、カボチャ、コメ、ムギ、マメ、アワ、オウムギ、コムギ、  
アスキ（小豆）、シロマメ、クロマメ、エントウ（豌豆）、インゲンマメ、  
トマト、ナス、ナスビ、カボチャ、キ、ワタ、クサ、クサバナ、バラ、  
レンギョ（連翹）、ツツヂ、ススラン（鈴蘭）、マツ、クヌギ、モミ、モ  
ミチ（紅葉）、ハンノギ、ケヤギ、ドンクリ、クリ、ハナ、サクラ、ア  
ンズ、モモ、スモモ

[果物] リンゴ、ミカン、ナツミカン、ナシ、クルミ、カキ、ホシカキ、  
ナツメ、ブドウ、ウリ、マクワ（真桑瓜）、スイクワ（西瓜）

[動物・昆虫] ウシ、ドウブツ、ウマ、イヌ、ブタ、ニワトリ、トリ、タ  
マコ（玉子）、ヒヨコ、オウシ、メウシ、オンドリ、メンドリ、ヒナ、  
スズメ、カラス、カササギ、ツバメ、ツル、サギ、ガン、カモ、サル、  
オヤブタ、コブタ、オヤウシ、コウシ、オヤイヌ、コイヌ、トラ、ヒョ  
ウ、オウカミ、ヒツチ（羊）、ヌクテ、ネコ、ヤマネコ、イノシシ、イ  
タチ、トビ、キズ、ライオン、クマ、ヘビ、ワニ、シカ、ノロ、トカゲ、  
カニ、カイ、ハマクリ（蛤）、エビ、タニシ、ドジョウ、ヒル、イナゴ、  
トンボ、ハイ、シラミ、ノミ、ナンギンムシ（南京虫）、ガ、タニ、リス、  
ネズミ

[自然] テン、チ、ソラ、チメン（地面）、テンキ、アメ、ユキ、クモ、カ  
ゼ、ヒョウ、カスミ、ユタチ（夕立）、ハル、ナツ、アキ、フユ、カワ、  
ウミ、コガワ（小川）、ミゾ、ヤマ、タニ、ノハラ、イシ、ツチ、コイシ、  
イワ、スナ、チャリ（砂利）

[農業] ハタケ、タ、スイデン

[鉱物] テツ、ドウ、スズ、キン、ギン、コウセキ、カラス

[皇室] テンノウヘイカ、コウゴウヘイカ、コウタイゴウヘイカ、コウタ  
イシデンカ、コウシツ、キュウゼウ（宮城）、ニヂュウバシ、オウサマ、  
ミヤデンカ



[軍国主義] ダイニッポンテイコク、ジンシ（仁祠）、ジンジャ、ジングウ、ヨウハイ（遥拝）、モクトウ、コッキ、ケイレイ、ハイレイ、サイケイレイ、コクミン、コウコクシンミンノセイシ（皇国臣民の誓詞）、コクゴ、デョウカイ（常会）

[国家・行政] ハタ、ヒノマルノハタ、コクキ、コクキタマ（国旗玉）、コクキサヲ（国旗竿）、シュクジツ、サイジツ、コクミンソウリョクレンメイ（国民総力聯盟）、リジチョウ（理事長）、アイコクハン（愛国班）、ハンチョウ、ブラク、クチョウ、サゲウハン（作業班）

[軍事・消防] ボウエンキョウ、デンレイ、デントツ、ツウジ（通詞）、ケイカイケイホウ、クウシュウケイホウ、トウカカンセイ、ミチ、ドウロ、センソウ、イクサ、グンジン、ヘイタイサン、ケンペイ、ダイショウリ、バンザイ、シュクカシキ（祝賀式）、コクミンギレイ、タンク、センシヤ、テッポウ、キクワンヂュウ、タイホウ、センリョウ、ホリョ・、ヒコウキ、ヒコウシ、プロペラ、グンカン、ラツカサン、ラツカサンブタイ、コウサン、テキグン、テッコク、ボウクウカンシショウ、ポンプ、ホース、ケイボウダン

[機関] ヤクショ、クワンチョウ、ソウトクフ、ドウチョウ（道庁）、グンチョウ（郡庁）、ケイサツショ、メンジムショ（面事務所）、ヂュウザイショ、ユウビンキョク、キンユウクミアイ、ビョウイン、イイン、ソウトク、セイムソウカン（政務総監）、ドウチジ（道知事）、グンシュ（郡守）、ショチョウ、メンチョウ（面長）

[教育] カツコウ（学校）、センセイ、セイト、ガクセイ

[農業] タウエ、ナエ、ムギカリ、クサトリ

[交通・運輸] キシヤ、レール、キクワンシャ、テイシャバ、デンシヤ、ジドウシヤ、カモツジドウシヤ、クルマ、ニグルマ、ウンテンシユ、キセン、フネ、リヤカー

[国名] シナ、マンシウ、ドイツ、エイコク、ベイコク、フランス、タイコク（泰国）、インド

[その他] ダイベン、ショウベン、ハナシ、オハナシ、ハイ、イイエ、モチツキ、ウンドウ、シンブン、ザツシ、ネジ、バネ、ショウカイセキ（蒋介石）

「国語普及運動要綱」の「運動要目」の（五）には「諺文新聞、雑誌に国語欄を設けること」と記されている。釜山で刊行されていた朝鮮語日刊紙「釜山日報」では「コクゴノオケイコ 一日一語教本」が1942年9月1日付夕刊から連載されているのは、その具体化された一例である。

「コクゴノオケイコ」には、比較的大きな手書きの文字で書かれたセンテンス一つがイラスト入りで示され、そのあとに「練習」というタイトルの下に、「もとになる言葉」としてセンテンスに含まれる語彙を再表示したあと、「言葉の出来上がり」として構文の留意点を示している。以下に、その例を若干示すが、これらは基礎的な単語と共に、平易な構文の文を習得させることを意図した構成となっている。

「釜山日報」1942年9月1日付

コクゴ ノ オケイコ

(練習) もとになる言葉 コクゴ (国語) オケイコ

言葉の出来上がり コクゴ ノ ケイコ ワタクシ ノ イヌ

「釜山日報」1942年9月2日夕刊

ワタクシ ノ コドモ デス

(練習) もとになる言葉 ワタクシ (私) コドモ (子供)

言葉の出来上り ワタクシ ノ コドモ デス

ワタクシ ノ ムスメ デス

ワヤクシ ノ ムスコ デス

「釜山日報」1942年9月6日

オトコ ト オンナ

（練習） もとになる言葉 オトコ（男） オンナ（女）

言葉の出来上がり オトコトオンナ ヒトトサル

「釜山日報」1942年9月10日

イツサクジツ ハ コクキ ヲ タテマシタ

（練習） もとになる言葉 イツサクジツ タテマシタ

言葉の出来上がり イツサクジツ「ハ」コクキ「ヲ」タテ「マシタ」

キノウ「ハ」ニチヨウビ「デ」アリ「マシタ」

## 5. 当時の新聞記事から見た「一日一語運動」の展開様相

「一日一語運動」に関して、当時発行されていた「京城日報」（朝鮮総督府機関紙）、「朝日新聞」朝鮮版、「大阪毎日新聞」朝鮮版、「毎日新報」（朝鮮総督府朝鮮語版機関紙）の記事から、その具体的な展開様相を伺い知ることができる。以下、その例を示すことにする。

### 「一日一語運動」に関する新聞記事

「“一日一語”の標語の下に、第1に防空用語、第2に日常用語と優しくて綺麗な言葉を各自宅で教えることにしたが、同校の寄宿舎の学生を除いた自宅通学生440名に教える単語だけでも1年間に15万語が普及されると語ったとのことである。」<sup>28</sup>

「道（京畿道－注）では国語常用の徹底方策として国語全解運動を展開

---

28 「京城日報」京城版1942年5月17日付記事「“一日一語”普及へ/沸ぎる国語全解運動 梨花高女が積極的に乗出す」。

するとともに、一日一語の解得を各部落は国語簡易講習所、婦人特別国語講習所を新設、工場、会社等の職場では職場国語講習所を新設して、国語常用に拍車をかけることになったが、これに先だち、道では十人以上を使用してゐる各工場、会社、商店、事務所の国語不解者調査、この調査を土台にして各々職場講習所を設置、朝の出勤時間に、或はお昼の時間を利用、国語を教え、各職場の従業員全部に普及される。』<sup>29</sup>

「(京畿道では一注) 国語を解しない者に対しては、愛国班の申合せにより必ず国語講習会へ出席させる一方、創氏と旧氏名の国語読み、一日一語習得、一旦習得した国語の常時使用、汽車、電車、自動車等の行先、自己住居の町名、班名等の国語読み、就学前の児童の簡易児童保育所施設の強化による国語習得、ラジオ国語講座の利用等の徹底に努め、万全を期する。』<sup>30</sup>

「(京城府の「模範部落」九龍面の一注) 一般家庭の婦人に対しては国民学校の卒業生、上級在校生等が必ず一日一語の徹底した教授をする。時々、作業場に集合して“話方発表会”を催すほか、国民学校の児童と部落民との話はなるべく国語を使用させて、一語でも早く、一語でも多く記憶させ、しかも□□(常用?) させるやうに努力を払ってゐる。』<sup>31</sup>

「皇国臣民でありながら国語を解せないとあつては申訳ない。六十の手習ひ決して遅くはないと、国語普及に<sup>おおわらわ</sup>大童となった全北道では、学校児童を通じた一日一語親父教育を実施するほか、さらに道総力聯盟機関紙“全北総力”諺文版に国語普及欄を設け、公民教授用に編纂された「国語教本」中から順次抜粋し、国語一年生の仮名文字から採り入れ、家庭

29 「京城日報」1942年7月1日付記事「各職場で国語の講習」この記事に書かれた15万語とは、440名の学生が自宅で「一日一語」(年間約3,650語)を実践すれば、普及される「国語」の述べ語数がおおよそ15万語になるという意味である。

30 「京城日報」京城版 1942年7月10日付記事「踏み出す“国語全解”/施策要綱を府尹、郡守に指示/一斉に猛運動を開始」

31 「京城日報」1943年8月6日付記事「徴兵に沸る愛国半島【6】/全村に刻む“国語”/九龍面の輝く更生ぶり」

人の紙上教育に乗り出すことになった。目下編輯中の全北総力十五日号から実施するはず。」<sup>32</sup>

「学校における普及運動—中初等学校における講習会、青年隊主催の講習会開催、中等学校生徒による国語常用の推進隊を設け、休暇を利用して活動させる。児童を通じ一日一語普及運動の実施。」<sup>33</sup>

朝鮮総督府の山名文書課長は、「国語教育に就いては、家庭の主婦、母親が国語が解からなければうまく行かないといふので、国民学校の生徒を通してお母さんに教へて行く『一日一語運動』といふことをやってゐる所もあり、相当効果を上げてゐるやうである。やがて国語の話せない者は田舎者だ、といってさげすまれる時代が来ると期待してゐるやうな次第である」と内務省と朝鮮総督府幹部との座談会で語り、これに対して、上瀧殖産局長は「さういった心持が農村でも強くなって、国語の講習などは役所が計画し進めるといふことでなしに、地方に国語を覚えたいといふ切なる希望が出てゐるわけです。朝鮮は大体、女の教育が非常に遅れてゐる、今はどうなつてゐるか知らないが、以前は婦女子を国民学校に入れるといふのは、相当程度以上の家庭でなければしなかつた。だから、大部分の農村婦人といふものは全然無教育であつて、さういふ婦人が相当の年配になつて子供を育てる場合に、国語を知らないといふことはまことに残念だといふので、自ら講習会に来て熱心に覚えてゐるといふ者もある、それで日常の要件は農村でも大体解るやうになつてゐる」と語つた。<sup>34</sup>

「釜山蓬萊国民学校では、次代に伸びる朝鮮人児童二千余名の皇民化訓育に亀崎校長以下職員は不斷の努力をはらつてゐるが、いま澎湃とまき

---

32 「朝日新聞」西鮮版1942年4月10日付記事「聯盟機関誌に国語普及欄/全北で掲載」

33 「朝日新聞」北鮮版1942年5月5日付記事「『国語の家』表彰など/咸北聯盟普及方針決定」

34 「京城日報」1943年6月17日付夕刊「決戦半島の真姿/内務省委員・総督府幹部対談会 三」

おこつてゐる国語全解運動には積極的にのり出し、父兄にもこれを徹底させるため、児童に一日一語教育運動を開始、これを家庭に実践させてゐる。この効果は相当にあがり、同校が調査した国語普及率を見ると、全解父1,194、母311、半解父428、母791、不解父358、母886となつてゐる。なほ同校では、近く学年単位に母の会を組織、国語、精神方面の講習会などを開催する方針であり、また国語全解者の表彰なども考へてゐる。」<sup>35</sup>

「月城氏〔月城□石、清津府東水南町第三町会総代〕＝まづ第一に、精神的教育が必要だと考へたので、毎朝宮城遥拜、黙禱、皇国臣民の誓詞斉唱を實行し、まづ国家觀念を十二分に認識させ、一日一語主義で指導してゐます。内鮮一体の実は国語からあげるといふ觀念を強調してゐる。」<sup>36</sup>

「山下校長＝“国語の家”の普及、<sup>および</sup>及児童を通じて一日一語一字の習得、母姉会の組織化による講習など計画してゐます。」<sup>37</sup>

「更に、30歳以上のものに対する普及をはかるため、道（咸鏡南道－注）では別個に日用語百語程度を集めて“教本”を作り、国民学校児童を通じて各家庭において国語を吹き込ませることになつてゐる。」<sup>38</sup>

「（黄海道では－注）一日一語運動の開始、国語常用者に対する表彰、及び優先的処遇なども考慮することになった。」<sup>39</sup>

「国語全解運動に拍車をかけるため、国民総力咸北道聯盟では道内各工場、鉾山に呼びかけて、労務員および従業員家族の短期国語講習会（一期三ヶ月）を開催し、初歩教本の皆読皆書を期するほか、一日一語教授とし

---

35 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年5月15日付記事「国語全解運動に一日一語教育/釜山蓬萊校」

36 「朝日新聞」北鮮版1942年5月23日付記事「“国語を使へ”移動座談会㊤」

37 「朝日新聞」北鮮版1942年5月24日付記事「“国語を使へ”移動座談会㊤/入学条件に国語常用/表彰や優先権与へて普及」

38 「朝日新聞」北鮮版1942年6月2日付記事「咸南の国語普及/具体案成り農閑期から実施」

39 「朝日新聞」西鮮版1942年6月10日記事「黄海道の国語常用運動」

て繰込時の行事に五分程度の教授と、合宿独身者の食事前食堂における教授を実施させることになった。一日一語教本は目下、道国語全解運動本部で編纂中である。」<sup>40</sup>

「(国民総力釜山府聯盟では一注)生徒、児童に一日一語を習得させ、これを家庭に励行させるなど、国語を解せぬ者は日本人にあらずの觀念を強くうゑつけることになってゐる。また、官公署、会社、銀行、工場では、必ず会話、応対などに国語の常用を実践さすが、各町洞里聯盟にあつても愛国班常会で国語常用を申合せ、たとひかたことといえ自己の解するかぎりは使用さすことにきまつた。」<sup>41</sup>

「咸北道内の各工場、鉱山では国語全解運動に馬力をかけ、各事業とも労務員に対しては作業の始終事の行事に際して五分程度の一日一語教授、寄宿舍における食事前の教授、班長の現場における教授などを実施するとともに、一期三ヶ月程度の短期国語講習会を開催し、あらゆる角度より国語の普及につとめてゐるが、…。」<sup>42</sup>

総力慶南道聯盟理事会が1942年7月13日に決定した国語普及運動要綱の「運動要目」において、「国語を解せざる者に対する方策」として「定例常会には特定の時間を設け国語を指導するほか学生、生徒を通じ各家庭へ一日一語習得を実行させること。」を決めた。<sup>43</sup>

「国語の全解常用運動も夏季錬成へ突進だ＝平壤府総力聯盟では国語常用の環境に恵まれる暑中休暇を活用して国民学校訓導や児童を動員し、愛国班と家庭の両面から国語指導を強力に推進することになり、町聯盟に実施対策を指示することになった。それによると、まづ愛国班の常会

---

40 「朝日新聞」北鮮版1942年6月13日付記事「短期国語講習会」

41 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年6月20日付記事「一日一語・必ず覚えよう/国語の徹底に万全を期す釜山」

42 「朝日新聞」北鮮版1942年6月28日付記事「国語の普及かくの通り/咸北道内の大工場をみる」

43 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年7月15日付記事「国語全解徹底へ/慶南の運動項目決まる」

は必ず国語使用を励行、班員は子供を先生として一日一語主義で国語を勉強させ、町聯盟では国民学校訓導を講師として講習会または練習会を開き、また隣接班相互の研究会も開催させる計画である。」<sup>44</sup>

「さあ国語で進むのだ、慶北道教育会ならびに国民総力慶北道聯盟が学童を通じて朝鮮人家庭へ国語を普及させるため編纂中であった“一日一語国語のおけいこ”教本がこのほど完成、三千余部を印刷して道内各国民学校へ配布した。この教本は国民学校初等科一、二年程度のもので、国体観念を培ふべき国語、時局に関する国語、農法用語、行事、季節、環境などを考慮して素朴簡易な一般生活用語を収録、八月一日からその第一課を繙いて、最初は単語の習得に力瘤を入れ、次第に語彙の拡充をはかり、明年七月三十一日まで丸一年間でこの一冊を修得する。教本では一日分の“おけいこ”を新しい言葉、既習の言葉、□ったお話の三部に分け、語句の発展適用に相当苦心の跡を見せてゐる。なほ、児童には“一日一語指導帳”を与へて両親や兄弟の国語修得状況を記載、本格的の国語常用生活に突入させる。」<sup>45</sup>

「釜山府内における朝鮮人の国語全解常用運動は日一日と熾烈を加へ、大東亞戦下真の皇国臣民としての榮譽に感激、現在はやくも百件にのぼる国語講習会が各町に設置され、全解者から未解者へ一日一語の普及に真摯な努力を見せ、府当局を喜ばせてゐる。」<sup>46</sup>

「国語全解常用の叫びとゝもに、平壤府の町聯盟愛国班の国語熱は俄然沸騰し、至るところに国語講習会が開かれ、常会を利用して国語教育を実施してゐる班や、一日一語宛を学んでゐる家庭など、涙ぐましい精進ぶりを展開してゐるが…。」<sup>47</sup>

44 「朝日新聞」西鮮版1942年7月19日付記事「愛国班や町聯盟で国語の猛練習」

45 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年7月23日付記事「一日一語/“国語のおけいこ”/慶尚道で三千部配布」

46 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年9月9日付記事「“一日一語”の普及/釜山に百余の国語講習会」

47 「朝日新聞」西鮮版1942年10月2日付記事「国語普及功労者表彰/平壤」



「光州刑務所の国語全解運動は在監者七、八百名に対し、まづ日常の生活から一日一語を励行、国語の習得に自発的能率をあげる方法として、特殊事項以外は毎日のニュース放送や教誨には一切通訳を廃止し好成績ををさめ、刑務所を出るところには自由に会話のできるまでに上達、皇国臣民化の朗らかな第一歩を踏出してゐる。」<sup>48</sup>

「（咸北道では一注）いよいよ本格的な国語常用強化運動を展開することになり、同日午後一時から関係者ら出席して道庁内に第一回委員会を開催、運動方法そのほかの細部にわたる具体事項を決定した。その大要左の通り。▲一般家庭で一家全員国語を使用している“国語の家”数戸を選んで表彰、また道内の工場、鉱山から各一ヶ所の国語使用に成績優秀なものを選んで表彰する。▲常会に国語の時間を設定。▲青年隊国語講習会の強化。▲休暇中に中等校の国語常用推進隊員を農村各地に派遣する。▲一日一語表を作製配布、児童は一日に一語でもいいから新しい言葉を覚える。▲事業場では職場の言葉は国語一本とし、講習会を開く。▲道聯盟も国語の家を設定する。▲国語教本、いろはがるたなどを配布する。」<sup>49</sup>

「瀬戸知事着任以来、咸南の国語普及に大きな活がいられ、道全体が“国語全解”に再出発してゐるが、瀬戸知事は左の如く語る。百語を一日でも早く解らせる本道独自の常用語教本は大体出来上った。近く最終的打合会を開催決定する。公署は相当徹底してゐるが、なほ強化せしめる。各府郡別に講習会を開催する。普及の範囲は15歳から30歳までの青年男女とし、十日間で一くぎりとする。」<sup>50</sup>

「“まづ国語普及から”と火蓋を切った咸南の国語全解運動の教科書“国語生活読本”は道総力課、学務課、それに各学校長の熱心な研究により

---

48 「朝日新聞」南鮮版（2版）1942年12月20日付「尾翼燈」欄

49 「大阪毎日新聞」朝鮮版 1942年5月5日付記事「『国語の家』表彰/咸北の国語普及方策成る」

50 「大阪毎日新聞」朝鮮版1942年5月5日付記事「先づ百語運動/府郡別に講習会も開催/咸南」

このほど脱稿、今月末までには製本を終り、来月初旬、運動の実践に入る。この“国語教本”は日用語135語を選定、26万部を印刷、15歳以上30歳未満の半島人男女に無料で配布するもので、内容は朝晩の挨拶、日用買物の言葉などが収容されてゐる。』<sup>51</sup>

「咸南道は百六余万の半島人に一日でも早く国語を覚えさせるため135語を選び、“国語生活読本”を無料で配布するが、この資金がなくて困つてゐたところ、定平郡から“読本をつくる資金にしてください”と1,400円が道総力課に届けられた。この基金は一日も早く国語を生活のなかにとりいれようと努力してゐる定平郡の半島人側資産家9名が100円以上をそれぞれ平松郡守の手元に差し出したもので、道聯盟河野理事は左の如く語る。国語普及講習会教本の作製については、基金がないため不便を感じてゐたところへ、その一部にと思ひがけぬところから寄附を受け、喜んでゐます。このやうに半島人側の有力者が本運動を□識してゐることは、喜ばしい限りです。』<sup>52</sup>

「(平安北道時局対策委員会が道内所属各官公署に通達した国語常用方策の一部－注)【解せざる者に対する方策】(一) 家庭では、先づ片仮名の習得と自分の住所氏名、所属愛国班の名称を記憶さすとともに、一日数種の単語を覚えさすことに努め、室内の備品、食膳に上るもの、挨拶など実生活に即した名詞を習得せしめ、のち愛国班における共同動作(気をつけ、右向け、脱帽)の用語を理解さす。(中略) なほ、生徒児童の家庭に対しては、生徒、児童を動員して“一日一語運動”等の方法で普及を計るのも最も効果的な方法として要望されてゐる。』<sup>53</sup>

「校内外の国語常用全解に努力する学校＝平南江西郡咸従国民学校では、児童の国語常用はまづ家庭からと、児童をして一日二語づつを父兄に教

---

51 「大阪毎日新聞」北鮮版1942年5月14日付記事「国語生活虎の巻/咸南道で教本を印刷」

52 「大阪毎日新聞」北鮮版1942年5月14日付記事「資金を寄附/定平郡有志」

53 「大阪毎日新聞」西鮮版1942年6月12日付記事「国語全解運動/咸南で各種具体案」

へさせてゐる。言葉は“コンニチハ”“オハヤウ”といった平易な生活用語からで、一日から三十一日までの表を作り、毎日教へた言葉を書き込ませてゐる。これはまた児童の誤った言葉を直す手引きともなる一石二鳥の案で、今月末初めて一ヶ月分の統計が出るが、同校六百四十名の生徒が一人二語ずつ父兄一人に教へても、一日に千二百八十語が部落に滲透していくわけ。井芹校長は、児童も大へん興味を持ってゐますし、父兄も家庭訪問の際など進んで質問するやうな状態ですと嬉しそうに語った。」<sup>54</sup>

「平壤城南公立国民学校では“一日一語集”といふ優しい小冊子を編纂しました。このはしがきの中に、かう書いてあります。……常に国語常用に努力してゐるが、こんど徴兵制施行決定に伴ひ、いよいよ必要性が加重せられて来たので、長期国語普及運動の一つとして登壇したのが、この一日一語運動である。この本は愛国班の言葉、学用品に関する言葉から、家の人、花、鳥類、衣□に関する言葉など36項目に分れてをり、全部で七百語が集められてゐますが、特長は一つ一つの□□（単語？）をならべただけでなく、それを文章に織り込んで、使ひ方まではっきり教へてゐることです。同校では近くこの本を利用して、一斉に一日一語運動を展開しますが、方法は毎日五分間校内放送時間を設け、一日一語を児童に知らせると同時に、放送の声に唱和させ、正しい発音を覚えさせて帰宅の上、早速家族に伝へ、国語のわからない父兄、母姉等に指導し、国語全解に努力することになってゐます。」<sup>55</sup>

「国語の普遍化に努力する慶南道総力聯盟は十三日、道庁知事応接室で聯盟理事会を開催、西岡会長、池理事長ほか各理事が出席、国語を解する者に対する方策、国語を解しない者に対する方策、一般的普及方策、文化方面に対する方策を左のとほり決定、本年度から三ヶ年計画で国語

54 「大阪毎日新聞」西鮮版1942年7月1日付記事「この意気だ/学園の国語常用運動」

55 「大阪毎日新聞」西鮮版1942年7月14日付記事「一日一語集/城南国民校で編纂」

未解者道内約百万人の指導に当ることになった。(中略)【一般的普及方策】＝愛国班で国語生活申合せ。▲定例会に特定の時間を設けて指導。▲一日一語主義の徹底で毎月約三十語を印刷した紙面を配布。▲学生、生徒を通じ各家庭一日一語習得運動の徹底。▲ラジオによる講習。」<sup>56</sup>  
「釜山府は五日、総力聯盟理事会で国語全解運動の具体的方策を決定した。国語常用に対する精神的指導、国語を解するものに対する方策、解しないものに対する方策、文化方面に対する方策は既報の慶南道指導方針に則ってあるが、国語普及目標を左のとほり決定、宣伝、講習会開催、および当分は一日一語習得運動によって普及につとめることになった。」<sup>57</sup>  
「国語常用全解運動に各国民学校と連絡臨時講習会などを設置して、その普及に力を尽くしてある咸北道学校課では、新たな試みとして「国語一日一語必得」運動を起すことに決定、同課佐藤視学が中心となって目下その教材となるべき「一日一語読本」を編纂中であるが、同読本は全然国語の単語を一つも知らない半島人を目□(標?)にしてつくるだけに、「やま」「かは」「くち」「みみ」などのごく平易なところからはじまって、だんだんと簡単な会話へと導いてゆくことに重点をおいてある。」<sup>58</sup>

## 6. 終わりに

「一日一語」運動は、ひとつの短い「国語」のセンテンスであっても、またたとえ1語の「国語」語彙であっても、新たに覚えた「国語」は、逐次、普段話している朝鮮語の中に混ぜて「常用」することを、「国語」未

---

56 「大阪毎日新聞」西鮮版1942年7月14日付記事「国語全解方針/慶南総聯理事会で決定」

57 「大阪毎日新聞」朝鮮版1942年8月7日付記事「国語全解運動方策/普及目標/釜山総聯理事会で決定」

58 「大阪毎日新聞」北鮮版1942年8月27日付記事「国語『一日一語』必読/咸北道で新たな試み」

解者に求めるものだった。たとえば、慶尚北道知事諮問「向ふ五ヵ年を期し道内半島同胞の老若男女を通じ国語の全解を期し且国語の常用を目標とし其の実現を図らんとす。之が具体案如何」に対して、聞慶郡が提出した「諮問答申書」（1942年5月11日）では「当局並各国民学校に依頼し、国語不習得者に対する普及方法として、平素使用する簡単なる国語（単語とし）を適宜選定の上印刷物として配布し、国民学校児童並修得者に就き、各自宅に於て自習する様誘導する」とした上で、「常用促進策」として、「国語を解する者にて常用せざる向多々あるに付、修得者は常用する様、常会の申合事項として全面的に申合をなし、申合に違背なき様各自自覚の上、日常常用するは勿論、家族中、国語不解者には夜又は機会ある毎に修得せしむることとし、<sup>やや</sup>稍國語を解する者も鮮語と國語を混用し使用する様、指導する」という施策を講じていた。

つまり、「国語」を解しない朝鮮民衆が日常用いる朝鮮語の中に「国語」の語彙やセンテンスを混用させて混淆言語（mixed language）を意図的に生み出し、混淆の度合いを次第に高めながら、朝鮮語から「国語」へと日常言語生活をシフトさせていこうとするものだった。つまり、朝鮮語に大量の「国語」の語彙やセンテンスを混用させ、このことを通じて朝鮮語の言語体系に混乱を持ち込み、朝鮮民衆の民族的アイデンティティの拠り所を瓦解させることを企てたものだった。しかしその一方、「内地人」の半数以上が九州地方と中国地方出身者で占められていたために、これらの方言からの影響や、朝鮮語からの言語干渉によって、朝鮮では「本土」のそれとは少し異なった「国語」が話されていた。このため、「醇正な国語」の確立と習得が口酸っぱく唱えられた。このような朝鮮語体系の意図的な破壊と朝鮮語使用の禁止、および「醇正な国語」の確立と「国語常用」の押し付けは、「皇民化」政策が「朝鮮語抹殺政策」を遂行したと言われる所以である。植民地支配末期の「国語常用」政策は「朝鮮語」使用を抑圧・禁止し、終局的には「国語」によるモノリンガル社会を築くことを明確な目標としていた。そして「一日一語運動」は、朝鮮語の維持にとって最強

の砦であった家庭を言語的に破壊するために、「朝鮮語抹殺政策」の尖兵として国民学校の児童まで動員した「皇民化」運動の一形態だった。

### 【参考文献】

- 『朝鮮総督府の「国語」政策資料』、熊谷明泰、関西大学出版部、2004年
- 『昭和十七年度府尹郡守会議報告書綴』（全5冊、韓国国家記録院所蔵）、朝鮮総督府、1942年
- 『昭和五年朝鮮国勢調査報告 全鮮編 第一巻 結果表』、朝鮮総督府、1934年
- 『昭和五年朝鮮国勢調査報告 全鮮編 第2巻 記述報告』、朝鮮総督府、1935年
- 『昭和五年朝鮮国勢調査報告 道編 第十一巻 江原道』、朝鮮総督府
- 『昭和十九年五月一日 人口調査結果報告 其の一』、朝鮮総督府
- 『朝鮮に於ける国民総力運動史』、国民総力聯盟編、1945年
- 『朝鮮ノ国民総力運動』、朝鮮総督府、1943年
- 『昭和十六年十月 朝鮮社会教育要覧』、朝鮮総督府学務局社会教育課、1941年
- 『昭和十五年十月一日現在 朝鮮昭和十五年国勢調査結果要約』、朝鮮総督府
- 『日帝末期植民地支配政策研究』、崔由利、国学資料院、1997年
- 『植民地支配と日本語』、石剛、三元社、2003
- 『日本の植民地言語政策研究』石剛、明石書店、2005
- 「植民地下朝鮮における徴兵制度実施計画と「国語全解・国語常用」政策（上）」『関西大学人権問題研究紀要』第48号、pp.77-230、熊谷明泰、2004年
- 「植民地下朝鮮における徴兵制度実施計画と「国語全解・国語常用」政策（下）」『関西大学人権問題研究紀要』第49号、pp.1-57、熊谷明泰、2004年
- 「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較史的研究」『北海道大学教育学部紀要』pp.19-92、弘谷多喜夫・広川淑子、1973年

## ＜資料紹介－「釜山日報」に掲載された「国語常用・国語全解」運動関連記事＞

### 1. 「釜山日報」について<sup>59</sup>

ここで取り上げる「釜山日報」は韓国に居住する日本人を主な読者対象として、日本人によって1905年1月15日に釜山で発刊された日本語新聞「朝鮮日報」（現在韓国で発行されている「朝鮮日報」とは無関係）を前身とする。その後、同年11月1日に「朝鮮時事新報」と紙名変更され、更に1907年1月1日に「釜山日報」と紙名変更された。朝鮮総督府による日刊新聞の統廃合政策で「1道1紙制」が実施される下で、1941年6月1日に「朝鮮時報」（釜山府で刊行）、「南鮮日報」（馬山府で刊行）を併合し、1945年の解放時まで刊行された。この結果、「釜山日報」は太平洋戦争中において慶尚南道における唯一の日刊新聞であったため、当時の慶尚道地域の具体的状況を知る上でも、その資料的価値は高い<sup>60</sup>。

慶尚南道馬山市のホームページが紹介している当時の「警察資料」によれば、1939年現在の普及部数は12,374部で、購読者の内訳は朝鮮人2,767人、日本人9,398人となっている。この普及部数は、当時の地方紙では最高の数値を誇るもので、釜山本社の外に東京、大阪、奉天に支社を構えていた。

「釜山日報」は、解放後は「衆報」と紙名変更されて朝鮮語新聞となり、

59 釜山広域市、馬山市のホームページを参照した。

60 1941年6月1日、政務総監大野緑一郎は「釜山日報」の整理統合に際した「新発足の釜山日報に寄せる政務総監祝辞」において、「高度国防国家体制に即応する統一ある機構整備」のためであると語った（『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮編）』第15巻、193頁）。さらに、朝鮮総督南次郎は「道警察部長会議に於ける総督訓示」（1942年5月4日）において、言論出版の翼賛化方針を次のように明言した。「国論の統一を強化せんが為には、国民の指導啓発に密接不離の立場に在る言論機関の協力に俟（ま）つ所極めて多し。此の点に鑑み、本府に於ては言論界の自覚と相俟つて本年2月を以て日刊新聞の整理統合を完了し、通信雑誌其の他出版物に対しても亦（また）強度の統制を決行し、以て言論機関の新体制を確立せり。本職は今後統合整理各種言論機関を挙げて国策に順応し、朝鮮統治の翼賛に協力せしめ、以て統制の真意義を完ふせんことを期待するものなり」（同上書、97頁）。

その後「民主衆報」、「民主新報」と紙名変更された後、1962年8月1日に廃刊された。なお、これは現在発行されている「釜山日報」とは無関係である。

「釜山日報」の一部（1915年1月分から1944年3月分まで。ただし、欠号甚だ多し）は釜山広域市立市民図書館に所蔵されており、「電子資料室」でマイクロフィルムが閲覧できる。釜山広域市立市民図書館は、1901年に日本人団体の弘道会釜山支部が設置した釜山読書倶楽部を前身とするものである。これは、釜山に設立された最初の図書館であった。その後、1903年に弘道会が事務室を改築した際、「釜山図書室」という看板を掲げた。その後、釜山教育会の設立と共に弘道会から継承され、1912年6月から新たな「釜山図書館」として発足した。1915年には管理権が釜山府に移管され、1919年に「釜山府立図書館」となったが、解放後の1948年に「釜山市立図書館」と改称され、その後1995年に現在の名称となった。

本稿で紹介する記事は、釜山広域市立市民図書館が所蔵している「釜山日報」のマイクロフィルムのうち、下記のフィルムの中から朝鮮総督府の「国語」政策に直接関連する記事を選んで、転載したものである。

フィルム番号1997-0053

釜山日報（1941年4月、5月）（11884号-11943号）

フィルム番号1997-0054

釜山日報（1941年8月、9月、10月、11月）（12005号-12125号。ただし、12083号、12095号は欠号）

フィルム番号1997-0055

釜山日報（1942年5月、9月、1944年1月、2月）（12276号-12306号、12399号-12427号、12882号-12970号。ただし、12291号、12306号、12291号、12942号は欠号）

これらのフィルムは、1997年に政府記録保存所（現在の政府記録院）釜山支所において、「釜山日報」原本からマイクロフィルム化されたものである。2005年3月中旬、筆者（熊谷）は文部科学省科学研究費補助金を用



いて釜山に赴き、「釜山日報」マイクロフィルムの閲覧を行った。

なお、「釜山日報」記事を本稿に転載するにあたり、読みやすさを考慮して、筆者の判断の下に適宜、句読点を追加して付した。また、原文では旧漢字が用いられているが、新漢字に置きかえて示した。読解不能な文字は□で示した。

## 2. 「釜山日報」記事

「釜山日報」1941年10月1日付朝刊2面

学校では必ず国語を使へ／南総督最近の弛緩を戒む

【京城電話】国語の奨励については、五大政綱たる教学刷新の内容にもこれを取り入れると共に、内鮮一体の強化徹底の上からも、これが普及に努めてゐるが、南総督は三十日の定例局長会議席上、学校内に於ける国語使用が最近弛緩の傾向にあり、内鮮一体の強化徹底の上からも遺憾であると左の如く述べて、注意を喚起した。

最近、学校、特に中等学校以上の各校に於て、上級生が国語を使用せず、国語使用が<sup>やや</sup>弛緩してゐる様に聞か、学校内では日常語として奨励してゐるのであつて、それが弛緩の傾向にあるのは甚だ遺憾である。家庭に帰れば老人も居る事であるから、不便を□ふこともあらうが、学校内では是非共、励行しなければならぬ。五大政綱の教学刷新の中にもこれを謳つてをり、内鮮一体の上からも、学校方面では一段の工夫と研究を積んでもらひたい。

「釜山日報」1941年10月3日付朝刊1面社説

改革は当然／入学試験制度

朝鮮に於ける現在の中等学校入学試験制度は、端的にいつて□らぬものあるのは争はれない。恐らく教育界方面に於いても、かゝる意向が多いのではないかと思ふ。現在までは筆答試験は国語のみを行つてゐるが、これ

は寧ろ内地のそれに比すると、中途半端の不徹底さをもつ一方、筆答試験として国語のみを課する事が、果してその目的とする児童の負担軽減となるかは、極めて疑問の存するところである。のみならず、この国語のみを課することによつて、児童の智育に偏倚を生ぜしむ事は単なる懸念でなくして、事実問題として既に現はれてゐるといはれてゐる。新入学生の国語と他の科目とが著しい跛行状態にあるとは、よく聞くとところであるが、これはその事実を明かに物語るものである。

朝鮮に於ける国語試験の実施は、朝鮮として当然考慮さるべき内容をもつてゐることは充分肯定され、国語といつても読方、綴方、聞取りがその内容となつてゐるので、必らずしも全く暗記主義に堕してゐるとはいへないが、児童の智能測定の一標準とするには極めて不充分であり、非科学的であることは争はれないのである。児童の智能教育は能ふ限り平衡的鍊成を期すべきことはいふまでもなく、従来の教育が智育偏重に陥つてゐたとはいへ、これを軽視または跛行的鍊成を結果せしむるやうな制度は執るべきではないのは、いふまでもあるまい。試験地獄の救済が焦眉の急であるにせよ、かゝる弊を惹起するとするならば、速やかにこれを改むべきであり、然らざれば寧ろ内地の如く筆答試験を廃止するに如くはないのである。内申、口頭、体格の三段的考查の方が、ヨリ合理的といへるからである。

総督府学務局が国民学校実施を機会に、これが改革を行ふことに決定したのは、大いに賛成である。改革案によると、従来の国語科目を国民科及び理数の二教科中の各一科目を行ふやうである。学科試験を課することの是非は兎に角として、国語偏重を是正するのには殆んど異論はあるまい。明年度は読方と算数二科目となるやうであるが、大体に於て此二科目制によつて従来の教育上の欠陥は除去さるゝのである。今日時局の強く要請する国民の科学的水準の向上の観点よりすれば、児童教育の基本として数学的頭脳の涵養に力を注ぐ事は、最も重要な着眼でなければならないのである。数学による推理力の鍊成は理解、分析、綜合の高度智能の基礎をなすものであるからである。二科目制実施は従来より一層児童の負担を加重な

らしむるの感がないでもないが、現実を率直に認識するならば、それは一片の杞憂といつてもよい。今回の改革決定を当然の措置とする所以である。

「釜山日報」1941年10月10日付朝刊 2面

家憲と定めて十余年／女中加へた家族十一人が励行

始政記念日の前日、定例局長会議の席上、南総督は「国語常用と云ふ建前が、近来弛緩の傾きにあるとは甚だ遺憾と思ふ」と国語常用に兎角怠り勝ちな半島第二国民に温い鞭をあたへ、「生徒は成るべく国語普及のために家庭内でも国語常用に努むべきである」と戒めたが、家族十一人に女中まで加へて家庭内で一切国語常用を励行して既に十年余もなると云ふ国語常用の生きた手本の家が釜山にある。

国語を話さぬものは家族にあらずを我家の家憲とする、釜山が誇つてよいその“国語常用一家”とは、佐川町428の王本基弘氏の家庭である。旧のお盆も過ぎで三日宵の闇も深みゆく頃、この“手本の家庭”を訪れた。その住居は相当大きな玄関の構へから、内地式である。声を掛けるとドアが開いて、<sup>ちょうど</sup>恰度内地人婦人のお客さんと見えて、当家の嬢ちゃんや、坊ちゃん、三人の子供さんが行儀正しく板間に並んで応対してゐるところであつた。記者の訪問に十二か三のお譲ちゃん（後で判つたが稔代嬢）が「<sup>あい</sup>生憎お父さんは入院中のお母さんの所へ行れておられません」と、その発音の調子にしろ、態度にしろ、内地の子供と寸分変りはない。

此時、客の婦人は辞し去つて、稔代さんの「直ぐにお帰りになりますから」のはきはきした言葉にうながされて、二階の客間に案内された。純内地式の部屋の床の間に飾られた“内鮮一体”の墨痕淋凜しい掛軸も、この一家の家風を思はせるに充分である。作法も板についた国民学校六年といふ稔代さんのお茶の接待を受けながら、ものゝ二十分もたつた頃、主人王本氏が帰つて来たらしい。着換への暇も与へず向ひ合つた王本氏は、五十を二つも超えた白髪もちらちら見える、<sup>さすが</sup>流石は聞くにたがはぬ人格の香り高い人柄。朝鮮の人では普通もう隠居でもする頃と云ふ年に、まだ会社に

勤務中とのこと。この家長にしてその家憲ありの感を深くさせられる。

記者…国語常用は何時頃から—。

答…二十五年も前から相当力を入れて来ましたが、何しろあの当時のことであり、なかなか困難もありましたが、一向気に構はず続けて来ました。処、今では私共の家庭をうらやましがつてゐる人も多くなりました。結構なことだと思つてゐます。

記者…矢張、家庭教育の中心は主婦となりますが、奥さんの方は。

答…幸ひ、家内が昔の普通学校を出て居ります。もつともあの当事の事ですから女子教育も普及せず、教科書も無料で支給され、授業料も免除と云ふ時だつたのですが、何んといつても家庭では母が一番大切で、私よりも家内の方が真剣に家庭での国語使用に努めて来たのです。祖父や祖母が居た頃は矢つ張りそうはゆかず、上の子供らはそうばかりでもありませんが、今、末の五ツのと国民学校一年に通つてゐる子供は全然国語より外話せないのです。これは母の努力の現れで、国語常用は乳□（児？）教育からの賜です。

記者…子供さんは。

答…男が四人、女が五人で、皆で九人ですよ。

記者…産めよ殖せよの国策にも沿つてゐることになりますね。

答…いや全く勢揃ひで大きくなつて行くのが楽しみです。

この子供は皆がみな国民学校は第八を卒へて居り、長男昭一君は釜中を卒へて同志社大学在学中、次男兌一君又釜中を卒へて今受験準備中、三男徳一君は釜山工業の二年で、長女□代さんは港高女を卒業して嫁し、次女正代さんも同校卒へて家事を助けてゐる。其の下は国民学校部隊であるが、何れも両親に似て秀才揃ひ。

記者…冠婚祭礼は。

答…内地式でやつてゐます。時には不便を感じる場合もありますが、それは未梢事で最大なもの、達成には、そんなのはいちいち構つて居られません。どうしても我々の生活様式から建て直さなくては、ほんとうの国

語常用はむつかしいものです。お正月もお盆も皆、陽暦の方で迎えてゐます。私共が皇国臣民となる頃は、先づ皇室に対する忠誠を尽し、日本精神を体得して国を愛する事から内地的感情を持つ様になることが必要だと思ひます。永い間使ひ馴れた言葉を一時に国語常用にすることは容易とは云へませんが、而し何れは我が半島同胞が悉く国語を常用する迄になるべきものと思ひます。現在でも私達の家よりもつとつと模範的な立派な国語常用の家庭が他にも多くあると思ひますので、こんなお話をするのは実に僭越です。

と謙譲の一語で結んだ。（写真は国語常用の王本家＝鎮海湾要塞司令部検閲済）

「釜山日報」1941年11月5日付夕刊3面

菊薫る三日／各地の明治節／国語常用家庭表彰／晋州府の祝賀式

天高く馬肥ゆる秋空に菊花□郁と薫る三日明治節の佳辰を<sup>ほく</sup>卜し、晋州第一国民学校に於ては午前十時より同大講堂に於て、父兄並来賓多数列席の下に、いと厳肅に明治節の祝賀式を挙行したが、それに引続いて国語常用の優秀家庭表彰式を挙行。豊田校長より

△□林達男 △金本衛□ △金田時覚 △天岡□夫 △白川聖誠  
△山平皓一 △金宮光紀 △鳳山紀一 △千山武夫 △宮本純伸

右十家族に対し、誉れの賞品並に賞状が授与されたが、南総督を初とし国語使用奨励強調を唱へる今日に於て、奨励策として実に適切なる好い方案であるとして一般から讃称されてゐるが、之は同校豊川校長の創意で、道内に於てトップを切つた訳である。そのみならず、既報の如く同校に於ては道内教育の□で□□上部学級の緩和策もトップ□□つたのであるが、同豊川校長は語る。

南総督より常に強調せられる国語使用奨励の本趣旨精神に基き、二千名児童を通じて各家庭の之が徹底を努めてゐるが、一層之れを奨励徹底を促す意味に於て、過日全教員をして二千名近い児童の家庭を訪問調査の上、

校長自ら詳かに実地調査の結果、前記十家族□優良家庭を選抜した訳です。其の外にも国語常用の徹底した家庭が中に随分ありましたが、戸主たる者が居なかつたりしたので、之は完全なりと認め兼ねたので、遺憾ながら之等は省略しました。奨励の意味に於て、これから毎年国語常用優良家庭表彰を行ふ計画である。(写真は国語常用家庭表彰者)

『釜山日報』1941年11月8日付夕刊2面

### “国語の家” 設定／国語普及常用化美談

【京城電話】 学校でも家庭でも職場でも国語の使用を励行しませう！と、一日の愛国日常会に二千四百萬愛国班員が固く申合せた国語使用の徹底化については、従来の生ぬるい態度を敢然と一擲し、全聯盟員が真剣になつて国語の常用化に努めてゐるが、この国語常用の励行に因んだ美はしい物語が総聯出張員より齎され、各方面の注目を引いてゐる。咸北羅南本町国民学校では児童の国語常用化が家庭において励行されぬ為め、国語奨励上<sup>すくな</sup>からざる悪影響を及ぼし居るのを深く憂ひ、家庭を国語教育の苗床たらしむるべく、いろいろと腐心研究の結果、学校児童の国語常用化は勿論、これら幼い学童を通じて一般家庭人も必ず国語の常用を励行せしめる方法として、全家族が国語を常用する児童の家庭を調査し“国語の家”と指定し、表札を掲げしめ、この誉の“国語の家”では絶対に朝鮮語の使用を禁ずることにして、昨年以來実施したところ、その成績は頗る良好で、各児童もこの“国語の家”の光榮に浴せんと父兄母姉に国語の手ほどきをするなど、ほゝ笑ましい風景を展開して国語奨励に多大なる効果を収めてゐるが、尚同校ではこの“国語の家”父兄母姉が学校を訪問の際は、必ず“国語の家”の家族たるマークを<sup>はいよう</sup>佩用せしめ、学校と家庭との緊密な連絡にも大きな効果をあげてゐる。

「釜山日報」1941年11月13日付朝刊 2 面

国語の使用不徹底／手古摺らす上級学生

【京城電話】 総督府に於ては、内鮮一体の具現化促進の目的を以て国語の普及奨励に鳴り物入りで宣伝し、愛国班や里洞町単位で講習会を□各地方で開催し、国民学校生徒の如きは学校内だけでも国語を使用してゐるにも拘はらず、中等学校以上の生徒は男女とも大部分が朝鮮語のみを使用し平然たる実情に鑑み、学務局では過般来、各道や学務当局に対し之が改善並に国語の使用方法につき種々指示したが、今尚実行されてゐないので、徹底的改善策につき調査研究が進められてゐるので、近く具体的励行方法を全関係方面に指示し、積極的国語の使用励行に乗り出す計画である。

『釜山日報』1942年 5 月 2 日付夕刊 2 面

権威者を網羅し国語常用運動座談会／本社が今日京城ホテルで開催

【京城支社電話】 大東亜戦争下、半島の銃後態勢確立強化に更に拍車をかけるため、総督府総力聯盟では南総督の意を体し、徹底的国語常用普及運動に全力を傾注することゝなつたが、本社もこれに対応し、さきに全鮮国語一色化の時局宣言を發表、全鮮的に猛運動を展開し、紙上を通じ国語普及常用の緊要なる所以を強調すると同時に具体的方策を樹立し、極力これが急速達成に努力してゐるが、先づその具体策の一つとして各方面の人士を網羅した国語常用運動座談会を五月二日午後三時より京城ホテルで開催、忌憚なき意見を開陳交換し、本運動の目的達成に資することゝなつた。主なる出席者の顔触れはつぎの通りである

△川岸聯盟総長 △倉茂軍報道部長 △鈴川司政局長 △甘庶放送協会  
長 △鳥川聯盟総務部長 △森図書課長 △本多学務課長 △倉島情報  
課長 △筒井総力課長 △島田編輯課長 △矢尾板事務官 △夏山茂氏  
△津田節子氏

『釜山日報』 1942年 5 月 2 日付夕刊 2 面

皇国精神に脈打つ国語生活に徹して完全な日本人となれ

我々の生活に言葉ほど大切なものはない。言葉がなければ意思を通じ合ふことは出来ない。言葉といふものは話をする時にだけ必要なものではなく、話をしない時でも無言で何か考へてゐる時も必要なものである。

電車に乗つてをつても、いろいろなことを考へる。あの人の所に手紙を書きたい。家に帰つたら御飯をたべて、忘れないうちに書かう。それはそうと、向ふ側に腰掛けてゐる人は馬鹿に派手な服装をしてゐるが、どこの奥さんだらう。この時局に余り感心しない、などと考へる。これは皆な言葉によつて考へるのである。言葉がなければ、考へるといふことも出来ないのである。

考へるといふことは、心の中で一人で話をすることである。達磨大師は面壁九年にして悟りを開いたといふが、彼は口で喋る以上にもつともつと沢山言葉を心の中で使つたのである。あゝでもない、かうでもない。一生懸命考へたのである。

苦心惨憺發明工夫をこらす間といふものは、一心不乱に心の中で言葉を喋りつゝけてゐるのである。我々から言葉を奪ひ取つたら、我々の生活はなくなつてしまふ。文明も開化もない

我々は起きてゐる間はもちろんのこと、寝てゐても夢をみなが（ら－脱字）話をする。大きな声で寝言をいつたりする。つまり、我々は一年中をぶつ通して、寝ても起きてても言葉によつて生活してゐるのである。我々の喜怒哀樂も直ぐに言葉によつて表現されるは、絶対不離なものだ。

人間と言葉といふもの、そして言葉といふものは、同じ日本の言葉でも九州と北海道とは違ふ。日本とイギリスやロシヤと言葉の違ふのは勿論である。このやうに地理的に違ふばかりでなく、歴史的にも違つてゐる。日本の言葉、即ち国語には国語として特色があり、三千年の間培はれた皇国精神が流れてをり、遠き祖先から承け継いだ□しい生命がそこに脈打つてゐるのである。



我々はこの国語を通じて、日本の真個の姿をみることが出来る。日本人としての思想を味ふことが出来る。そして日本の歴史、日本の国体を知ることが出来るのである。つまり、我々は国語を用ふることによつて、初めて完全な日本人となることが出来るのである。例へば、外国から日本に帰化した人があつても、これが国語を話すことが出来なかつたら、その人は単に法律上の日本人に過ぎないのであつて、決して完全なる日本人といふことは出来ないのである。我々の話す国語には、何千年来祖先から受け継いだ生命がこもつてゐる。

昔の人は国語のことを「言霊」（ことたま）、即ち魂のこもつた言葉と称へて敬ひ尊んだ。米英人はいつも物は物、精神と各々別な存在として考へてゐるが、日本人にはどんな物にも生命があり、精神があり、魂があると考へてゐる。だから、靈妙あらたかな国語に魂がこもつてゐると考へるのは当然である。

国語生活に徹しなければ、真個の日本精神に触れることが出来ない。完全な皇国臣民となることが出来ないのである。朝鮮が日本の一部となつてから既に三十年以上も経つてゐるのに、二千四百萬の半島人の中で国語の判る人は僅にその一割五分といふのでは、甚だ心細い事ではなからうか。今日、何より大切なことは、半島人諸子が一日も早くそうして、一人残らず国語を勉強して、光榮ある皇国臣民として恥しくない国民になり切ることである。

国民総力朝鮮聯盟が総督府と協力して国語の普及、国語の常用し、即ち国語生活の徹底といふことに努力してゐるが、これは半島の人々が自ら進んで努めなければ効果が<sup>おほつか</sup>覚束ないのである。今や、我が国は大東亜戦争によつて南に西に勢力範囲が俄に<sup>にわか</sup>拡大され、また一日々々とさらに拡大されつゝあるが、これらの地方にある民族は新に日本人になつた喜びにひたりつゝ、一生懸命に国語を勉強してゐる。半島の人々はこの際、真に完全な日本人となるためにも、また南太平洋や西太平洋における新属同胞に対し模範を示す上からも、これまで以上の努力をもつて国語の習得、国語生

活の徹底といふことに邁進せねばならないのである。

「釜山日報」1942年5月3日付朝刊2面

国語普及と供米で／慶南府尹郡守会議／来る十八日開催に内定

慶南道府尹、郡守会議は来る十八日道庁第一会議室で開催される事に内定した。今回の会議では西岡道知事より、曩<sup>さき</sup>の知事会議に於る総督訓示を敷衍徹底するが、特に国語普及に関する有効適切なる方策、及び供米増米に関する施策を諮問事項となし、府尹、郡守の答申をもとめることになったが、この二大事項が現下の重要問題だけに、第一線にあつて直接大衆に接する府尹、郡守の答申内容こそは極めて注目される。

「釜山日報」1942年5月3日付夕刊2面

全鮮国語一色運動／思ひ切つた手段で／使はせることが先決／島田本府編輯課長語る

【京城支社発】全鮮国語一色運動に即応して教科書を改善、三段構への編輯で実生活に国語を浸透させようと画期的な創意を盛つた普及方法を発表した本府島田編輯課長は、国語普及常用運動につき次の如く語つた。

先づ生活問題と結び付けることが肝要で、国語を知らなければ娯楽がえられない。演芸も楽しめない。ラジオも解らないし、本も雑誌も読めないといふやうにして、どうしても国語を解さなければならぬやうに、生活的に退つ引きならんやうにしたらよいと思ふ。現在は鮮語で読み、聴き、話して充分不自由を感じぬ環境におかれてゐるので、習慣上また便宜本位から鮮語を使用する。だから、気の毒だが国語を解せぬ者は雇はんとか、不慣れな者は昇給もせ<sup>マ</sup>ないといつた風な、思ひ切つた手段をとらなければ駄目だ。何といつても半島人の為になる事であり、将来における到達点である以上、国語の習得常用は絶対必要で、その点を理念的に、信念的に明確に把握し、青壮年層が率先して大いにやつて貰ひたい。少年は理想的にやつてゐる。国民学校では教室で先生と問答し、運動場でも常に先生と接し

てゐる関係から、いつも国語を使ふ。それが中等学校になると、先生と会話する機会が少くなり、殆んど話を聴くだけにとどまり、運動場でも先生は姿を見せぬので生徒同士は自然、鮮語を使用する。専門学校ではそれがなほ酷くなり、学生はノートをとるだけだから、国語使用の時間は極めて僅かなものになる。家庭に帰れば全く鮮語使用であるから、学校で国語を教へても使ふ機会がないといふのが偽らざる現状である。教へるだけでは不可ない。使はせるやうに仕向けることが大切である。これは学校教育についての反省すべき問題であるが、一方社会人としても国語を知つてゐるならば、必ず使用するやう心掛けなければならない。

「釜山日報」1942年5月3日付夕刊2面

国語習得にも絶好の機会／内地派遣の青年農業報国隊

【京城支社発】総督府幹旋による内地派遣の第二回男女青年隊の農業報国隊は全鮮より選抜され、約五百名がそれぞれ出発し、近畿地方の出征軍人農家に配置して、十日間乃至一ヶ月間に亘つて労力奉仕作業に従事することゝなつてゐるが、総督府を初め総力聯盟、その他各種機関に於ても国語常用化運動に全力を注いでゐる折柄なれば、男女青年隊員とも此の機会を逸せず、営農法は勿論、充分に国語を習得し、帰鮮後は地方農村の中堅青年となり、国語を以て指導啓発に当らしむべく計画され、結団式場に於ては山沢農林局長より此点を強調すると共に、同伴の監督者や指導員に対しても特に細心の注意を払ふやう示達した。

「釜山日報」1942年5月3日付夕刊2面

先づ母親から／一日一語通信講座／水晶国民校の校外常用化運動

水晶国民学校では、折角校内で徹底した児童の国語生活が家庭にあつて壊されない様にと、国語常用校外運動を始めることになつたが、それは同校の独得とする月例母姉会を動員することになり、その方法は先づ「母の国語」と云ふ通信講座を開いて一日一語式に、例へば「こんにちは」の様

な平易な言葉からだんだん進んで、次の月例会には習った三十語を復習したり、又考査も行ふことにし、通信連絡は各家庭の児童があたるとする。尚、第一回の基礎的申合せは、家庭で必ず創氏改名の名前を国語で呼ぶことにし、児童にはお母さんが旧名で呼んだ場合は、答へずに注意を申上げることにとすると。この指導には毎日専任の訓導が担当するが、その成果は期待される。

「釜山日報」1942年5月3日付夕刊2面

#### 優秀標語決る

【京城支社発】国語生活の実践強化運動については、各角度より全鮮的に普及指導督励中であるが、時局の重大化に伴ひ益々本運動の急速な展開を期せしむる必要あるに鑑み、総督府に於ては総力聯盟と連絡を取り、国語生活実践強調標語を募集中であつたが、左の五点を優秀標語と決定し、ポスターや印刷物を作製し全鮮に配布することゝなつた。

- 一. 一億の民言葉は一つ
- 二. 国語で進め大東亜
- 三. 内鮮一体先づ国語
- 四. 日本精神国語から
- 五. 慣れよ親しめ皇国の言葉

「釜山日報」1942年5月3日付夕刊3面

#### 国語常用の五家庭／晋州府吉野国民校で表彰

本社提唱の全国国語一色化運動は各方面から絶賛を浴び、各職場に各家庭に国語常用の旋風を捲き起してゐる最中、晋州公立吉野国民学校に於ては国語奨励の為、<sup>かね</sup>予て昨年十一月三日明治節の佳辰を期し、第一回の国語常用家庭表彰を創始して、其後、本年二月十一日紀元節に第二回の表彰式があり、之が表彰式が重なる度に熱を新たにし好成果をあげてゐたが、今度は第三回目に当る国語常用家庭表彰式が、青葉薫る二十九日聖寿無窮を

□ぎ奉る天長節の佳辰を<sup>ほく</sup>卜し、午前十時半より同校講堂に於て厳肅なる天長節拝賀式に次いで、来賓多数列席の下に先づ一同国民儀礼がありたる後、豊田校長より左記国語常用優良五家庭に

△高山晋一 △大田□基 △徳山文英 △景山高明 △福原永□

目出度き褒状、並に賞品が授与せられた。この被賞者五名は誉れの褒状を左手に、喜ばしい顔を揃へて感謝の礼を述べ、拍手裡に式が閉ぢたが、同校豊田校長は語る。

この褒状授与は第一回が十家庭、第二回が二家庭、今度第三回が五家庭、計十七家庭である。年に四回、即ち四大節毎に之が優良家庭を調査選択し、漸次に表彰する計画である。之が奨励に就ては、児童を通じ家庭へ実行を励行してゐる次第ですが、段々と好果を揚げてゐるので、私としては<sup>まこと</sup>洵に慶賀に絶えない。今回釜山日報社に於て全鮮に呼掛け、国語常用運動を展開されてゐることは、洵に結構な計画である。一つ大いにやつて貰ひたい。

「釜山日報」1942年5月5日付夕刊2面

家でも職場でも断然国語でゆけ／司政局で常用打合会

【京城支部電話】総督府及び総力聯盟の国語常用普及強化運動実施要綱を協議する打合会議は、二日午前十時半より総督府司政局長室で鈴川司政局長司会の下に開催された。出席者は伊藤勅任事務官、筒井総力、本多学務、島田編輯、吉川保安各課長、村上図書課事務官、及び社会教育課の矢尾板事務官、また総力聯盟より川岸事務総長、鳥川理事、西山宣伝部長等であつて、全鮮三千余校の国民学校や簡易学校を動員して夜間国語講習会を□□的に開催、官公署職員の執務中は勿論、各自家庭に於ても国語常用□□行会社に関しても協力を求めること等につき協議打合を行ふた。

「釜山日報」1942年5月5日付夕刊2面

内鮮一体先づ国語／慶南道／奨励標語をバラ撒く

国語は国民の思想、精神、文化と一体不離、内鮮一体具現には不可欠なものとして、半島大衆の国語愛用生活が強力に提唱される時、慶南道国民総力聯盟では国語奨励標語入りのセロハンとビラを作成して、道内に広く配布徹底することになったが、今回選ばれた国語普及標語は左の五種で、一、二は一萬二千枚のセロハンに、また三、四、五はビラ三枚にそれぞれ印刷するものである。

△国語で進め大東亜 △慣れよ親しめ皇国の言葉 △一億の民言葉は一つ △内鮮一体先づ国語 △日本精神国語から

「釜山日報」1942年5月5日付夕刊2面

婦女子から先に義務講習を実施／慶南固城郡

【固城支局電話】我が社が曩に半島民衆の皇民化促進運動として国語全解運動を宣称して以来、国語常用化運動は各地とも雄叫びの声を挙げているが、これに呼応し固城郡では、早くも各邑面青年隊を中心に国語講習会を一斉に開講せしめた外に、女子専任国語普及指導員二名を採用し、国語の常用は先づ家庭の主婦からとの目標の下に、全郡内婦女子の国語全解運動に乗り出すことに方針を決定、目下、具体案を練つてゐる。

十六年度末調査に依れば、固城郡内で国語を解せる者が総人口の約1割強、即ち一萬七百六十四名に過ぎないと云ふ誠に心細い現状に鑑み、本年度からは積極的に国語全解□□を展示し、各部落毎に先づ以て国語講習会を開き、国語の解せない婦女子は義務的に受講せしめることになつてゐるが、講習の指導には前記専任指導者として採用された茂山久子さんと塚崎千代子さんとが当る外に、郡総力係員も輪番的に指導することになり、大いに張り切つてゐる。

「釜山日報」1942年5月5日付夕刊2面

情報課の壁新聞／今後月二回発行されます

【京城電話】総督府情報係に於ては、大東亜戦争勃発以来、時局認識の周知徹底、国語常用、全半島民衆の覚醒等に種々工作中であつたが、本年二月以来全鮮的に配布してゐる月一回の壁新聞が非常に好評を博してゐる実情に鑑み、更に本月よりは月二回に増発して官公署や学校を初め、会社、工場、其他盛り場や掲示板等に展示して周知徹底せしめ、目的達成に邁進することゝなつた。

「釜山日報」1942年5月6日付夕刊2面

国語一色運動／その日その日／親切心で導け／帰來の増田法専校長棧橋で語る

京城法学専門学校長増田道義氏は約二週間の予定で東上中のところ、五日朝釜山上陸特急「あかつき」で帰城したが、左の如く語る。

十七年度より京城法学専門学校の大拡充を断行することになつたので、東大の末弘巖太郎博士に会つて、教授をよこして頂くやうに折衝して來た。大体諒解を得たので、東上を機会に各方面を視察したが、特に塩原職業局長の案で「東部国民勤勞訓練所」を視察した。この訓練所は統制經濟下の□□業者に対し一ヶ月の期間で精神訓練を行ふ機関であるが、一千名を一ヶ月<sup>ママ</sup>つゞ訓練してゐるが、出てからの成績も極めて良好である。これに將來は半島出身者を入れて、内鮮一体に再教育を施したいとの意見を聴いたが、<sup>さすが</sup>流石に朝鮮を解することの深い塩原局長のご説だと、先づ感服した。朝鮮にも、かうした訓練所は大いに必要となるだらう。次に、東京での感想であるが、ものは多少足りなくとも、お互が親切で美しい気持ちで分け合ふならば、寧ろものが豊富で奪ひあひに血眼になるよりも遥かに麗しいと思つた。朝鮮はまだまだものが豊かだと云はれるが、こゝでお互に大いに反省せねばなるまい。国語一色運動は当然やるべきことで、わが法専は率先してやつてゐるが、將にこの運動は教へ使はせるとともに、親切心で

導くことが必要ではないかと思ふ。東京の電車の車掌さんが親切なのにはスツカリ感心した。切符きりませうかと、頗る鄭重である。お客さんの方でも、つい有難うと云ひながら切符をきつて貰ふと云つた有様で、かうした温い心との融合が大東亜戦下一段と深められたやうである。かうした温い心と心で導くのが、国語一色運動にも大いに必要ではないかと思つてゐる。(写真は増田法専校長＝鎮海湾要塞司令部検閲済)

「釜山日報」1942年5月7日付夕刊1面

国語普及／愈よ全鮮一斉に常用運動を展開／指導委員会で要綱決まる

【京城電話】第四十四回総力聯盟指導委員会は六日正午から総督府第一会議室において南総裁、大野副総裁、波田、川岸新旧両事務局総長以下出席の下に開催。南総督から事務局総長更迭に関する挨拶あり。ついで新旧両総長の挨拶あつてのち、国語普及運動要綱を附議決定。聯盟事務局より「矯正を要する米英式風習に関する調査」の報告あつて、午後一時三十分閉会した。

六日正午から開かれた第四十四回総力聯盟指導委員会において、全鮮に展開する国語普及運動要綱が決定された。即ち、新年度最初の総督府局長会議席上、南総督が国語普及徹底を訓示して以来、聯盟理事全鮮大会、知事会議、警察部長会議各席上において力強く叫ばれた国語普及運動については、各関係機関にあつても鋭意その具体策を考究中であつたが、司法局では学務局、警務局、情報部、総力聯盟と協力して全鮮的に展開すべき運動要綱を作成、成案を得たので、六日の指導委員会の協賛を得たものである。斯くて本要綱を基調として、全鮮各道にあつてそれぞれ各地域に適した実施策を作成、全鮮一斉に国語常用運動を展開することゝなつた。要綱次の通り。

#### 趣旨

本運動は半島民衆をして確固たる皇国臣民たる信念を堅持し、一切の生活に国民意識を顕現せしむる為、悉く国語を解せしめ、かつ日常用語とし



て、これを常用せしむるにある。

### 運動要目

（一）常用に対する精神的指導を、皇国臣民として国語を話し得る誇を感じ得せしむること。▲日本精神の体得上、国語常用が絶対必要な所以を理解せしむること。▲大東亜共栄圏の中核たる皇国臣民として、国語の習得、常用が必須の資格要件たることを自覚せしむること。

### （二）国語を解する者に対する方策

官公署員は率先国語常用を励行すること。▲学生、生徒、児童は必ず常用すること。▲会社、工場、鉱山等に於ても極力常用を奨励すること。▲青年団、婦人会、教会その他集合に於ても国語使用に努むること。▲苟<sup>いや</sup>しくも国語を解する者は必ず国語を使用するは勿論、凡有機會に国語を解せざる者に対する教導に努む。

### （三）国語を解せざる者に対する方策

国民学校附設国語講習所の開設。▲各道講習会の開催。▲国語教本の配布。▲ラジオによる講習。▲雑誌による講習。▲平易なる新聞の発行。▲常会における指導。▲児童生徒による一日一語運動。▲各所在における国語を解せる者よりの指導。

### （四）文化方面に対する方策

文学、映画、演劇、音楽方面に対して、極力国語使用を勧奨すること。▲ラジオ第二放送に国語をより多く取入れること。▲諺文新聞雑誌に国語欄を設くること。

### （五）国語常用者に対する表彰及優遇的処遇

「国語常用の家」等、国語常用者又は国語普及に功有る者等を表彰すること。▲公職その他の就職、及びその待遇等の各般の処遇付、優先的に考慮すること。

（六）此際官民協力し、全鮮的に本運動展開に付ての明朗且熱意ある気運を醸成するに努むること。（七）国語普及年次計画を樹立すること。

「釜山日報」1942年5月7日夕刊1面コラム「閑裡帖」

六日の総力聯盟指導委員会で国語常用普及運動の要綱が決つた。▲要するに、国語常用への普及運動は、国語は解し乍ら話し<sup>なが</sup>渋つてゐるものと、国語を全然解せずに語らうにも語れずに居るものとの二つであるから、話し渋らぬ様に円滑作用と、国語の全解へ眼と耳を開けてやる啓発作用とを適切に行ふ事に尽きる。▲尤も国語を解すると云ふもの、中にも全解と半解とがあり、その半解と云ふものにも程度があり、更に語る事に解せず、聴くに解すると云ふ片解者もあり、その中にも亦程度があるから、それに指導の適切を必要とする事は勿論である。▲全解者であり乍ら、その全解を活用せぬもの、如きは、半解者乃至片解者以上精神的に話せないものであるから、国語常用運動の風上には置けぬと云はねばならぬが、これも強<sup>あなが</sup>ち□意を以て一々洗ひ立てる理由があるとばかりは云へないであらう。▲即ち、全解者でも人に依つて発音の巧拙が、実際に活用し常用する上に自ら遠慮の条件を作つてゐる場合もない事はない。▲その多くは拙い発音が笑ひの種となり、それに羞恥を感じるところから来るものもある。▲これらは講習その他の指導を受け、自からの熱意で矯正する可能性もある事に心掛くべきだが、要するに国語常用が議論の時代では全然なく、只実践の時代である以上、発音の如何などにこだわらず、一切の支障に超越すべきであり、またそれと同時に、同情と理解ある指導を日常の接触に於て内地人互ひが与へてゆく事は、導くにもものゝ判つた話せる道と云へる。

「釜山日報」1942年5月8日付夕刊2面

国語の家と人(1)

国語生活に徹しなければ真個の日本精神に触れる事は出来ない。日本精神を知らずしては、完全な皇国臣民となる事は出来ない。即ち、皇国臣民化は先づ国語を解する事に始まる。本社が当局と呼応して全鮮に国語常用運動の展開を力強く提唱した所以の主体はこれにある。以下は国語常用の家と人の姿を巷に求め其实相を紹介して国語一色化運動への一□示とした

い。

…人…

### 国語に生きた者ここに健在／牟田口將軍と金君

“これからの半島人は、ほんとうの日本臣民になる為に国語を一生懸命にやらねば駄目だ”と訓す大佐。その□で熱心に聞く酒屋の御用聞。「しつかりやります。」とおぼつかない国語で誓ふのだつた一処は□山の○○部隊一時は十年前の昭和七年。そして星霜流れて去る三月の某日、シンガポール陥落の感激深いニュースを見てゐた中年の男が、「あつ！牟田口部隊だ。」と叫んだ。叫んだ人は、十年前“国語を勉強せよ”と訓された現京城の朝鮮商工新聞販売部監督金学□（二十八）君であり、訓した人はシンガポール攻略の武勲に輝く牟田口部隊長である。国語全解運動が全鮮に巻き起されてゐる時も時、これは感激深いニュースだ。

「牟田口閣下は、果して私を憶えてゐて下さるだらうか。然し私は、一生忘れ得ません。」

十年前のたどたどしい国語も、今は流暢に変つた。変つた金君は当時の想ひ出を追ふ。手にした書簡は、去る日“マレー攻略戦の秘話”だ。

兵団長（牟田口閣下）は涙さへたゝへ、「俺の部下に俺が前線に来たのを、督戦に来た等と思ふ水臭いものは一人もゐない。今夜、部下はあの敵の最後の主陣地に突撃するだらうから、せめて自分が部下の戦死する前に手を握つて別れたいと思ふからだ。誤解せんでくれ。」

○○主任参謀の談話の一節だ。

「当時の閣下也大へんやさしい方でした。私が御用に朝早く行きますと官舎の庭なぞに居られ、「しつかり国語を勉強するんだぞ」と良く云れました。私も一生懸命に閣下の御期待に添ふ様、努力しました。」

その頃金君は石原醸造部の集配人をしてゐたのだが、その忙しい余暇を見ては「イロハ」から勉強したのだ。皇国臣民化の一途目指して牟田口部隊長の訓□に力づけられながら…部隊長は去つていつた。

金君にも勤務先の変化があつた。其後、昭和十二年現商工新聞に、「国

語を解する」ことから販売部の監督になつた。

「牟田口閣下のあの懐かしいハゲた頭がスクリーンに映つた時は吃驚しました。実に懐かしい」と「国語」で話す金君。金君の国語が一生忘れ得ないものなら一金君が立派な皇国臣民として生きる以上、永遠に牟田口部隊長の想出は続くだらう。

「それにしても、閣下は負傷されたそうで、心配してゐます。」

とつゞける。紅潮して語る金君の目が窓外に、勇ましい□□—尚武の風がマレーにも吹いてゐる事だらう。十年前、一介の青年に“国語を話せ”と訓れた牟田口部隊長の志は、今此処に一つの実を結び、そして二千四百萬半島民衆の総てに実を結ばせんとしてゐる。(写真は語る金君)

#### …家…／近親者も驚ろく内地式生活／大邱の松原氏一家

一家揃つて純内地式の生活を送る頼母しい家庭＝大邱府東城町二丁目三九雜貨商松原清勝氏（旧名李根元）の家庭を訪問しての記者の一問一答。  
記者 お家族は何人をられますか。

松原氏 本町国民学校六年に在学中の長男鉄男と次男一郎（現□山国民学校一年生）、更に三歳になる長女ともに五人です。

記者 お子様達も国語で会話しますか。

夫人 私達一家は永らく大阪に居住してゐた関係上、子供達は朝鮮語は全然知りません。

記者 内地にはどの位住まれましたか。

松原氏 今から三年前、大阪で約十五年も住んでをりました。今この通り純内地式の生活をしてをりますと、田舎の近親者が訪づれて驚いてゐる次第です。

記者 では、朝鮮語は全然しらないのですね。

松原氏 私と妻は□□（朝鮮？）語は知つてをりますが、使用する必要がありません。

記者 内地式で生活すると、経済的にどう思ひますか。

夫人 この頃では朝鮮式にくらべて、半分もゐらないと思ひます。一番経済的に助かるのは、<sup>オンドル</sup>温突の燃料代がゐらないことです。

記者 温突がなくても冬期は過せますね。

夫人 もう馴れてゐますから、平気です。

記者 国語常用運動が盛んになつてゐるが、これに対する御感想は。

松原氏 全く結構なことです。私は以前から田舎の近親者に進めてをりますが、此機会に積極的に奨励しようと思ひます。（写真は松原氏）

「釜山日報」1942年5月9日付朝刊2面

“創氏”に相応しい名前を付けませう／赤ちゃんに“内地式名前”を

決戦下生れた赤ん坊には内地式名前をつけませう……最近半島人側に於ける出生児の名を、府の戸籍係を通じ調べて見ると、折角父親、または母親、其の他兄さんであり姉である家族の者は全部創氏改名し、皇国臣民としての大きな歡喜に包まれてゐるにも拘らず、生れた赤ん坊の苗字は日本氏であり乍ら、名前は従来<sup>の</sup>恭順とか貞淑とかいつた様なものが多く、矢張り赤ん坊へも□雄とか一郎とか云ふ内地式名前が□しいとは戸籍係の希望である。

尚、最近に於ける半島人側の死亡率、出生率は大体に於て、一日平均出生に対し死亡は十分の二、又は十分の三と断然出生率が多く、「全く頼母しいものです。」と係員は忙しい中にも、朗かに手続きを執つてゐる。

「釜山日報」1942年5月9日付夕刊2面

国語普及を第一に／上野警察部長の帰来談（抄録）

去る四、五、六、三日間開かれた全鮮警察部長会議より帰任した慶南道警察部長上野武雄氏は八日、道庁部長室において左の如き談話を試みた。

国語普及徹底 国語の普及徹底を図ることは、総督閣下の御訓示もあり大いに意を注ぐつもりである。それには先づ、警察座談会を積極的に動員したい。警察座談会は各警察署、各駐在所、各部落毎に開催させ、青年男女

を主たる対象として開き、国語の普及徹底を図る一方、民心の指導にも当らせる。国語の普及徹底は内鮮一体具現化のために、当然急がねばならないと思ふ。(以下省略)

「釜山日報」1942年5月9日付夕刊2面

## 国語の家と人 (二)

徹底した模範家庭／岩山馬山城湖国民校訓導／実践に理論抜き／子供まで  
国語一点張りで通す

馬山府内に於ける国語常用の一家＝同府内新町十八番地居住城湖国民学校訓導岩山朋靖(三七)氏の一家がある。同氏の家族は、夫人明代(三二)さんとの間に長男武義君(一〇)(城湖国民学校三年生)、長女幸代さん(八ツ)、次男直義君(四ツ)の三人の愛児があり、極めてなごやかな家庭である。訪往の記者に岩山氏は左の如く語った。

今丁度、家内が子供を連れて釜山に行つて不在なんですが、私の家庭は昔から国語常用をしてゐます。まあ動機と言へば、私が教員になつたからと言ひますかね。大局的に考へて、国語常用と言ふ事は理屈抜きの問題です。幸ひ家内が馬山高女を出てゐますし。私の子供はみな国語ばかり、鮮語はほとんど知りません。殊に三人兄弟の内でも次男の直義なんか国語一点張りで、鮮語は全然知りません。内鮮一体と言ふ事は、一つの国語をもつてせなければ到底望めないと思ひます。しかし、多年の慣習で未だ親しみはやはり鮮語にある事は否めませぬが、皇国臣民の一人として子供の将来にも考へを及ぼし、今後□徹頭徹尾国語一色で邁進してゐます。初めはやはり周囲の者や□□から多少何やかやと云ふ者が無い事はありませんでしたが、私は敢然とそれらの言をしりぞけまして、現在のやうに国語常用をしてゐます。所がまだこの常用が徹底してゐないと見え、犬も食はないと云ふ夫婦喧嘩の時など、チヨイチヨイ私も家内も口から朝鮮語が飛び出しますので、思はずしまつたと感じる事があります。まあ、夫婦喧嘩の時でも国語を使ふやうにならなければ、満点とは言へませんね。ハハ…。

尚同氏は晋州□□出身の□□□□に富む模範教育家である。（写真は向  
つて前列右端長男武義君、其の後岩川訓導、中央長女幸代さん、其の隣夫  
人に抱かれてゐる幼児は次男直義君、左端は子守女）

「釜山日報」1942年5月10日付夕刊2面

所期の効果を発揚せよ／偉大な朝鮮統治の成果を裏書／西岡知事慶びを語  
る

政府当局の大英断をもつて朝鮮に徴兵制度の施かれた事は、<sup>まこと</sup>洵に感激に  
堪へない。南総督着任以来、内鮮一体に、皇民化に、教育拡充に、あらゆる  
積極的施策が結実して、今日の徴兵制度となつたものに他ならないが、  
半島人もこの際、真の皇国皇民として大元帥陛下の下に一死殉国の兵役義  
務に服する慶びと自覚に燃えなければならぬ。また、この徴兵制度の施か  
れたことは、偉大なる朝鮮統治の成果を裏書するものに他ならないが、  
十九年度から施行されるについては、この準備期たる二年間において半島  
人は更に更に日本精神に徹するための心構へをなし、国語の習得はもとよ  
り皇軍の一員として立派な精神、肉体両面の錬成につとめるやう、一段の  
努力を求めて已まない。而してこの所期の効果を大いに発現するやう、此  
際特に望む次第である。

「釜山日報」1942年5月10日付夕刊2面

国語の家と人（三）

商売気離れて普及につくす居酒屋／亀浦新名氏

「生活は国語で」

居酒屋の壁に、こんな貼紙が貼つてある。白い紙に、墨□鮮かに書かれ  
てゐる。

「この貼紙は、何か、役所からの指導でもあるのですか。」

主人らしい人をつかまへて、聞いて見る。

「いや。」と主人は藪から棒の質問に一寸<sup>ちよつと</sup>怪訝さう。役所からの指導がな

ければ出来ないのかと、反問でもしさうな顔付きである。

「ほ、う、さうですか。では、お宅は皆、国語常用ですか。」

「皆といふわけにはゆきませんよ。」

話が余りだしぬけなためか、主人は、記者の質問に答へるといふより、此男の正体は、一体何者であるかと不審がる眼が記者を上から下へじろじろと見て、語気も大分荒くなつて来る。そこで記者が身分を明かすと、「あ、そうですか」と、こゝで国語の発音も打解けて来る。

いやどうも、実は私の家では国語専用とまではまだゆきませんが、日常生活を何んとか国語でゆかうと努力をしてゐるのです。一つはこんな酒屋を□（営？）んでゐます関係上、お客さんが朝鮮語でやつて来る時、商業柄いろいろこまることがありますから、その向ふの先手をうつといふ意味で、こんな貼紙をつけたのでもありますが、出来る事なら皆が国語常用でゆかうという、微力ながら宣伝のつもりがないわけではありません。

所は□浦□□通りの左□□二旅館である。二階は旅館、下は酒屋といふことになつてゐるが、この貼紙は旅館部の方にもすみずみまで貼つてある。主人の新名□哉氏は洛東江蔬菜商会の代表役員で、亀浦では相当の顔役である。

「国語常用運動は我等半島人にとつては、むしろおそい憾<sup>うら</sup>みさへあります。」

と進んだ新名氏の言である。

「私の考へでは、常会を早く国語でやるやうにしたいと思つてゐましたが、まだそこまで田舎はゆきません。」

「国語常用を進める上で、困る点は何ですか。」

「それは□□国語がわからないものに、手まねで常用といふのも変だし、殊にその点では召使や老人の未解者に困ります。若いものには講習会の様なものは必要と思ひます。」

「奥様は如何ですか。」

「家内はかたことはしゃべれますから、曲りなりにも常用してゐます。」



その他解つてゐる家族の間では、皆常用してゐます。」

永年内地にゐた半島同胞家族の国語常用は、環境と自然の訓化によつて当然であつて、異とするにも足らぬが、ともすると因襲に絡み易い地方民の国語常用奨励には、たゆみなき指導の努力が要る。それには先覚者や指導的立場にある人の自発的協力が有力にものを云ふ。新名氏の場合も、其一つである。「生活は国語で」の貼紙は、此の一居酒屋の屋内に貼られたものであるが、其自発的指導精神は目に見えぬ糸となつて屋内から屋外へ引延ばされて広く民衆皇民化へ、国語常用運動の大道に結び付くであらう。記者は尊敬の眼で、改めて今一度その貼紙を見上げた。(写真は「国語生活」の貼紙と新名氏)

生活様式から変へてかゝつた医師／牧ノ島 富森氏

釜山牧島、南港両国民学校表彰の「国語の家」は百五十余戸の多数に上り、今や牧島一帯は我れも我れもと国語常用運動が最高潮に達してゐるが、中でも全家族国語を以て生活してゐる粒選りの「国語の家」□仙町一六一二番富森□夫氏（四〇）の一家を訪ふ。

[illegible]

四年前から国語常用を始めましたが、最初はどうしても癖になつて、鮮語が飛出し、□々うまく行かなかつたのです。これではいかぬと思ひ、生活様式から變へて行つたのです。先づ敬神の念を子供と供に養ふため、神棚を奉齋して毎朝礼拝し、神社参拝も以来ずつと続けてゐます。衣類等も

一度に変わる事は実際問題として難しく、将来徐々に内地化を計るやう努力してゐますが、それでも国語は日一日と常用が徹底して来ました。此の頃は患者にも常用を呼びかけるため、少くとも国語を解する方には絶対鮮語では応対しない事にしてゐます。一番困るのは使用人です。折角徹底したと思つたら出て行つたり、又新しい使用人が来て鮮語を使ひ出す始末で、これには全く閉口します。いや自分でも慌ててゐる時などは、思はず鮮語が飛出して使用人から反対にネヂ込まれる時もありますよ、呵々。(写真はその家庭＝鎮海湾要塞司令部検閲済)

「釜山日報」1942年5月10日付夕刊3面

#### 国語常用標語懸賞募集

本社は曩<sup>さき</sup>に社告の如く、当局と呼応して全鮮国語常用の一大運動を提唱し国語普及の喚起に努めつゝあるが、右運動に資する為、意義深き大詔奉戴日を機として、左の如き規定の下に国語常用標語の懸賞募集を行ふ事とし、広く一般の関心に訴へ、優秀なる標語を以つて全鮮国語一色運動促進の一端とする事とした。奮つて応募されん事を希望する。

- ▼標語 半島同胞の国語常用奨励に適切なるもの。
- ▼用紙 官製はがきに限り、一枚一標語を記入し、住所、姓名を明記する外、応募枚数に制限なし。
- ▼締切期日 昭和十七年五月二十七日の海軍記念日当日限り（午後十二時迄の消印あるもの）。
- ▼審査 本社編輯局にて行ふ。
- ▼発表 昭和十七年六月一日附釜山日報紙上
- ▼懸賞 一等貳拾円（一人） 二等拾円（二人） 三等五円（三人）
- ▼宛名 釜山日報社編輯局国語常用標語募集係

「釜山日報」1942年5月11日付朝刊4面

言葉と表現（上）

国語の第二維新に就て／青野季吉

大東亜共栄圏は文字通りに、日一日と形成されてゐる。この偉大なる「創造」につれて、いろいろな問題が徹底的な考究を迫られてゐる。日本の言葉の問題も、その一つである。これは我々文学者が解決すべき重要な問題である。

日本が大東亜共栄圏の盟主である以上、日本語はその広大な地域において共通語の性格を獲得せねばならぬ。これはわかり切つた話だ。とすれば日本の言葉、日本の表現方法がいまのまゝであつていい道理はない。

文学者は世に言葉の闘士といはれてゐる。じつさい言葉の発見、洗練、創造が文学者の大きな仕事の一つである。文学の偉大な天才といふものは、きつと彼自身の言葉を発見し、創造したものだといつても過言ではない。文学者であつて、彼自身の言葉を持たぬ様なものは二流三流の徒に過ぎない。日本の言葉が、ここで大東亜的性格を獲得するためには、いろいろの技術的な整理が他の方面から行はれるであらうが、その上に立つて真にそれを生かし、大東亜的性格の生きた表現を完成するものはその意味で、誰でもない文学者でなければならぬ。

最近、漢字制限について思ひ切つた決定があつた。僕は新聞の発表を見て、之だけに局限された漢字数で果して日本の言葉が自由に行はれ得るか、と、疑念を抱かないでもなかつたが、しかしそれは囚はれた感想で、新しい日本の言葉を発見し、創造するといふ立場から見ると、さうした疑念はたちまち消滅する。日本の言葉が大東亜語に生長するためには、第一に問題なのはいふまでもなく漢字で、それがあのやうに極度に制限されたことは、反つて新しい日本の言葉への進展に大きな拍車をかけたものといはねばならぬ。

国語の問題、漢字の問題は周知の如く、いまに始まつた問題ではない。しかし今日まで、実際には議論倒れに終つてゐて、<sup>マ</sup>しんの成果といふもの

が、殆ど現はれなかつた。<sup>すくな</sup>尠くとも文学の上などで、はつきりとさういへると思ふ。これは何故か。その最も大きな理由は、その整理や改革の必要は、知的に感じられても、その差し迫つた退引ならぬ必要といふものが、それ以上に力強く働きかけることが無かつたからに外ならない。

ところが、こんどは事情ががらりと變つてきた。日本の言葉、国語が大東亞的性格を獲得せねばならぬといふ必要に、眼前刻刻に迫つてゐる。それが成しとげられなければ、日本を盟主とする大文化圏の確立は完成しない。言葉の統一のないところに、文化の統一は考へられぬからである。事情がかうなれば、国語の問題は画期的に進展するにちがひない。こんどの漢字制限なども、従来の長い準備や審議の結果であらうが、<sup>あたら</sup>恰も日本の言葉の大東亞語への進展のために、あらたに企画されたやうな印象を得たのはそのためである。

国語の問題に於ける最も重要な方向は、文章語を口語に近づけ、乃は一一致させる事、いひかへると書く言葉と話す言葉との新しい結合である。これが一見容易に見えて、その実至難な問題である。こゝには勿論、容易に解決の出来得ぬ根本的の問題がないでもない。たとへば、その二つの言葉は本質的に果して一致され得るものかどうかの問題がある。これはいまだ<sup>かつ</sup>曾て解決されたことのない問題である。しかし、さういふ根本的な難問はともかくとして、その二つの言葉の近づきは、国語の問題が決定的に目ざす重要な方向でなければならぬ。そしてこれまで、国語が新しい生命を与へられて逞しく健やかに呼吸づくときは、いつもその二つの言葉の近づきに於てあたらしい成果を獲得した時だつたことが、改めて想起されるのである。(つゞく)

「釜山日報」1942年5月12日付夕刊2面

国語の家と人

鮮語は判らぬ／官吏生活の不便が動機／晋州 富士山隆盛氏

晋州に於ける国語常用の家として、晋州本町中樞院参議道會議員富士山

隆盛氏の家庭がある。それは二十年前からであつて、その動機を富士山氏に聴く一。

官舎へよく電話がかゝつて来たが、主に内地人である関係上、用語は国語であつた。当時は夫婦二人きりの生活時代で、勿論家内は国語を一つも解しない。私が居る時はよいが、不在の時は一番困る。又た、先方に甚だ相すまないと云つて、貧乏役人では国語の解る書生や内地人の女中を雇ふことも出来なかつた。そこで、之れは家内に国語を教へ込むことが最善の方法である事に感付き、爾来実行したところ、漸次家内も国語が解る様になり、その中次から次へと生れる子供達にも当初から国語を常用せしめたので、むしろ朝鮮語は一向解らぬ位になつた。尤も官舎地帯は大抵内地人の住居が多かつた関係もあるが、勿論子供も当時内地人尋常小学校へ通学させたので、自然一家揃つて国語を常用することになつた。

私は昭和十二年官を退き、当晋州へ帰る時は既に大田中学校に二人、尋常小学校に二人の子供が在学してゐたが、学費の関係上、晋州へ夫々転学させた。当時、晋州には高等普通学校があつたが、子供は朝鮮語学科は全然駄目だから、之れは内地人同様朝鮮語科目は負担させぬ様に学校当局に頼んだ。尋常小学校へ通つてゐた子供は、晋州へ転任後、試験的に当時の晋州第一普通学校に転学させて見たが、成績がさつぱり駄目。一年間に覚えたのが只朝鮮語の悪口位。それに子供が朝鮮語が解らぬと云ふので、子供達からいじめられて泣いて帰ることが□々あつたので、之れでは矢張り駄目だと、翌年晋州尋常小学校へ転学させ、現在は晋州中学の二年である。また、晋州国民学校に在学中の子供は現在五年で、その友達は全部内地人ばかりである。

わが家の国語常用経緯の實際を語つて、話を改め

真の日本精神を体得し、忠誠以て立派な皇国臣民となるには、半島二千四百万同胞が全部国語を全解する事にならなければならぬ。斯してこそ、始めて一人前の日本人としての道があるのではなからうか。去昭和十二年五月中枢に院（中樞院に）於る諮問事項として、「社会教化施設中、

朝鮮人の現状に鑑み、特に強調実施を要すると認むる事項、及一般民衆に徹底せしむる適切な有効なる方策如何」と云ふのがあつた。之に対して、私は答申案として国語常用運動の全面的実行方法を提出した事があるが、当時は支那事変前であつたが、既に支那事変から大東亜戦争となり、東亜共栄圏は漸次拡まりつゝあり、将来これが指導の立場に立つべき飛躍的時代となつた日本人として、国語が解せないと云ふことでは半島人自らの恥辱と云はねばならない。私をして云はしむるなら、全半島民衆への国語常用運動は寧ろ遅れた<sup>うら</sup>憾みこそあるが、総督閣下の全幅的強調に私は深甚なる敬意を表するものである。また之れに呼応して、今回大和塾晋州分会に於て国語講習会の開催を計画したのも喜ばしい事で、大に意を強ふするが、これには先づ第一期に於ては府内各町里愛国班長級の国語未解者を入会せしむる方針で進み、一日も早く全鮮一人残らず国語で話せる様になる事を希望する。(写真は富士山氏)

上手下手は抜き／会話は一切国語で／大邱 大峰丙朝氏

中枢参議大峰丙朝氏といへば、半島の先覚者として今更紹介する迄もない存在である。中枢院参議慶北道会副議長から大邱大倫中学校の経営者に到る迄、氏の公職や社会事業を通じての功績は枚挙に暇がないが、しかし何んといつても内鮮一体の指導的実践家として半島統治に身を挺して協力して来た事に指を屈すべきであらう。「国語常用、それは何より必要です。貴社の此度の国語一色運動には全く敬服した」と、先づ本社の国語一色運動に対して礼賛する。「いや、全くいい計画です」。血色のいい氏のにこやかに笑ふところが、まさに我意を得たりといふところ。

「お宅では国語を常用されてゐるそうですね。」

「それはあなた、国語常用のないところに皇民化はありませんからナ。」

「何時からですか。」

「何時からとハッキリしたことはおぼえてませんが、長男が通学し始めてからは長男に対する会話は一切国語といふことにしましたから、これがまあ、わしの国語常用の第一実践といふことになりますね。」

長男といへば暁星学校長廷植氏。今年とつて三十五歳とのことであるから、氏の所謂国語常用スタートはいまからザツ二十数年前といふ計算になる。

「御家族は何名ですか。」

「戸口調査見たいだね。さあ何人か、ちよつと数へないとわかりません。」と氏は真面目に指を折り始めた。十指を重てまだ余りがあるやうである。「いや、何も数の話をするわけではありませんが、国語の出来な（いー脱字）方が、やはり家族の中で何人かはおありでせうね。」

「それは居りますね。先づその筆頭がわしの家内です。それから召使と乳母。」

「やはり婦人の方に多いやうですね。」

「そうそう。」

氏の夫人はもう六十に近いとのことであるから、時代的に見て国語がわからないのは無理もない話であるが、それにしてもきいてわかる程度にはおぼえたらしいといふことである。

「国語常用を徹底せしめるために何にか御意見は。」

「あります。それは先づ何より上手とか下手だとかいふことを考へずに、どんどん使ふことですよ。わしにしたつて余り上手な方ぢやないが、この通りやつてやれんことはありませんからね。」

「しかし、あまり下手だと人から笑はれるからといつて、中に使はない人がおりますね。」

「そりやあ笑ふ方が馬鹿だが、それより笑はれると思ふ方もいかん。わしはこれで畏れ多い話だが、観菊の御会に夫婦共にお召しの光栄に浴した事があるが、その時は国語の出来ない家内に、出来る丈国語を教へた。」

事皇室のことにおよぶと、氏は襟を正して態度は俄に謹厳になる。

「ふだんは奥さんには国語で話さないのですか。」

「やさしいことなら思切<sup>ママ</sup>きつて話してゐるが、うまくいかなくなるとチ

ヤンボンになりますね。」

「学校の方はどんな具合にやつてゐますか。」

「あまり手前味噌になるが、私立であつても国語の徹底といふことだけでは公立の学校のどれにも負けない自信はありますね。」

「あなたの学校では国語外はドイツ語をやつてゐるそうですね。」

「そうです。同じ外国語なら敵性の英語より、味方のドイツ語の方が気持がいい。それに学術的にもドイツ語の方がいいですからね。」

氏は私財七十余萬円を投じて大倫中学校を経営してゐるが、これは鶴南学校の後身である。鶴南学校といへば開校当時から余り芳しくない伝統をもつてゐたが、氏がひきうけてからは財政は勿論、学校の校風も全く一変した。私立学校の弊害として、やゝともすると敬神觀念の欠如が挙げられて来たが、この点大倫学校は国語愛用と共に公立学校のどれにも負けないといふことは氏の所謂「手前味噌」でなく、最近もつぱらの評判である。

「では、本社一色運動に対して、何か御希望は。」

「いや全く賛成。これといつて希望があるわけではないが、一度やり出した上は半島のすみずみまで国語でぬりつぶされるまで、根気強くやつて下さい。」

「しつかり声援してください。」

「力のおよぶかぎりやりますよ。わしの家が国語常用をもつともつと徹底的にやるといふことも、声援といふことになりますからね。」

庭先は五月の若葉が陽に映えて、すがすがしい光にあふれてゐる。折柄、軒先の藤棚には藤の花が満開、古色蒼然とした朝鮮式の建築に色をそへてゐる。

「生活の内地化といふことは、お考へになつてゐませんか。」

「生活の同化がないところに常用はむつかしいですよ。あなた、この家に目がついたようだが、これは別だ。わしの次男の家は純然たる内地様式の建築です。この家は只先祖伝来のものでね。これからは皆内地式でいくことにしてゐる。」



話は尚続いたが、飽迄心強い国語常用の指導的なものに敬服して、記者は此の辺で暇を告げた。（写真は大峯氏）

「釜山日報」1942年5月12日付夕刊2面

国語会話テキスト

国語全解運動に即応して、京城中央放送局を初め五放送局では四月二十五日から第二放送に“国語会話の時間”を設け、毎火、木、土の三日午前九時半から十五分間、平易な日常国語の放送を行つてゐるが、これに要するテキストは現在なく、声のみでは徹底せぬ<sup>うら</sup>憾みがあるので、テキスト作製を目論んでゐる。このテキストは諺文対照の極く平易なものに、放送時間以外にも簡単にポケットから出して自修出来得るもので、期待されてゐる。

「釜山日報」1942年5月13日付夕刊2面

邑面洞里制廃止／市町村制抬頭／本府地方課で研究進む／国語常用にも一役

【京城支社電話】朝鮮徴兵制実施と共に、国語常用促進化については重ねて各道や総力聯盟に対し通達されたが、国語同様に全鮮各地方の府、邑、面及び洞里と言ふ字句も、之れを廃止して内地の如く市町村制に改正してはとの説が最近抬頭し、目下、総督府地方課で調査研究中である。特に、邑と言ふ文字は、従来は郡庁所在地のみに使用されてゐたものを、昨今ではその区分も区々となつて居り、地方行政上よりしても改正の必要あり。また市町村制の文字を使用するやうになれば、国語普及上にも多大の効果を現はすものとして、之れが実現促進化につき近く乗り出す計画であつて、その結果については各方面より期待されてゐる。

「釜山日報」1942年5月13日付夕刊2面

### 国語常用本格化へ／徴兵制で促進に拍車

【京城支社電話】半島二千四百萬民衆がひとしく待望してゐた徴兵制が愈々実施されることに決定し、皇国臣民としての三大義務の一つである徴兵義務を担ふことゝなつたわけであるが、この大任を完遂するには最早や文句は抜きにして、国語常用一色化を図ることが急務である。実施迄には二ヶ年の準備期間があるにしても、検査合格者が兵営生活に使用する言葉迄に上達することはなかなか困難なことである故、平素より全家族が熱心に国語の練習をして、之れを常用して置くことが最も大切なことであるに鑑み、総督府では徴兵制の実施を契機として徹底的国語の常用化を図るよう、各道や総力聯盟を通じ重ねて通達したが、従来国語をよく解してゐて使用しなかつた不心得者も、今度は直接自分或ひは関係者が困窮するので、漸次改正されて来るであらうと期待されてゐる

「釜山日報」1942年5月13日付夕刊2面

### 国語の家と人

朝鮮語は全然判らない一家／お嫁入は内地人へ／徹底した草梁の木村さん

草梁□鉄道官舎□車停留所から<sup>やや</sup>稍上ると、表具師木村□運堂の看板を掲げた木村武吉（五三）氏の一家（草梁町三六）。温突もない純内地式の家である。家族は主人木村武吉氏をはじめ、長女益子（三三）さん、長男唯雄君夫妻、次男□雄君、次女秀子さん（本年釜山高女卒）、三女修子さん（港高女二年生）、四女泰子さん（水晶国民学校在学）等八人である。仕事を終へ一服中の主人木村氏が現はれ、一問一答に入る。

記者 「常用の動機を一つ。」

答 「いや根から表具師で、商売柄相手が内地人ばかりですから、話すのは自然国語となります。それに駅近所□全部内地人ですから、子供までが国語常用に徹底してゆく事になります。結局、一言に云へば環境が自然常用させるのですが、勿論皇国臣民たる以上、国語を常用するのが当

然です。そう云ふ考へで、一層常用に努める。名前も創氏が出ぬ前から木村として通つて来ました。

記者 「国語常用は随分長くなるんですか。」

答 「えゝ、大正七年来ですから、今年で二十五年ですか。」

記者 「その間、苦心もありましたでせう。それを一つ。」

答 「結局、環境がそうでしたから、別にこれと云つた苦心ありませんでした。以前草梁市場附近に居た時は、近所の人達があれは親父が内地人で家内が朝鮮人であるから、子供等が鮮語を話せないんだ、など云はれた事もありました。」

記者 「何か面白い話を一つ。」

答 「そうですね。長女を普通学校へ入れやうとして連れて行つたのですが、肝腎の朝鮮語が話せず、とうとう<sup>は</sup>芻ねられて第三小学校へ入れました。長男は現在、鉄道改良事務所に出てゐますが、同僚から君は朝鮮人でありながら朝鮮語がはなせないのはどうしたのだ等とひやかされるので、朝鮮語も一つ勉強してやらうかと云つた事もあります。又、長女が第三小学を出たが、全然朝鮮語がわからず、これでは朝鮮人には嫁に行けないと思つて、当時港高女へ入れたのですが、次女が今年釜山高女を出ました。これがまた全く朝鮮語がわからなければ、裁縫も作法までも内地式ですから、どうしても内地人にお嫁入りさせねばならぬと思つてゐます。」

一問一答はこれで終つたが、これはまた徹底した国語常用の家である。

記者は心から敬服しながら辞した。（写真は朝鮮語解せない次女秀子さん）

お揃の内地生活／大邱の安藤さん夫婦

我々半島人同胞は何よりも先づ日本人としての国民的自覚を持つことである。それには皇国臣民としての深い自覚と生活の改善、即ち内地式生活から始まらねばならないのである、と語る。

安藤要作氏（旧姓崔）は大邱三中井支店通信販売部主任をしてゐる十年前、同店員となつて以来、国語を常用するばかりでなく生活に於ても内地

式を好んで採り入れて来たが、昨年十一月同店女店員であつた八重子さん（旧姓張）と結婚すると同時に、望み通りの内地式生活のスタートが切られたのである。そして今では、大邱市内七星町第三区八班に明るい頼母しい家庭を営み、八重子さんは隣近所の内地人主婦と肩を並べて買物にも出掛けると云つた、隣保相愛の麗しい精神を発揮してゐるのである。記者が訪問したときも、仲のよい安藤夫婦は和服姿で現はれ、次の如く語つた。

私達半島人は完全に皇国臣民たるべきである。皇民化する道こそ永遠に生きる途であつて、皇民としての喜びをどんなに喜こんでも喜び過ぎることはないと思つてをります。私共夫婦の念願は、たゞ皇国臣民として一死奉公の誠を尽すことのみであります。（写真は安藤氏夫婦）

「釜山日報」1942年5月14日付夕刊2面

## 国語の家と人

話題のお医者さん／言葉と、もに生活も改善、統営の長谷川滉氏

「あの先生は内地の方かね、それとも朝鮮の方かね。」

「それは勿論、内地人の方でせう。」

こんな話が出ると傍らのもう一人が、

「いや君、あの先生は朝鮮の方よ。何んでも御郷里が北鮮だそうなの。」と、如何にも物知り顔をして郷里のことまでつけ加へて、二人の対話に割込む。すると二人は、

「でも君、朝鮮の方だとすれば、訛が一つもないんじゃないか。」

と、抗弁しながらも感服する。統営の街を歩けば、必ず何処かでこんな対話を聞事く（聞く事－誤植）が出来る。風の如く捲き起された半島人の国語全解常用運動の折柄、話題の主人公を突き止めて見るべく、統営郵便局右側石段を上つて□泉堂医院を訪れた処、都合よくも俗にヒットラーの綽名を持つてゐる院長先生長谷川滉氏が外科患者に得意の手術をしたらしく、ゴムの前掛をとりながら応接間に現はれた。

「予ねて承つては居りましたが、先生の国語のお旨いことは街で大変な

人気ですね。御家族の方も皆、常用されますか。」

と、先づ賛辞を述べた処

「それは御冗談でせう。」

と、謙遜しながら流暢な国語で語る。

言葉のみでなく、生活様式までも一日も早く内地式にやらねばならないと思ひまして。看護婦や給仕まで合わせますと、五六人の従業員が居ります。勿論、皆国語を常用（しー脱字）で居りますが。子供は一人だけですが、今年四年生になつた□男も最初どうかとも案ぜられましたけれども、思ひ切つて内地人の国民学校に入れました処、今では朝鮮語よりも国語の方が上達してゐる關係上、家庭でも国語を常用して居ります。処が、こゝに難点の一つは家内が国語をあまり解せない關係上、皆んな国語で話しますと寂しがりますが、もう大分馴れましてね。「口真似」手真似で大概のことは通りますよ。

と、呵々大笑した上、国語全解、国語常用運動が皇民化する第一の道と云ふ事に就て、嚴肅に態度を改めて語る。

国語全解運動は一日も早く皇国臣民にすべてが成り切る為の全解運動であるから、言葉のみでなく衣食住すべての生活に於て、出来得る限り早く内地式に改善の必要はより重大性を帯びてゐるものと、断言を憚らない次第です。結論的に申せば、言葉並に生活様式の改善と相俟ち、精神的にも早く皇民化鍊成を計り、所謂心も身も打ち解けて、名実ともに立派な皇国臣民とならなければならぬと、私はこの際半島同胞皆様に呼びかけるのです。（写真は長谷川氏）

#### 調度迄も内地式／木浦 朝鮮語を知らぬ金城氏一家

木浦府、務安郡では本府及本社の提唱に応じて、近く夜間を利用して国語の講習会すら開催されんとしてゐるが、木浦は四十年の歴史を有する開港場で商人が多く、半島人側も内地人との取引關係で国語を解する人は多いが、真に内地式家庭生活を営み、一家族全部が国語常用に徹してゐる家は未だ少い様である。

結婚以来夫婦間の会話は素より、子供の教育にも国語を常用し、そのため子供は鮮語の方がむづかしがつてゐると云ふ常用の一家、木浦府□町一番地東拓官舎に居住する東拓木浦支店勤務の金城宏憲氏（旧名金鳳鶴）（四三）は、夫人久子さん（旧名李福蓮）との間に二男四女があるが、一家揃つて内地様式の生活を送り、会話は悉く国語を常用し、鮮語の方が反つて分らないと云ふ実践振りである。訪問した記者に、久子夫人は次の通り語る。

主人は出張中で留守ですけれど、此頃御社で国語常用運動を提唱され、毎日、新聞紙上で拝読してゐますが、誠に結構な事と思ひます。私共も家族八人で、長女は木浦高女を今春卒業しまして、現在師範学校演習科に在学し、次女は同女学校三年、長男は山手国民学校（内地人方面の学校）三年、次男は同じく栄山浦西国民学校一年にそれぞれ在学してをります。友達も皆内地人ですから鮮語は使つた事がなく、生れるとすぐ国語のみです。<sup>わらわ</sup>妾は十八年前結婚以来、国語のみで生活して来ました。住宅も料理も家具も朝鮮在来式のものは何一つありません。純内地人生活をしてゐます。子供達が上級学校の入学試験の折り、余り国語が正しいで、戸籍の間違ひか人違ひではないかと云はれた位です。国語常用の動機ですか？夫が会社員で内地式官舎に住み、内地人の方と交際があつたからにもよりますが、第一、皇国臣民としては国語でなければならぬと信じて居るのです。国語を常用する事によつて、本当の皇国臣民としての喜びが体得出来るぢやないでせうか…。

と、久子夫人は歯切れの良い国語で話し、ホホ……と明るく微笑んだ。主人の金城宏憲氏は全南莞島の生れ。高等師範を卒へ、更に日本大学を卒業し、帰鮮後、元山、間島等で中学校の教諭を勤め、其後東拓入りをした人であり、夫人久子さんは東京で女学校を卒へ、高等蚕糸専門学校を卒業後、咸南道、忠南道等に勤務し、蚕業指導に邁進した女性である。（写真は金城さんの一家、前列右より主人宏憲氏、次男宏明君（八歳）、三女恵子さん（六歳）、夫人久子さん、四女□子さん（四歳）、長男宏翰君（四歳）、

後列右より長女智子さん（十七才）、次女敦子さん（十六歳）

「釜山日報」1942年5月14日付朝刊2面

国語常用と徴兵制／婦人へ充分認識させる

【京城支社電話】国語常用普及運動は全鮮的に活発な展開を見つゝあるが、更に家庭の内房深く食ひ入つて、婦女子の国語常用に乗り出すべく、総力聯盟に夫人指導員を配置することになつたが、総督府で歴史的英断とも言ふべき徴兵制実施の趣旨も併せて婦女子に洩れなく認識せしむるやう、十二日の総督府定例局長会議の席上、南総督から指示があつた。

「釜山日報」1942年5月14日付朝刊2面

二商で熱弁／芥川本社々長が

朝鮮徴兵制実施決定の発表に、宿望の半島人召さるの感激いまださめたらぬ十三日、釜山第二商業学校では生徒の時局認識と皇民としての自覚を促進、涵養するため芥川本社々長を招き、午後一時より同校講堂に於いて全校生徒参加の上、講演会を開催した。先づ、石井校長の紹介の辞があつてのち、芥川社長登壇し開口一番

「内鮮一体」とは何んぞや。また「今次大東亜戦に於ける皇軍の世界圧倒的大勝利のよつて来たる基因は奈辺にありや。」

の質問を發すれば、夫々明解なる生徒の答へがあつた。次いで国語常用運動について話を進め、半島人の国語常用に関連して社長の数々の体験を述べて、国語的生活の如何に必須なるかを一々例挙して実証したが、生きた実例の示すもの、それは生徒の感動をいやが上に喚起し、つゞいてこれからの国語全解への努力は決して打算的、便誼的の目標のものでなく、真の皇国臣民として国語を話す光栄をほんとに感じ得るためのものなるを力説し、諸君の前途は洋々たるものである、今や内鮮一体の大道は坦々として興亜の黎明と共に諸君の前に展がつてゐる。諸君はよき皇国青年として、み民我れ生けるしるしありを真に感ずる人たらんことを切望すると、力強

く堂々時余の弁を結んだが、五百の若人は、日本青人としての感銘を一段と新たにした。

「釜山日報」1942年5月15日付朝刊2面

国語常用運動座談会

普及は拙速でよい／只時代の要求に添はせたい

▼所…京城ホテル

▼時…五月二日午後三時

出席者（順不同）

△川岸聯盟総長 △鈴木司政局長 △倉茂軍報道部長 △烏川聯盟総務部長 △甘庶放送協会長 △島田学務局編輯課長 △長崎京城保護觀察所長 △倉島情報課長 △御手洗京日社長 △夏山茂氏 △津田節子女史（緑旗聯盟）

▼本社側 △芥川社長 △原田支社長 △外支社員

原田 只今から国語普及座談会を開催致したいと存じます。御多忙のところ、皆様方御集まり下さいまして、深く感謝致す次第で御座います。今回の国語常用運動に関しましては、釜山日報自体がやつている訳ではありませんが、本府の御方針に即応いたしまして、釜山日報の紙上を通じ与論の代表として進めて行きたいと考へて居る次第であります。この本社の計画に皆様方のご協力をお願い致したいと思ひますので、どうか時間の許す限り、御意見なり御体験なり御方針なりをお示し下されば、これに越したことはないと存じます。甚だ粗辞で御ざいますが、一言申し上げご挨拶に代へたいと存じます。

芥川 只今、支社長から申し上げました様に、先般総督府からお示しがありました様に、国語を半島全体に普及且常用させるといふことは、<sup>まこと</sup>洵に力強い時局に□はしいことであります。本社と致しましても、内地に一番近い玄関口に居ります関係上、そういふ方面に非常に関心を持つて居り



まして、特に私共の仕事の上から言つても、其必要を痛感致してをる次第であります。甚だ微力ながら、総督府の御方針に應じて、新聞その他によりこれを具現したいと考へてゐます。本日は御当局並に聯盟、軍その他各方面の権威ある方々のお話をお伺ひ致し、且つ又指導をお願いしたいと思つてをります。今日はわざわざお出下さいました事を、厚く御礼申し上げます。甚だ勝手に御座いますが、進行係を私にやらせて頂きます。宜しくお願ひ致します。お話の順序と致しまして、私共聞いて居りますところによりますと、各方面で今迄も国語の普及といふことは□められてゐたのでありまして、先般総督府のお話では、国語の解るのは全鮮の約十五%だといふことでありました。従来、国語常用運動に就いて、どういふやり方をしてをつたかといふことを、この際検討して見るといふことが必要ではないかと考へます。それから、今後どういふ方針を取つたらよいか、又常用されるにはどうしたらよいかといふ点について、お話を伺ひたいと思ひます。先づ聯盟の烏川さんに御願ひ致します。

烏川 これには色々な原因があると思ひますが、従来も勿論やつて来たのでありますが、今日は急にその必要が生じて来たのでありまして、従来も国語の先生も一生懸命にやつてをつたが、それは非常に正しい国語を教へて行かうといふ指導者の気持があつて、之が又相当影響してゐると思ひます。正しい国語を普及して行きたい、早く覚えさせるといふ事より、正しい物を教へるといふところに重点を置いておつたといふ事を感じます。私からいふと、今日では速成でも何でもよいから早く覚えさせると共に、一方に於ては国語常用の普及を図るといふ事にしたいと思ひます。殊に、今日の結果から言ふと、少し位は間違つてをつても何でもよいから、早く普及させる拙速で普及するといふことが必要であります。又、一面は官の方の努力も足らなかつたかと思ひます。

夏山 今、烏川さんの言はれたやうに、正しい国語を普及しやうといふ考へは、従来総督府の方針であつたと私も考へてゐます。一面之は正しい国語を普及して、国民精神を涵養しやうと努力した事も事実でありま

すが、之も努力が足りなかつた。それといふのは、教育を通じて国語の普及を図る以外、一般の人に対する□□がなかつたので、勿論、地方に於ても警察官とか面長で国語の出来るものは講習会を開いたりした例は少なくありませんが、兎に角機関がなく、且全鮮的に国語普及運動といふものを起しておらなかつたものであります。これが今日の結果を來たしたものではないかと思ひます。従来でも総督府の方針としてやらない訳ではないが、この努力の点に於て足らなかつた。そう言つた事があると思ひます。もう一つは、国民学校以上を卒業した者が国語を使はない。之は家の人達が国語を使はない。詰り、親達は知らないののでつい朝鮮語で喋つて仕舞ふ。又、色々の□□から言つて国語を使ふ事を遠慮する。そういふやうな事で、折角国語を習つた者も年を取れば自然忘れて仕舞ふといふ傾向があります。国民学校を卒業した者を集めて調べて見ると、年を取つた者程出来ない。少しは達者なものもあるが、自分の家で商売してゐるものとか、自分の家で遊んでゐる者は国語を忘れ勝になつてゐるやうであります。国語を通じて民衆に日本精神を早く把握せしめるといふ方針は結構であるが、これに対する施設が多くの場合伴つてゐなかつたといふことが、大きな原因になつて居りはしないかと考へます。

甘蔗 十五%の者が国語を解するといふ。そこで、この国語を解する人々に国語を使はせるやうにしなければなりません。これが刻下の問題であると思ひます。甚だしいのは、東京、京都、大阪に行つて留学したものが国語を使はず、朝鮮語で話してゐる。そういふことではいけない。約四百萬人の人々が電車や汽車の中でも朝鮮語でやつてゐる。これは非常に目について仕方ありませんが、相手が国語がわからないといふ事もありませう。けれども、十五%の者が全部国語を使ふやうにしなければなりませんから、この辺からやる必要があるのではないかと思ひます。これには本当に国語を使ふといふ皇国臣民であるといふところの□□がないためであると思ひますので、我等は皇国臣民である、国語を使はなければならんといふ風に仕向けて行く事が、今日の情勢から云つて最も必

要ではないかと思ひます。

夏山 家族達が国語を知らないのですから、家では国語を使はない習慣が出来てしまつてゐるのです。先づ、そういふ方面から改める事が必要ではないか。最近電車の中であつた事です、二、三人の若い者が乗つてをつた。それが東京に行つて来たのですが、朝鮮語で話をしてゐる。あゝいふのから矯正して行かなければならんと思ひます。（続く）

「釜山日報」1942年5月17日付朝刊2面

### 国語常用運動座談会（三）

常用の環境をつくり赤ん坊も国語であやせ

御手洗（つゞき） 又、国語を使はなければ社会生活は困難だといふやうな状態を作ることが必要でもあるし、又これは出来ると思ふ。色々な施設、方法によつて、それは出来ると思ふ。それからもう一つの根本的な問題は、婦人の国語だと思ひます。私は前から考へてゐました家庭における母の言葉といふことですが、これはとても十年や二十年は勿論のこと、一代や二代ではどうすることも出来ないが、朝鮮における国語問題の最大源泉は母の言葉にあると思ふのです。それは、お母さんが国語を使はない。子供を生む。赤ん坊を抱いて国語であやす。朝鮮語であやさない。そういふお母さんは、現在容易にありません。女の事でよく解りませんが、然し想像して見るのに、そうだと思ふ。ですから、其母が赤ん坊をあやすのに国語であやすやうにしなければ、容易に環境を□化するといふ事は困難だと思ひます。ですからして、色々さつきからお話が出たが、差し当たり具体的方法は色々ありませうが、この国語を常用するやうな環境を作るといふことが根本問題ではないか。これに全□帰すると、私はそう思ふ。ですからして、その点婦人の啓発運動、それから婦人の国語運動といふものが、朝鮮の国語問題を解決する最良の根□だと、私はそう思ふ。それが出来れば、半島に大した問題はないと思ふ。もう一つの心理的問題ですが、これは今日の国家内外の色々な問題で、

皇国臣民化といふ大きな目標が出来てゐる。この目標に乗じて総ての人が心理的難問題を解決して行く。此勢に乗じて行く。之は是非やらなければなりません。この二点にあると思ひます。これは私、新聞の立場から言つて、私が京城に着任して以来、監督当局に対して話をしてゐることで、極く平易な国語を以て拵<sup>こしら</sup>へる新聞を一つ作らうではないかと言つてゐるのですが、未だに出来ない。第一は用紙が問題ですが、これは自分の職務上から見た考へで、朝鮮で此の新聞に携つて以来考へてゐることである。小学生新聞といふものを四年程前に作つたが、非常な好成績を挙げてゐる。あれをもう一寸<sup>ちよつと</sup>低い程度にする。小学生は現に国語を習つてゐるから、相当国語は達者である。国民学校を卒業した大人は大半忘れてゐるが、学校に行つてゐる者は小学新聞等でよく知つてゐますが、大人はよくわかつてをらん。それで国語を知らうとしても、あの教科書のハタ、タコでは大人はやりません。そこで毎日のニュースを極く簡単な国語を使つて、そうして分量は少くし、字を大きくする総振り仮名付にする。分量を多くすると、却々之は読み難い。骨が折れる。読ませることが肝要なのですから、精々字数も四五百字まで。新聞の大きさはタブロイド型で、四頁乃至二頁でよい。四号活字でルビ付程度の新聞にして、ニュース及び指導方針を盛り込んだものを作る。之ならば小学校を卒業してゐなくとも、読むのに骨が折れない。それならば国語の普及と、それから稽古が出来るといふことに非常に効果があると私は数年前から考へてゐるが、却々この第一用紙の問題、其他色々な他の関係で未だに実現出来ないが、私も此の先何年京城に居るか知らんが、なるべく一つ在任中にこれを実現した（いゝ脱字）と考へてゐます。

芥川 支那でもシヨバーがあります。これは一般に読まれてゐまして、四頁位で漫画が入つてゐます。

鈴木 お母さんに国語を使はせるといふことが先づ第一だといふお話には私は全然御同感で、今度の婦人啓蒙運動の具体的な対策といふのは未だ完成したものではないが、一兩日前に相談したが、その中には国語を婦

人に教へやうといふのを最も大きな要綱の一つとして取り上げました。  
然し、これも実行するのに大体六ヶ敷<sup>むずか</sup>しい問題で、趣旨としてはどうし  
てもそこに行かなければなりません。

津川 御手洗さんのおつしゃる通りで、赤ちゃんをあやす時には朝鮮語でやるでせうが、然しそれももう一歩進んだら大丈夫だと思ひます。今の青年方ですが、私が今でも覚へてゐるのは、その方の奥さんが一人でお守も置かずに赤ちゃんの世話をしてゐるので、貴女はあんまり無理をなさるなど言つたら、甘やかしては困る、僕達は朝鮮語と国語の二重で懲り懲りした。女中は置かない。だからこの赤ん坊は自分でやると言つてあやすのも国語であるし、おしめの取換へまで日本流にやつてゐます。又、斯<sup>こ</sup>ういう方もゐます。其方のおつしゃるには、自分が国語を使ふのは何もほかに理由はない。天皇陛下が国語をお使ひ遊ばされる。自分も国語を使ふのだと言はれたが、成程そうだと思ひまして、非常に感じました。先程のお話のやうに、心理的、精神的問題は国語を使はなくてはならぬ環境をつくることが必要で、そういふことにならなくては駄目だと思ひます。家に居ります女中ですけれども、すつかり国語でやるやうになりました。周りが皆国語ですから、田舎に帰りますと国語が使へませんので嫌だと云つて、直ぐ帰つて来るやうになつてゐます。そういふ風になりますれば、今おつしゃつた母親の言葉といふものは非常によくなると思ひます。徳和国民学校では妹と□達で罰金制度を作つて、国語を使は<sup>ママ</sup>づに朝鮮語で言つたら一銭出すことにしたと言つてゐました。又、お母さん達が国語を知らないので、自分が弟と国語で話すとお母さんから悪口でも言つてゐるのかと言われますので、なるべく家では使ひませんと書（いー脱字）た子供もありました。そんな風で、却々六ヶ敷<sup>かえすがえす</sup>しいのです。それですから、婦人が国語を判るやうにする事が大切でありますし、又、小学校の児童なんかに、もつと徹底させる。先生自身も信念を以てやられたら、きつとよくなると思ひます。

「釜山日報」1942年5月17日付夕刊2面

茶室もある内地式／国語運動を喜ぶ麗人／大邱の錦山柱子さん

本誌が提唱する国語常用運動に対し、誰よりも一番喜んでゐる一職業女性がある。ヒロインは慶北道庁土木課に勤務中の錦山柱子（二〇）さんと云ふ半島女性で、彼女は昭和十四年三月同課のタイピストに雇はれて以来、内地人とちつとも変りのない国語を常用、更に自宅では父親錦山千守氏と母親と共に純内地式の生活を営んでゐる。彼女は十三年頃東京に居住してゐる叔父さんのところで約一年間余も住んでゐたことがあり、帰鮮して直ちに生活状態を変へたことから内地人式のスタートが切られた。そして今では大邱市内の安久先生の処で生花、更に織田先生の処で周山道の書道を習つてゐる位である。記者は達城町一九七番地の彼女の宅を訪へば、親子三人暮らしの明るい家に和服姿が見えた。そして、半島人部落であるこの町にこの美しい内地人式家庭があつたことに、驚かずにはゐられなかつた。以下は柱子さんの一問一答である。

問「朝鮮服を着ることがありますか。」

答「国民学校を卒業した時分に着たことがありますが、その後五、六年は一度も着たことはありません。」

問「お宅にはお茶の間もありますね。」

答「はい、お父さんと私がお茶が好きなんですから、役所から帰つては必ず親子呑んでをります。」

問「朝鮮語は全然使ひませんか。」

答「父母は朝鮮語を大体知つてはをりますが、私は知らない朝鮮語が多いのです。そして、私は朝鮮語を使ふ機会がありません。」

問「お友達はどんな方ですか。」

答「いつも一緒の処で働く友達しかをりません。そのお友達はみんな内地人ですから、自然に朝鮮語は忘れてしまつたのです。」

問「失礼ですが、お嫁にはとんな処へ。」

答「まあ……いやですよ。まだそこまでには考へる暇がありませんのよ。」

でも、私一家のやうな内地人式に生活してゐる処へ行きたいと思ふわ。」  
問「お友達の方から聞きましたが、あなたは国語常用運動を非常に喜んでゐるようですが。」

答「早く私一家のやうに内地人式に改善され、また六ヶ敷い朝鮮語をなくすると思つたから、感謝してゐるのです。」（写真は職場の柱子さん）

「釜山日報」1942年5月17日付夕刊2面

内地人と間違ふ／動作も言葉も変らぬ／金澤秀憲氏

国語常用は大いに叫ばれてしかるべきものですが、私個人からいへば寧ろ遅すぎる感がします。

これは大邱保護観察所金澤秀憲氏の常用運動に関する感想である。金澤氏は記者が前から懇意にしてゐる人であるが、当人からこんな感想をきかされるまで、自分の周囲にこれ程徹底した常用家が居るといふことに、全然気がつかなくなつたのである。迂闊といへば迂闊なことであるが、しかし、日常接する人でこんな徹底した常用家が近くにあつた事に気がつかない程、自分も常用の習慣がついてゐるやうに考へられて、自分ながら力強くも感ぜられる。

「あ、そうそう、あなたは本当に徹底した常用家でしたね。」

「いやそういつてもらつては困りますが、此頃は物好きに朝鮮語でふざけて見ても、舌の具合がどうもしつくり来ないですね。」

金澤氏を立志伝中の人物にする為めには未だ早いかも知らないが、観察所員たる氏は元々道庁の給仕から出発したことから考へると、その前途たるや洋々たるものがある。氏の国語常用も、こんな幼い時から役所勤めをしたことから自然に常用する機会が多かつたことでもあり、家庭では父親が同じく役所に奉職して居た関係で、思ひきり父子の対話も国語で話せたところにあるといふ話である。それで主人や子供が国語ばかり話すから、母親も片言ながらおぼえて、必要に応じて間に合わせるといつた訳で、母親もこの頃では一人前の会話が出来るといふことである。

話がこゝまで来ると、国語常用上最大の癌といはれる家庭とか主婦とかいふ存在も、主人や子供さんの腹一つでどうにでもなるのではないかと思はれる。

「そういへばあなたは、此前うちの家内から、内地人に間違はれましたね。」

「いや、お宅の奥様ばかりぢやないですよ。よく間違はれます。」

「話になまりがとれてゐる関係もありますが、うちの家内はあなたの動作や素振が、すつかり内地人とあまりちがいはなかつたといふ話でしたよ。」

「そうですか。」

金澤氏の話によると、別段に気をつけてまで内地적作法の必要がない時でも、言葉の調子と感じで身□みが自然につけられたものではないかといふことであるが、こゝまで来ると言葉の力といふのは実に偉大なものである。国語がわからずに眞の皇国臣民にはなり得ないといふことには、金澤氏の如きがつともよい例ではないか。

「相手から朝鮮語で話される場合には、どうしますか。」

「最初は意識的に内地語で答へてやらうといふ意志の力が必要でしたが、この頃はそんなものがなくなつて、ごく自然な態度で国語で答へ得るのですよ。それに舌の具合までおかしくなつて来ますから、尚さらです。」

保護観察所といへば、思想轉向者の司法保護機関である。過去に偏見に囚はれてゐた人々を相手とする仕事であるだけ、氏自身が彼等の更生々活を指導する地位にあるわけではないか。やはり皇国臣民として手をたづさへてゆくべき境遇に置かれてゐるので、氏は国語常用から今は一歩進んで、あらゆる方法によつて日本精神の眞実な体得の爲めに努力してゐるといふことである。全く頼母しい限りである。(写真は金澤秀憲氏)



「釜山日報」1942年5月18日付朝刊4面

国語生活化／「偶感」／家庭的に観て／三千浦 雲 清

□に曙光は到来した

今や全鮮を挙げて国語一色運動が全面的に展開され、あらゆる分野を動員して□□の努力が払はれ、着々として進むその実績が期待せらるゝに至つた。

帝国の一環であり、東亜共栄圏の中核体を為す半島としての重要性に則り、東亜諸民族の指導者としての職務を履行しつゝある事を端的に示唆するものと云へる。

この国語一色運動、就中国語生活化は朝鮮統治の根本主義なる内鮮一体の具現と相俟つて、極めて重大な課題である事は今更記す迄もない。

内鮮一体は内鮮人の共通なる言語に依つて、思想、感情とが相通じ、相触れ合ひ、相溶け込んでこそ一体化が可能となるからである。

われわれは皇国臣民は先づ国語生活化から、といふ信念がわれわれの血管に流れ、深く心奥に根を下ろさねばならないのである。

それは朝鮮の皇国臣民教育が、即ちこれを表示してゐる。

先づ、国語を忘れた皇国臣民は無く、国語常用に依つてこそあらゆる□□の根底を為すものと云ふ建□から、あらゆる□□の□を講じ、すべての困難を克服しつゝ、国語奨励時代から全校国語常用時代を経て、今や全校国語醇化時代に進展し、之を家庭に迄延長し呼びかけつゝある現状であるが、逆に家庭から之を観た場合、今迄は全体的に云つて殆ど無関心であり、余りにも微温的であつたと云へやう。

課題が固苦るしい教育問題に極限される傾きがあるが、教育は独り学校のみが専門的に固有すべきものではないと私は思ふ。

教師、児童、父兄が一丸となり、三位一体となつて始めて、全き教育が成就するものと信ずる。

国語問題、又然りである。家庭に於ては国語生活化の雰囲気を醸成し、子供をその雰囲気の中に親しめる事が肝要であると思ふ。

折角学校で熟して来た子供を家庭に於いて冷たくさせ、学校の意図を台無しにして仕舞ふてはいけない。学庭でも熟し、洗練させなければならぬ。国民学校の言葉を貸りて云ふならば、鍊成し国語教育の全きを助け完全無欠な皇国臣民を育て上げねばならぬ。これは甚だ大きい問題であるが、子供と共に学び、共に励んで行く態度が必要であると思ふ。日常生活の簡易な会話に、朝から「お早うござゐます」、晩なら「今晚は」と云つた様なものは必ず国語で励行して欲しいと思ふ。吾々生活の周囲を取まいてゐるいろいろな物品には、それぞれ紙片等に記入して、それ等にはり付けて置けばどうかと思ふ。壁には「カベ」、戸のところは「ト」とか「タンス」、「モノイレ」等々、又、各戸には国語常用に適當なる、文句スローガンを掲示して置き度い。出来得る限り眼、耳、口等のすべての感官に訴へることこそ、国語上達を助ける上に有力なものはない。これが活きた教へ方である。

唯だ、これ等が一時的であり、飾りの且不真目であつては、何日迄立つても国語常用は期せらない。

要するに、国語に対する熱と愛とを根本的に把握認識し、どこ迄も追求奨励するといふ精神と態度が望しいものである。

今や国運を賭しての大戦争の真最中、われわれは純粋な国語に依つて、ますます国語を強固にすべきである。

国語は国民の魂の宿る所であると云はれ、国家と国民とは離すことの出来ぬ不離一体のものであると云ふ。郷里から出たてに、地方語を笑はれる人もあらう。考へれば、笑ふのも無理はないけれど、無遠慮に笑はれることが癢に障る。

国語は歴史的には其の国の特徴を表し、その国民性を發揮するものである。

単調に聞える毎朝「お早うございます」と云ふあいさつの中に、どれだけ国民的な思想なり感情なりが含蓄されてゐるかが。

その「お早うございます」の裏に日本的な麗しい感情と感が交流し、二人の心を結び付けるのである。われわれは国語に依つて、やがては国体の

精華を維持し、熱烈な祖国愛の涵養に努めようではないか。

もつともつと国語を学ぼう。

国語に対して真剣にならう。

すべての会話がなつかしき我が国語に依つて為され、明朗な内鮮一体の実が具現され、大東亜共栄圏の指導者として雄々しい半島の躍進振りの日を筆者は遠からずして到来するものと信じつゝ、擱筆する。

「釜山日報」1942年5月19日付夕刊3面

#### 固城郡の国語運動／総力運動の全機能傾注

全半島に澎湃として捲き起された国語全解常用運動に呼応して、固城郡では本年度に於ける総力運動の全機能をこれに傾注し、力強く展示せしめることになり、早くも各邑面の青年隊を中心に講習会を開き着々と成果を挙げつゝあるが、更に郡総力係には専任国語指導員女子2人を採用して各部落に婦人講習会を開き、国語の解せない婦女子は義務的に受講せしめることに方針を決定、準備を進めてゐる。

同婦女国語講習会では国語の外に、待望の徴兵制実施に当り立派な軍国の母としての教養をも合せて積せる事となり、郡聯盟関係者が輪番的に巡回し講話することになつてゐる。□にまた、全郡内各学校児童を通し一日一語主義で夫々の家庭に教え込む方策も考慮中であるが、去る十三日は郡会議室に郡聯盟理事の参席を求め、金澤郡守統裁下に国語常用の徹底化策並に収穫期に於ける米穀保管の適□策等につき真剣なる協議を遂げ、向後郡当局がとるべき確乎たる方針に□□する処があつた。

「釜山日報」1942年5月19日付夕刊3面

#### 常用に範を示す／方魚津金組

本社の国語常用運動に刺戟され、方魚津金融組合に於ては理事井本享一氏の提案にて、職員一同執務中に相互間に於て鮮語を用ひたる場合は、其の一言毎に金三銭の違約金を徴収の上、国防献金を為すべく実行中。

「釜山日報」1942年5月20日付朝刊2面

儒道鍊成会／慶南道各地の日割り

慶南儒道連合会では儒道の振興を図ると、もに、時局が要請する真の皇道儒林鍊成に努めてゐるが、いよいよ二十日より来月五日まで道内各地において□□府郡儒道会共同主催の下に、講演会、時局座談会、映写会を開催し、朝鮮儒道連合会派遣の講師により指導を求めることになった。特に、徴兵制度実施が発表されたので、講演会、座談会に於ては徴兵制主旨徹底と国語全解について、各講師の強調を求めることになった。

△開催地 東萊二十日、釜山二十一日、金海二十三日、密陽二十四日、馬山二十六日（講師＝梧村□雨、金誠鎭、孫永敦）

△開催地 昌寧二十七日、固城二十九日、晋州三十日、河東三十一日、咸陽四日、居昌五日（講師＝春山明世、金誠鎭、孫永敦）

「釜山日報」1942年5月20日付朝刊2面

国語常用運動座談会（五）

普及上の癌は家庭／多くなつた婦人の国語熱

芥川 大変具体的なお話で参考になりました。大和塾の方では何かー。

長崎 私は昭和十三年まで地方法院検事局におつた。その時、この内鮮一体といふことを南総督が八紘一字の大精神の下に示された当時、朝鮮には色々の思想がありまして、これを無くするにはどうしたらよいか、本当の皇国臣民となるにはどうしたらよいか、それは朝鮮語といふものを使はせずに、国語を使はせるやうにすればよいのではないか。大いに国語を普及しなければならんと考へてゐました。昭和十二年の二月、白々教といふものが検挙された。殺されたものが多数あります。この殺したものの殺されたものも、殆ど全部と言つてよい程、国語を解するものはありません。それで、どうして殺したかと言うに、白々教を信じたものは永久に死なん。馬鹿々々しいものです。これを信仰するためには、自分の持つてゐる一切の財産を白々教に上げろと捲上げたものが約十萬円

あります。所が、それが発覚しさうになつたので相手を全部殺して仕舞つたのですが、之等も国語を知つてをつて、世の中のことをわかつてをつたならば、そんな馬鹿々々しいものを信ずる者はないと思ひます。私はその後、国民教育の普及といふことを考へて、新義州保護観察所長になつて新義州に行きまして、思想関係者の教育に当りました。それには先づ国語を教えなくてはといふのです。ところが、之に通訳つきでは困りますので、国語を知つてゐる転向者を連れて来てやらせたところ、其の男は自分の家の子供を連れて来て、子供と共にやつて来て始めた。初めは十名位でしたが、一ヶ月もすると二百名になつてしまひました。斯様な具合で、朝鮮の人は兎に角国語を習ひたがつてゐることは確かであります。その後、各地で講習会を開きましたが、女が非常に多いのが目に立ちました。それで我々は、第一に思想転向者の子供とか労働者を集めて国語を教へたのであります。所が、困つたのは会場です。国民学校自体が校舎を貸さない。又、道庁の方では講習会をやるなら届けろと言ふので届けたが、手続きがとても煩雑で、之ではいかんと思ひました。又、国語普及のことで役所にいつたところが、其裁判所の通訳は国語を使はずに朝鮮語でやつてゐるので、私は検事正に国語を使はぬ奴は首を<sup>き</sup>馘つたらどうです、と言つたこともありました。私が観察所に居りました時は全部に国語を使へ、使はん者は首を<sup>き</sup>馘るからさう思へ、と申した。又、部屋の入口には、部屋に入つたら国語を使へ、但し国語を知らん者は此の限りにあらずと貼り出した。先頃、私の方に川岸閣下、加藤軍参謀長が御出になつて、「正しいと思つたら強制して構はん」とおつしやつた。成程、正しかつたら強制することは構はんのだといふので、どんどんやりましたが、この国語を言ふことによつて子供は固より教へる先生まで本当に転向した<sup>ばか</sup>許りか、その外にも国語を習ふことによつて転向した者が非常に多いのでありまして、このことは法務局長にもお話したことがあります。毎日、先生も生徒も皇国臣民の誓詞、君が代をやる、そうして双方共一生懸命にやつてゐるので悪い思想を忘れて仕舞ふのでありま

して、一種の思想指導だと思つてゐます。大和塾は斯<sup>かよう</sup>様な見地から内鮮一体国語普及に最も力を入れてゐる訳でありまして、大和塾では五千人余りの生徒をあづかつて居ます。その内、京城は二千人あります。私は生徒には国語を使へ、使はん者は早速□する、知らないものは一日無言で居つてくれと言つてゐます。この国語普及の一番の癌は家庭であります。家庭教育をどうしたらよいかといふ問題です。家族に使はせる方法、これは強制力を持たんから困るのです。併しながら、その反面に於て京城大和塾二千名の国語講習生がありますが、その中千八百名が女です。女が非常に国語を習ひたがつてゐます。でありますから、此の機運に乗じて行政的に全解運動をやつたらよいのではないかと思ふ。全解運動には国民学校の教室を□放してやることである。又、国民学校が駄目なら教会を借りてやる。又は私立学校□□を金を出して借りてやるといふ風にする。□（専？）門学校に入学する時、国語を使はない者は落す。国語を使はないやうな者は思想が悪いのですから落す。役所なんかでも国語を使はぬ奴は餓<sup>くび</sup>にして仕舞ふ。朝鮮の人口は二千四百萬、内地には百四十萬しか居らんから、どうしても内地では必要であります、朝鮮では左程必要でない。でありますから、国から法律を公布して国語を使へといふことは無理でもあるし考へものですから、これは行政的にやるより外にないと思ひます。

芥川 最近婦人のほうが国語の講習を受けたいといふ希望が相当あります。

津田 どういふ訳でせう。

長崎 婦人団体の力ではないでせうか。

夏山 この頃の子供はラジオでも一部を聞きたがります。その方がよくわかるからで、然し大人は二部へ廻す。そこでラジオの争事が起ります。

長崎 先頃□□から五十になる爺さんが来て国語を習ひたいといふので、どういふ為かと聞いたところ、自分は内地人に鉾山のことで騙されてしまった。五千円許り損をした。之は国語を知らない為に騙されたのだから

ら、国語を是非習ひたいと思ふといふのでした。

倉島 忠南の松村知事が総督府で話して居たことですが、忠南から南洋にわたつて働いてゐるものが大分あります。その南洋の原住民は国語で話をする。こつちが喋れなかつた。日本人として非常に恥かしい思ひをして帰つて来た。今度は是非国語を習ふはと思ふといふ事を言つて居つたといふことでしたが、私も北京に約1年許りゐましたが、朝鮮語を聞いたことがない。北京には二萬、北支一帯では十萬人位朝鮮人がゐますが、朝鮮語は使はれてゐません。何処にいつでも国語でやつてゐるので、朝鮮人か内地人かわかりません。あゝ、ゆうやうに、今後は大東亜共栄圏全部にも及ぼしたいと思ひます。矢張り大きな共栄圏といふ考へにだんだん半島人もなつて来ると、共栄圏の中の日本人だといふことを自覺して来る。その考へを半島側に押し附けるといふ話には行かんでせうが、大きな共栄圏といふ考へがだんだん浸み込んで来るに従つて、日本人として国語を勉強するといふ氣になつて来ると思ひます。

「釜山日報」1942年5月20日付夕刊2面

国語話せぬ壮丁は恥／徴兵制実現の榮譽を語る／高橋参謀長

朝鮮軍参謀長高橋坦少将は十九日朝、釜山通過特急「あかつき」で京城に向つたが、左の如く語る。

用務連絡のため東上したが、特に朝鮮の徴兵制度実施について各方面の反響は聞かなかつたが、一、二の人の意見は頗る好かつた。反響はむしろ朝鮮に大なるものがあると云へよう。此徴兵制度は□□（特別？）志願兵制度の実施成績が極めて良好なる為に、更に一步前進して徴兵制実施となつたもので、決して突然のことではない。壮丁にして国語を解しないものがあるやうでは申訳がない。単に義務教育などの実施を要望したり、国民学校拡充を希望するのみでなく、進んで国語全解に努力せねばならぬ。今更国語が解らないなどは恥である。ものゝ一年も一生懸命勉強すれば、習得出来る。やらないのが根本的にいけないのだ。軍としては徴兵制実施の

諸準備として、先づ青訓、学校教練、国語普及の三大眼目に向つて実現をはかる。青訓、学校教練は現在としても既に拡充を図り、指導官の充員を図つてゐる。指導官にはその人を得ることが大切であるから、在郷軍人や特別志願兵などを大いに活用する必要がある。そして、徴兵制度実施の榮譽を共に願ちたいと思ふ。この際、半島人は真に君国に報ずる機会を与へられたのだから、この榮譽に感激しつゝ、重任を果たして貰ひたい。(写真はあかつき展望室の高橋少将＝鎮海湾要塞司令部検閲済)

「釜山日報」1942年5月20日付夕刊2面

国語常用標語／応募既に二萬通に上る

本社が全鮮国語一色運動を提唱して以来、半島の津々浦々から国語常用と国語全解の氣運が澎湃として起りつゝある事は、周知の事実である。しかるに本社では更にこの趣旨を一段と徹底せしめる為、一般から国語常用の標語を募集してゐるが、一度之が発表されるや連日応募標語が殺到して係員に嬉しい悲鳴を揚げさせ、旬日を出でずして既に二萬余通に達する盛況を示してゐる。

尚ほ、応募稿には遠く北海道、満州、南支の一部からのものもあるので、これは半島人の国語常用に対して国民の関心が如何に大きいかを語る興味ある問題であるが、締切期日は五月二十七日（海軍記念日）であるから、さらに一段とふるつて投稿されんことを希望する。

「釜山日報」1942年5月20日付夕刊2面

釜山も国語講習／国民学校中心に開く

釜山府では国語常用運動を本年度総力運動の實踐事項として積極的に着手すべく目下具体的計画中であるが、民間に於ても、半島人間に国語常用の必要性を認識し、個人的に国語講習会の開催を願出る等の氣運澎湃として起りつゝあるが、釜山府では近く開催される府尹、郡守會議の決定を俟<sup>ま</sup>つて、大体府内各国民学校長に於て、其の通学区域を中心として国語講習



会を開催すべく計画してゐる。

「釜山日報」1942年5月21日付朝刊2面

### 国語常用運動座談会（六）

#### 生活様式の内地化／さうすれば自然国語を常用

原田 部落単位に国語指導員と言ふ様なものを置く意思はありませんか。

川岸 別に指導員といふものはありませんので、国語を指導する責任者を物色して指導して貰ひたいと思ひます。それが為には、部落の学校の先生御願ひするとか、又は国民学校若しくは中等学校を卒業したやうな人が居れば、さういふ人に教へて貰う。又は、部落にある金融組合なり、駐在所の人で国語が比較的出来る人を頼んでやつて貰ふやうにする。又、部落に依ては、教える能力のある人が居らん所があるかも知れませんが、国語を普及するためには部落に一人以上の国語を教へる能力のある人を置くことが必要だと思ひます。又、愛国班でも常会で国語の知らん者に対しては、常会が終つた後で二十分でも□分でも国語の出来る人が単語なり会話なりを教へてやる。或は小さい部落では集会所に集まつて常会を開く所では、そこで国語を教へるやうにする。それを日曜とか水曜とか決めてやることは出来ないかも知れませんが、相当役立つだらうと思ひます。

原田 或国民学校で入学試験の時に国語の試問をやつたらしいのですが、さういふ方法をとつて国語の普及をやると、日常にも国語を使ふやうになりはしないかと思ひます。兎に角、国語を日常に使はせるといふことに結びつけて行くにはどういふ方法がよいか、その具体的な方法はないものでせうか。

島田 親にとつて、子供を学校に入学さすといふことは切実な問題ではないかと思ひます。従つて、本当に徹底的に国語で塗り潰す為には、国語を解せざる者は学校に入れないといふことにすれば、一ペンで普及出来ると思ひます。国民学校一年に入学する時、国語で試験をするといふこ

とになれば、家庭では国語を教へて学校に入ることになるのではないかと  
思ふ。然しそれは余り乱暴ではないかと思ひます。又、余り急速過ぎ  
てはいけないと思ひます。又、不公平になると思ひます。家庭で国語を  
理解してゐるところの子供は入学出来るが、国語を理解しない家庭の  
子供は入学出来ないといふことになるので、それはいかんと思ひます。  
従つて学校に入る迄は、矢張りその子の性格とか素質といふものを見て  
決定すべきものと思ひます。然し、何んでもかんでも普及するといふな  
らば、今申したやうな方法もありますが、これは取るべきものではない。  
教育の方法手段として全鮮一般に普及するやうにするには、学校教育か  
ら社会教育へ力を注ぐことが必要であらうと考へるのであります。

芥川 私の社でどういう風にしたら常用するかといふ問題を出しました。  
私の方にも半島出身の記者がおりますので、問題を出したことがありま  
す。又、工場の家庭を調べたら、三百八十六名中の八十四、五人が判ら  
ないやうでした。又、半島人の生活を或程度まで内地化して行く必要も  
あると思ひます。さうすれば自然矢張り国語を常用するのではないか。  
田舎の方に廻つて思つたことではありますが、釜山辺りではよく問題にな  
る温突ですが、釜山辺りではいらないと思ひます。

鳥川 私は慶南におつたことがあります、当時の知事が<sup>オンドル</sup>温突のために山  
が坊主になり、いくら木があつても足らんと云ふので、此温突を止めて  
内地式のものにしようと言ふので色々調査したのでありますが、その当  
時の一般朝鮮人の生活程度から言つて、無理であつたのです。それは内  
地のやうに畳を入れて蒲団を敷いて寝る、温突がなければ蒲団も厚くし  
沢山作らなければならん。それはあの当時の状態では無理であると言ふ  
事で、温突全廃は取り止めてしまつたのであります。今日では、其の当  
時より余程経済的にも向上してゐますから、それも出来るのではないか  
と思ひます。少くとも京城以南は温突なしで行けると思つてゐます。

川岸 南鮮辺りでは、温突はなくても生活が出来ると思ひます。それは生  
活を改めれば、冬でも温突はなくても生活出来ると思ひます。

甘蔗 地方制度を先づ改正しなければならんと思ふ。府だとか面とか邑とかいふものを町とか村とか市とかいふ風にしなければならんと思ふ。国語の普及はそこまで徹底しなければいかんと思へます。今でも田舎の有力者で国語を解さないものが相当ある位で、そういふ連中が面會議員となつてゐるのでありますから、国語を普及するには先づ面とか邑とかいふものを町とか村とかに改める。これは官庁の一ペンの通牒で出来る問題である。そういふところから解決しなければならんと思ひます。国語の講習会は国民学校を借りてやる。これは京城等でやれば、地方ではそのために学校を借さんといふことはないと思ひます。

鳥川 地方制度のことを申上げるが、あの当時私は初めから斯く言つた面とか邑とかを採用しないで、内地と同様にした方が良いと主張したのです。邑は内地の町に当り、面は村に当るのであります。邑といふのは朝鮮語では□□（郡庁？）の所在地といふ言葉で、邑といふのは当らないのでありまして、面も村でもよいでせうと進言したが、そう簡単には行くまい。町なんていふ言葉は新しいから、それでは行けまいと言ふので現在のやうになつたのでありますから、この際改正することは何でもないと思ひます。又、朝鮮の人口といふものは毎年非常に殖えて行きます。所が遺憾ながら統計が当になりませんが、今の儘で行つたら率が悪くなつて来ます。どうしても猛運動を起して国語の普及をしなければなりません。国語を知つてゐる古い者は死んで行く。それに反比例して国語を知らない者がどんどん生れて来る。非常に率が悪くなつて来るのです。ですから、今の中にウンと馬力をかけて急速度に普及を図らんと、却つてパーセンテージが下つて来ますから、この点何を措いてもあらゆる方法を講じてやらなければならんと思へます。

「釜山日報」1942年5月22日付朝刊3面

昌原郡に「大和一家」／活模範として近く表彰

<sup>へきすう</sup>僻陬の地に、これは又珍らしい「大和一家」がある。——昌原郡熊東面

龍院里乾魚物商木内政一氏（四六）の一家がそれで、氏は馬山昌信学校を卒業後、郷里で穀物商を經營してゐたがおもはしくないので、去る昭和六年十一月家族をまとめて樺太に渡り、元泊郡元泊村で内地人相手に古物商を営むうち、茲で完全に皇国臣民になりきつて十三年三月帰郷、現在の乾魚商を初めたのであるが、国語常用はもとより、家族揃つて朝の宮城遙拝、正午の黙禱を励行してゐる。田舎のことゝて、近所の者も初めは狂人扱いにしてゐたが、氏は敢然とこれをなし遂げ、部落民の指導に挺身し、又、生計困難な為め禁酒禁煙を実行し、これによつて浮んだ金で昭和十二年末から毎月三円、昨年一月からは五円、欠かさず熊東駐在所を通じて国防献金してゐるのである。

国語常用家庭は鮮内に相当多いが、かゝる徹底した「大和一家」は全く珍らしく、国民総力昌原聯盟では郡民の活模範として適當の機会にこの一家を表彰することになった。

#### 「釜山日報」1942年5月22日付朝刊3面

##### 昌原郡の国語熱／最近著しく高潮す

待望の徴兵制度もいよいよ実施されるに至つたが、これと前後して国語常用の運動は澎湃として全半島に漲りつゝあつて、昌原郡でもこの常用運動計画が着々とすゝめられてゐる。而して、現在十五萬郡民中に国語の普及状況を見ると、<sup>やや</sup>稍解するもの男八千九百八十三名、女二千八百二十九名で、普通会話に差支へなきもの男七千四百三十一名、女一千九百七十五名、計二萬一千二百三十五名の数字を示し、<sup>あなが</sup>強ち好成績とは謂はれないが、事實は現下の教育状況から見て、これ以上の数に上るべく兎も角郡民の各層を通じて最近著しく国語運動が白熱的に高潮しつゝあることは、喜ばしい現象である。

「釜山日報」1942年5月22日付朝刊3面

徴兵制<sup>ほとばし</sup>に迸る感激【三】

徴兵制の実施！朝鮮二千四百萬民衆の歡喜と感激は、街に邑に満ち溢れた。それは恰も天来の福音の如く、彼らの光榮と希望を喚起した。この歴史的発表は既に旬日をすぎるも、民衆の感激と皇国臣民たるの自負<sup>いよい</sup>は愈よ熾烈化してゐる。我々は立派な兵役の義務を果さう一の声は、遂にこの“徴兵制<sup>ほとばし</sup>に迸る感激”の一篇となつた。

女よ目ざめよ／釜山商工会議所議員 大森康有氏談

朝鮮の画期的發展の一段階を為す徴兵制施行の公表を聞き、歡喜□□せること茲<sup>ここ</sup>に毎日であるが、私達はたゞ感傷的な興奮より覺めて、腰を落付けて兵役義務完遂を目がけて、力強き第一步を速かに踏み出さねばならぬと思ひます。私は今迄に我々が持して居た諸々の悪弊を清算する事を以つて、此の第一步としたい。何が悪弊かと云ふことは一機に言ひ難いのですが、具体的に一つ一つ思ひ付き次第、之を清算して行くことが必要だと思ひます。従来、半島人家庭の子弟教育は実に面白くないものがあり、大体儒教の感化より来る悪影響<sup>だけ</sup>丈が残つて、それこそ二十にして老人の振舞をさせるを以て其教育の本質とせるに非ずやと疑はせるものがあります。所謂青年らしき澁刺たる處が少しも見えない。外見ばかり□しい、煮え切らない若者の多いのに頼りない感がせられます。も少し骨のある、形式<sup>ばか</sup>許りにとらはれざる子弟教育を痛感します。それから、近頃目立つて來たのは、朝鮮婦人と宗教の問題である。人生に宗教の必要な事は我々熟知して居るが、半島婦人が仏教の感化を受けて□□な、博愛な傾向を帯びて居たのは、我々の非常に心強く感じて居たところでしたが、最近、お寺に行く者にして、遊び半分の実に不健全なのを見まして、憤慨に堪へません。兎角、朝鮮の宗教界は不明瞭なる事甚だしく、凡そ宗教とも名付け得られないものが多いのであります。何とか之を健全なる、それこそ人生に光明を与へる宗教たらしめたいものであります。次に子女教育について見るも、子女教

育を等閑に附する事の悪弊は段々一掃されてはゐるが、女学校の教育の成果を見まして、未しの感がされます。半島より精兵を出すには、良き母親を必要とします。その母親は女学校に依つて造り上げられると思ひます。その重大な女学校教育の現状は、その質に於て今一段の向上も期待して已みません。唯漫然たる看板ばかりの女学生、その知性の低さ、原因は我々の家庭にあるとは思ひますものゝ、何とかしてその向上を計り度いものと考えます。これが徴兵制を真に完璧ならしむる道だと信じます。

### まづ国語を常用／済生外科院長医学博士 星野哲三談

徴兵制の施行を見て、我々は如何にして負荷された此大任を完全に果たすかであります。徴兵の聖なる義務を全うするには、色々とそれに伴う問題が解決されねばなりません。私は国語問題についての考へを述べて見やうと思ひます。今や半島人青少年は、間もなく憧れの軍人になるのでありますが、軍人になる当人として必要なのは、先づ健康と、健全なる頭脳及び国語使用可能の三事だと考へます。如何に健康で、健全なる□□を有して居る者でも、国語が了解出来なければ、兵務に多大の支障を来すのです。単に支障を来たす許りでなく、かゝる無理をなす本人の苦しみは並大抵ではありませんまい。<sup>ここ</sup>茲に国語問題の緊急性があります。今の国民学校の生徒は大体、国語が出来ます。中等学校以上へ進学する者は問題はない訳であります。こう言つて了ひますと、国語常用とか、やかましく言ふ必要がない事になりますが、実は其の底に見逃した大きな問題があります。本当に国語が出来るか？思つた事を少しのよどみもなく正しい国語で言ひ得るかどうかの問題であります。良く見かける事ではありますが、国語の出来る人といはれる者で、完全に敬語の使ひこなせる人が幾□居るのか疑問と思つて居ります。では、完全に国語が使へる者になるのは？正しい国語を常用するに尽きると思ひます。実際には国民学校等で正しい国語を充分使ひこなせる先生から習ふこと。直接内地人により多く接触し、会話により修得して行く事が最も根本的な対策だらうと思はれます。この意味から、今日

の国語問題解決の根本対策は、内鮮人の接触□□なり機会なりをもつと多  
つと多くする事だと思ひます。この意味から内鮮共学の実施が非常によい  
と思ひます。

基礎訓練を急げ／元益商店代表重役 李春玉氏談

半島に徴兵制施行を見ました事は感激に堪へません。兵役の義務の重大  
なる事は、我々等しく認識して居るが、如何にしてこの重大なる、崇高  
なる義務を完全に果すかが、二千四百萬同胞の重大関心でなければなりま  
せん。皇軍の精兵として、内地の人々に遜色のない軍人を出す事が、我々  
の念願であります。それには、強い兵隊は強い教育からといはるゝように、  
強い教育を授ける事が根本であります。処が、之は軍隊生活で充分受ける  
から、その鍛へに应じ得る基礎教育を施すことが、我々の責任であります。  
此の様な意味よりして、教育の普及が非常に必要であります。全然未教育  
のものを準備期間二ケ年以内に何とか教育を施しまして、是非共一人も洩れ  
る事なく、□の兵務に服せるやう取計ひ度いものと思ひます。また、これ  
がわれわれ当面の責務であると確信してをります。

「釜山日報」1942年5月23日付朝刊3面

徴兵制に<sup>ほとばし</sup>逆る感激【四】

聖恩に報ひよ／釜山商工会議所議員 大倉康秀談

大東亜の聖戦は連戦連捷して、御稜威は東亜の天地に<sup>あまね</sup>洽く大日本帝国に  
<sup>ママ</sup>果せせられた新東亜建設の大事業が着々と進みつゝある<sup>とき</sup>秋、去る十一日徴  
兵制度施行の宣誓式を挙行して、半島二千四百萬民衆は聖寿の萬歳高唱し、  
この歡喜は天地も裂けよと爆発した。これは誠に意義深く、半島歴史上永  
遠不滅の誇りとするとこである。半島の青少年よ、只力強く起て。不言実  
行の精神も逞しく、今後の青少年は真に皇国に殉ずる忠烈無比な精神を持  
たなければならない。これがためには、まづ教育である。東亜民族指導者  
として、<sup>はたまた</sup>将又大日本帝国軍人として考へる時に、其の責任は誠に重大であ

る。此の重責を如何にして果す可きか、如何にして大和魂を持たせるかは私が殊更にいふまでもなく、指導教育の宜しきを得なければならない。先づ以て国語普及が焦眉中の焦眉の急務なる事を痛感すると共に、各教育機関を強化せしめ、国語常用の徹底を計らなければならない事は申す迄もないのである。国語常用の先端は先づ家庭の主婦から。主婦よ、我が子を愛する如く国語を愛用せよ。国語の常用は我が子の前途の爲め、国家の爲めである。而し、之に伴ふ国語普及の機関を何等かの方法とに依つて、一日も早く完備しなければならないものと思ふ。かくして我々は宏大無辺の聖恩に報ひ奉らねばならない。(写真は大倉康秀氏)

#### 安んじて兵役に／釜山商工会議所議員 安本浩康氏談

今や崇高なる兵役に服し、直接国防の大任を我々半島人も担ひ得る事になつたのは、我々の無上の光榮とするところである。先づ以て、半島統治の上に垂給ふ大御心を心として善政を施された歴代総督に感謝の念を捧げたい。臣民として無上の光榮に浴した我々は、強き日本精神と大いなる自覚とに徹して、只管<sup>ひたすら</sup>負荷されし大任を完うせねばならない。一口に兵役と云ふものゝ、世界一の皇軍の兵士になることである。且これがためには、まづかゝる精強勇武の兵士たるに差支へぬやうな素地を作らねばならない。それも二ケ年間に立派になし遂げねばならない。かうした素地を作るといふことは、端的にいつて兵になる者自身の鍊成と、かゝる兵士を出し得るやうな家庭の力の養成することが主眼だと思ふ。処が、兵になる者の鍊成は、結局實際の兵營生活に充分鍛へ上げられるから、問題はかうした家庭の力の養成如何にありといはねばならない。家庭の持つ力は精神力と経済力の二つに分けられるが、この二つの力の拡充が相俟つて家庭の持つ力として綜合して始めて完き得るのである。では、如何にすれば之の力を拡充する事が出来るか。精神力は一に我々公職にある者により之を鼓舞し、激□しなければならぬ。之は私自身相当の自信は持てる積りである。経済力は如何にして拡充するか。生計に困難を伴ふ家庭出身の兵士に後顧の憂ひ



があつては、満足な兵務の尽瘁は期待出来ない。茲に慎重なる対策が考慮されることが絶対に必要である。われわれとしては、有為の青年が安んじて兵役に服し得るよう、努力したい念願である。（写真は安本浩康氏）

「釜山日報」1942年5月23日付夕刊3面

#### 国語常用運動座談会（七）

##### 悪習慣を打破／国語の精神を守れ

夏山 師範学校に入る者は国語を習ふし使ふが、そうでない者で知つて居乍らわざと使はない、思想的に国語を使はない者がある。之をどうするかといふ事が問題だと思ひます。一例を挙げると、京城の某警察署長の子供が京中を卒業して、大学予科に入りました。同じく朝鮮人の役人の子供達が予科に入つたので、一緒に昌慶園に四人で行つたのであります。三人が半島人であります。内地人である署長の息子は朝鮮語は出来ない所以であります。この四人が一緒になつて遊びに出かけたが、本来ならみんな国語でやるべきでありますのに、三人は朝鮮語でペラペラ喋つてゐるのです。で、その息子さんはつまらないから、一人で先に帰つて仕舞つたといふことです。そう云ふのは、自分は日本帝国の臣民であるといふことを考へないからです。裁判所の弁護士に行くと、あすこは内地人の弁護士と朝鮮側とは全然別になつてゐます。その朝鮮人弁護士の部屋に行くと、一人も国語を使つてゐる弁護士はない。訴訟事件で法廷に立てば国語を使はなければならんのに、控室では朝鮮語で馬鹿話をしてゐる。私は飽迄朝鮮語は使はないで国語で話すが、そういふ状態であります。あゝ、ゆう所に、<sup>しか</sup>而も知識人でありながら朝鮮語を使ふといふことは、絶対に許されない。国語を普及する、使はせるといふことは、単に教育問題ばかりでなく日本精神に重大なる影響を持つものであると思ふ。甚だしいのは、総督府に関係ある相当の地位にある人さへも、集まると朝鮮語でやつてゐる。これ等は習慣的のものでせうが、これは一掃しなければなりません。そうでない場合、わざと朝鮮語を使ふといふ事は、之

は特別な方法を講じなければいかんと思ふ。これは国語の精神といふものを破壊するものだと思ふ。之等に対しては、是非生活上に対して何等かの方法を以て、是非国語を使用しなければ生活の必要に迫られるといふ風にしなければ、到底国語の使用は出来ない。故意に朝鮮語のみに依つて生活してゐる者に対しては、制肘を加へなければならんと思ひます。

津田 女の方はみんな国語を習ひたいと云つてゐますので、高等女学校を出たら三ヶ月は適当に勉強をさせて、それを各愛国班に行かせるやうにしたら、きつと良いと思ひます。師範教育を受けませんと教へ方がよく判りませんから、一通り教へて置いたら誰でも国語の先生になれます。今も大和塾で長崎先生のお手伝ひをしてゐますが、みんなよくやつてゐるやうです。

長崎 よくやつてゐます。可愛がつて抱いたり、頬ずりしたり、子供達に教へてくれます。

川岸 あすこに行つて見ると、国語学校の生徒ではない。実に喜ばしい風景で、家庭の子供とお母さんと言つた風な感じでした。

芥川 映画とか演劇、そう言ふ方面に大いに改善する必要があると思ひますが。

長崎 この前、思想諜報といふ題で、ある検事が放送したのですが、その原稿を見たが、とても六ヶ敷い。こんな六ヶ敷い事を放送してわかるかと思つたが、ラジオの第一放送を聞いて来るものは判るといふことで、第二放送は何とかしてはといふ意見もあります。

甘庶 御参考に申上ます。第二放送といふものは單純な意味のものではないのでありまして、御承知のやうに昭和十七年になつて、総督の命令によつてなるべく第二放送を促進せよといふので、第二放送を初めたのは裡里、それから此の二十八日から釜山が初ることになつてゐます。そこで、なぜそういふことをやるかといふに、例へば今日国語の判らない者が八十五%、約二千萬人あります。所で、聴取者は二十七萬人あります。一軒の家で五人平均の家族と見ますと、四百五十萬人の者がラジオを聞

いて居るものと思はなければなりません。その四百五十萬人のものに世の中の出来事を知らせてやらなければなりません。国語では判らないのですから、そうしてこれは一人に説明するのではなく、一般大衆、殊に一番わからない者を標準にしてやるのであります。斯うして現在の日本の状態といふものを知らせて、我々は皇国臣民であるといふことを認識させる。そのために、朝鮮語によつて八十五％の人達の知識を昂めて行く。そういふ意味で、第二放送といふものは大切なものであります。この問題は本府の局長会議に於いて体力検査の問題、入学試験の問題の時でも、もう少し放送を利用して根本的にやらなければいかんといふ事を言はれた。この第二放送は前にも申したやうに六ヶ敷い物は無理で、永田秀次郎氏のあゝゆう平易な言葉でも未だ無理なのでありまして、もつとやさしいものでなくてはなりません。（つゞく）

「釜山日報」1942年5月24日付夕刊2面

#### 官公吏に国語常用奨励／指導者の榮譽に懸けて

慶南道では内鮮一体の真義に徹するため国語奨励に拍車をかけてゐるが、一般大衆の指導階級たるべき官公吏の国語生活を更に強調することになり、二十二日附で官房庶務課長名で第一次所属官署の長、各事業所の長、庁内各課長宛に通牒が発せられた。即ち、

内鮮一体の真義に徹せしめ、牢固たる皇国臣民としての信念を確立し、一切の生活に国民意識を顕現させることは、刻下極めて喫緊の事に属す。而して、国語を生活用語として常用するは皇国臣民たるの表徴であり、国民意識の最も有力なる顕現に外ならない。皇国臣民として将来大東亜共栄圏の指導者たるの榮譽を担ひ、<sup>いやし</sup>苟くも一般民衆に率先示範すべき官公吏にして、官衙で朝鮮語を使用するが如きは厳に慎しむべきである。かゝる者に対しては、将来その勤務成績等についても相当考慮すべきに付、部下職員に対しては、これが徹底に<sup>げんこ</sup>儼乎たる督励を加はうるやう、適切な措置を講ぜられたいと云ふのである。

「釜山日報」1942年5月24日付夕刊2面

山なす応募／国語常用標語三萬通を超す

連日殺到の国語常用標語の整理に汗だくの係員。十九日迄二萬通を突破して、数百といふ程度のものであつたが期日が切迫して来た関係か、此二、三日応募稿が俄然増加して、二十二日の整理の結果によると、三萬通を優に超過して四萬通に接してゐる。来る二十七日の期日まで後五日間この調子でいくと、総数何萬に達するか、今のところ予想がつかない状態で、係員はまさにうれしい悲鳴をあげてゐる。(写真がその山なす投稿＝鎮海灣要塞司令部検閲済)

「釜山日報」1942年5月24日付夕刊2面

国語の家と人

環境から変へる／釜山 吉臣功八氏の一家

徴兵制施行と相俟つて、今や府内には国語常用運動が澎湃と起り、講習会等各種行事は積極的に半島人に働きかけてゐるが、これは又二十数年前から生活様式を一変して、完全なる内地式生活を送つて来た模範的国語常用の家、釜山府草梁町五〇前殖産銀行員吉臣功八氏（四八）一家を訪れる。

「今日は」と格子戸を開け、記者も余りの内地式に家でも間違つたのぢやないかと疑つた位である。

家族は主人吉臣氏をはじめ、妻陽子（四四）、次女□子（港高女卒）、三女コウメ（釜山高女二年生）、長男玄八（第三国民四年生）、次男永八（六つ）の六人である。

主人吉臣氏は記者の質問に答へて語り出す。

二十数年前銀行員生活をしましたが、日常語が全部国語で、上手下手はさて置き、どうしても家庭生活迄国語一点張りになりました。たまに故郷から年寄りが来ると、国語が解せんもんですから鮮語を話しますが、詰つたりして相手の気持を悪くした事も度々ありました。それから相当の反対を押し切つて、とうとう生活様式まで内地式に変へましたが、近

頃思ふに、これが一番手つ取り早い方法だと思ひます。生活様式が変はると、環境からして鮮語を話すのに何んだかテレ臭くなつて、折角国語で話す子供達までの気を悪くするのです。現在三女と次男は全く鮮語が解りません。徴兵制が布かれた今日、之でこそ真の陛下の赤子を捧げることが出来るものと、心の中で非常な愉快さを感じてゐます。要するに、こんな誇りを半島人に持たせるのが、国語常用への最も近き道ではないでせうか。

と来るべき日の覚悟をほのめかして、力強く結んだ。（写真上は吉臣氏の一家＝鎮海湾要塞司令部検閲済）

#### 知らぬ鮮語が多い／固城金組 金州理事の家

転勤になり、初めて地方に赴任して来た場合、以前は名前だけでも直ぐ内鮮人の判別がついたが、創氏改名が実施されてからは国語が旨くない人なら兎も角、上手な人であつたなら一寸の接触では容易に分からないのが本当である。殊に、日常生活までが内地化された人であれば尚更である。そのよき実例として、固城金融組合理事金州孝治氏の場合がそれである。氏は勤務中は勿論、家庭にあつても殆ど国語を常用してゐるばかりでなく、一昨年副理事岩田氏の後を□つて着任した当時、氏の舎宅を訪れたことのある内地人までが口を揃へて、

お客の接待方にしろ、座敷の飾り方にしろ、その他調度品にしろ、内地人も顔負けする位純内地化されてゐる。

とほめ立てる程、生活様式まで内地化された関係上、今尚、部外のものゝ氏は全く内地人だとのみ思ふのも無理ない話である。それ程、氏は国語が能弁であり、半島人としては全く垢抜けしてゐるばかりでなく、夫人との間に四男四女計八名の子宝に恵まれ、皆相当な教育を受けさせてゐる関係上、家庭での国語常用に生活改善がそう至難の問題でなかつたかも知れないが、如何に氏が子女教育の爲め刻苦勉強生活と闘つてきたかが窺われる。

即ち、先年嫁に行つた長女を初めとし、目下、固州国民校で教鞭をとつてゐる次女、それに家事を手伝つてゐる三女までが釜山港高女出身、四女は鎮海高女の二年に在学、次男は金沢医大二年に在学中、三男と四男は内地人国民学校たる固城国民校六年と四年に在学中と云ふ具合で、国語全解運動が展示された折柄、「常用家庭」として茲に紹介するよりも、「知らない朝鮮語が多い半島人の家庭」として紹介した方が妥当であらう。

処が、他の国語常用家庭が抱へる悩み通り、此の家庭でも奥さんの国語が能弁でないのが矢張り悩みの種らしい。そこで奥さんも何に子供達に負けるものかと勇気を出して、四、五年前から国語自習書を買入れ、□を□つて自習に務める傍、古聖の言の如く「下に問ふを恥ぢず」の決心で、子達を相手に一生懸命に国語の勉強を続け、もう今は「留守中内地人の来客があつても、送り迎え位は大丈夫出来ますよ」とは、理事さんの偽らざる話だから感服せざるを得ない。尚、氏は現下大に□□されてゐる国語常用運動に呼応し、先づ組合員全体の全解運動に乗り出すべく具体案を練つて居ると聞かされ、再三再四感服する訳である。(写真は子宝に恵まれた国語常用の金州氏の家族)

「釜山日報」1942年5月24日付夕刊3面

#### 国語常用運動座談会 (八)

内鮮一体は国語から／必ずやる決心を堅めよ

甘蔗 (承前) そういふ具合ですが、第二放送、詰り朝鮮語をやめるといふことは出来ない。又、国語講座、あんなものは聞く者はないと思ふ方もありませう。そう言えばそれきりで議論の余地はないが、婦人講座を婦人が熱心に聞くやうになつたのも、ラジオが相当に有効に働いてゐるのであると思ひます。そのために、婦人は国語を習ひたいといふ希望も沸いて来るのであらうと思ふ。そうなれば国語の講座にしても、そういふ人には大いに役立つのではないかと考へられます。それで今日、一日千五百から二千語位の国語を朝鮮語の中に入れて、だんだん接近させて

行かうと云ふので、昨年から実行してゐる訳でありまして、それだけでも国語を朝鮮語に接近さして来たのでありまして、左様にして一般が国語を話す中に、自然と国語といふものを修得させる訳であります。

川岸 第二放送を止めたが、これに対しても国語のニュースの後で朝鮮語でやるが、この時間を大いに活用して貰ひたいと言つてゐる人があります。

甘蔗 最近、色々の事情から第二放送を止めましたが、これに対して半島人の方から非常に投書が多く、単一放送になつて時間が非常に少なくなつたので、それに対する投書が非常にあります。

長崎 朝鮮語は<sup>ま</sup>未だ<sup>ま</sup>未だ必要でせう。未だ国語では六ヶ敷<sup>むずかし</sup>いでせうから。

夏山 甘蔗さんが言はれる通り、第二放送を全然なくするといふ事はいけないと思ひますが、或方面ではこの第二放送の朝鮮語、これを保存して行かうといふやうなことを考へてゐるものがあるし、未だに朝鮮語研究会とかハングル会と言つたやうなものがあつて、互ひに争つてゐるので困つたものでありますが、そういふものがあつて朝鮮語を保存して行くといふ思想を持つてゐる者がありまして、そういふ意味で第二放送の朝鮮語を望んでゐるものが一部分にあるので、これは困つたものだと思つてゐます。（此の時、倉茂軍報道部長出席）

芥川 国語の普及と常用は何うしたら最も行なはれるかといふことなのですが、軍としての立場から一つ閣下にお願ひします。

倉茂 軍の立場から考へても、早く内地同様に軍としての要求も、甚だ速やかに国語の普及を徹底させたいといふことを要望してゐる。それはどうしても必要である。それにはそうしてやるかといふことです。皆さんの方から御意見が出たかと思ひますが、これは全部のものが、これは必要であるんだといふ決心でやらなければならん。朝鮮語を残して研究するとか、保存するとかいふことは止めて、国語をやるんだといふ決心をみんなが持つ必要があると思ふ。それさへ出来れば、総てのものは何とか出来るのではないか。今、内鮮一体と言はれてゐるが、<sup>ま</sup>未だ<sup>ま</sup>未だ色々

誤解が双方にある。これは言葉の為であると思ふ。それを一掃する為に、国語をみんなが常用するやうにしなければならん。それがためには、家庭に於ても常に常用するといふことを奨励し、又、学校、官衙等は勿論のこと、新聞、雑誌、そういふ方面に於ても国語を徹底させなければいかんといふ觀念の下にやる必要があると思ふ。方法については、皆さんの方に色々お考へがあると思ひます。

原田 志願兵の訓練も皆国語でせう。

倉茂 絶対に国語です。それから又遠からず兵役制度になることは殆ど決定的と考へて差支へないと思ひますが、それにはどうしても国語を使はなければなりません。此の間の話で、南方朝鮮の人が□いてゐるが、国語が出来ない。朝鮮語を使ふのであれば日本人ではないと、非常に評判が悪いといふ話を聴きました。

芥川 どうも有難うございました。未だお話はあるこゝと思ひますが、総督府軍民の方々から殊に有益なお話を承りまして、私共非常に参考になりました。私共も総督の御方針に従ひまして、お互にこの忍ぶべき事は忍んで行くといふやうな氣持を以て、国家のため少しでも尽して行きたいといふ風に考へて居りますので、今後共皆様の御指導と御援助をおひする次第で願（「お願いする次第で」の誤植）ありまして、長い間ありがとうございました。（終り）

「釜山日報」1942年4月25日付朝刊2面

農報婦人指導隊帰る／国語で押通す／使命果した増田隊長談

朝鮮農業報国婦人指導隊員七十九名は本府囑託増田収作隊長に引率され、五月一日本府に集合し、山澤農林局長の訓示をうけて出発し、三日大阪、畝傍御陵、橿原神宮参拝、奈良、伊勢皇大神宮参拝、五日宮城遥拝、明治神宮、靖国神社参拝、六日六原道場入場式、十日間に亘つて訓練を受け、鍊成の功をつんで□□、十七日六原発、故斉藤実子爵の墓前に賽し、東京に引返して再び宮城遥拝後市内見学をなし、二十一日京都桃山御陵、御所、



平安神宮参拝、二十二日大阪城、二十三日宮島見学など日程を滞りなく終へ、一人の落伍者、事故者もなく二十四日朝釜山上陸、公会堂小集会室に休憩後、同朝本駅発列車で颯爽<sup>さつそう</sup>と京城に向つたが、二十五日朝鮮神宮参拝後、本府に帰還報告をなし、山澤農林局長の訓示をうけて感想発表後、解隊式を挙行する予定である。

増田隊長は左の如く語る。

本年の隊員は一同頗る<sup>すこぶ</sup>元気であつて、一名の事故者もなく重き使命を果して無事帰鮮したのは何よりであつた。特に昨年と異り優れた点をあげるならば左の通り。

- 一. 国語問題が特に強く叫ばれる際でもあり、農村婦人指導の第一線にある隊員が、この二十五日間朝鮮語を一つも使用せず、国語のみを常用するやう注意を与へたが、この結果、隊員各自の自覚もあつて朝鮮語で私語するものさへ一人もなかつたことは、隊長として喜びに堪へない。国語は解らない人に解らせることはもとより必要であるが、解つてゐても使はないことは極力戒めねばならぬ。
  - 二. 昨年までは小遣錢の余剰を帰鮮後国防献金にしたものだ。甚だしいのになると、奈良まで行つた時、全旅費の六割を浪費しての経済に対する考へ方は全然なつてゐないものさへあつたが、本年は先づ出発と同時に国防献金高を先にきめて、その残りを小遣にあてるやうに皆の考へ方がスツカリ変つてゐるのも頼母しかつた。
  - 三. 六原道場が創立十周年記念式当日に入場式をあげたのは極めて意義が深く、特に入場中に久松侍従御差遣のこことなり、隊員は痛く感激した。
  - 四. 去る十九日宮城遥拝後、雨にずぶ濡れとなつたが、一同は李王同妃両殿下に謁を賜はるため、御邸に□候したが、その際、李王殿下より「大変御苦勞であつた。」との御言葉を頂き、私はじめ全隊員は一生忘れることの出来ない感激をおぼえた。一同はこの感激を肝に銘じて、農村指導の第一線に活躍したいと決意してゐる。
- 慶南道より派遣された五名は左の通り。

皇民錬成道場地方技手 平沼幸一

梁山郡 道嘱託 東原美代子

固城郡 同 茂山久子

泗川郡 同 新井英□

南海郡 同 大島秀子

### 「釜山日報」1942年5月26日付朝刊2面

#### 国語生活徹底／六月の総力運動実践事項

国民総力慶尚南道聯盟では六月総力運動実践申合事項を決定し、道内府郡聯盟と、ともに逞しい運動を展開する。実践申合事項は左の通り。

##### △六月実践申合事項

- 一、国語生活の徹底＝国語を知らない人は一日も早く国語を学びませう。  
少しでも知つて居る人は必ず国語を使ひませう。そして私達の生活を国語化させよう。
- 二、全家勤労＝麦の適期刈取、苗代の管理、田植等いよいよ農繁期です。  
老いも若きも、男も女も増産に努めませう。
- 三、常会の励行＝大詔奉戴日の常会に出席を怠つて居る人はありませんか。  
愛国班長常会や愛国班常会を開かない所はありませんか。また、開いても出席を怠つて居る人はありませんか。常会は定例日に必ず開き、必ず出席させよう。

### 「釜山日報」1942年5月26日付夕刊2面

#### 徴兵制度内鮮一体の絶好機会／元服論一くさり／川島大將けさ来鮮

国民総力聯盟顧問川島義之大將は二十五日朝釜山通過、京城、咸興、平壤視察の旅に上つた。埠頭には西岡道知事はじめ、岸内務金□梁両部長ら多数があつた。鉄道ホテルで朝食後、急行「のぞみ」で京城に向つた大將は、

昨年五月、北支視察の際、釜山は素通りした。ただ、京城に一寸立寄つ

ただで、その他には失礼した。今回は咸興、平壤を視察する。帰りに釜山に立寄るが、これも旅<sup>つ</sup>を洗ふ程度だ。

と前提しながら、新しい国民服をゆつたり着た大將は頗る元気で、釜山はよくなったネ、私が朝鮮軍司令官時代とはスツカリ変つた。その発展性は海を控へた天恵的のものだからネ。

と、感慨一くさりの後、記者の質問に答へて、

二年前、国民精神総動員が国民総力聯盟と発展的解消を遂げた際、総裁をやめて朝鮮を引あげ、ずっと東京にゐるが、何かと忙しい今回は聯盟運動<sup>つぶさ</sup>を具に視察して、久しぶりに、半島事情を知りたいと思つて出かけて来た。内鮮一体の実が最近<sup>とみ</sup>頓にあがりつゝあることは洵<sup>まこと</sup>に嬉しい。特に、婦人啓蒙と国語全解運動が当面の問題として遅くも展開されてゐるが、内鮮一体の実をあげる大きな役割を演ずるこの運動の徹底こそ望ましい。この大戦争下に、お互はもつと働かねばならぬ。朝鮮の一人当りの労働時間は、まだ殖やしてよいのではないか、婦人労働時間にしても同様であらう。次に、徴兵制度の実施に伴つて、国語の必要は益々濃密になるであらうが、これが却つて内鮮一体の実をあげる絶好の機会になるものと信ずる。朝鮮も早く元服して貰はねば困る。弟分の国がいくら出来るのだから、早く朝鮮が代表して弟分たちの手をひいて貰はねばあらぬ。朝鮮の使命は大きいからネ。

と含蓄深い元服論をなしたのち、

南方に出かける予定もないが、近く行きたいとは考へてゐる。来年か明後年になれば、行けやすくなるのではないかネ。

また、総じて聯盟運動は内地よりも一段徹底して展開され、総督政治と表裏一体となり機構が充実し、たくましい運動方法が講じられつゝある点についても大將は、

喜ばしいことだ。内地より遙かによく徹底して行はれてゐる。

と強く是認してゐた。（写真は鉄道ホテルで語る川島大將＝鎮海湾要塞司令部検閲済）

「釜山日報」1942年5月27日付夕刊

時艱克服に邁進（二）／府尹郡守会議席上／強調する知事・訓示要旨（一部分のみ抜粋）

#### 一．国語常用の強化

国語は国民の思想精神と一体不離であり、国語を離れた日本文化の確立は絶対に有り得ないのであります。内鮮一体の顕現に国語の普及徹底を必要とする所以は、実に茲<sup>ここ</sup>にあるのであります。従来に於ても国語の奨励施設は相当の成績を挙げてをりますが、支那事変、大東亜戦争以来、北支、中支は固より、南方諸地域、就中マレー半島、昭南島、比島等に於きまして国語研究及び普及機関の設置、並に之が常用の趨勢目覚しき状況に鑑みると、朝鮮に於ては更に国語の全解運動を一段と徹底せしむることは、誠に焦眉の緊要事であると考へられるのであります。

斯る施設に付ては、仮令組織や予算に欠ぐ所があつても、指導者に真にやり抜かうといふ熱意と気魄がありさへすれば、必ずその事業は成功するものであります。

故に、各位に於ては民衆をして自発的に国語を理解常用せしむる様に仕向け、大東亜戦を闘ふ皇国臣民としての責務完遂に遺憾なきを期せられたいのであります。

「釜山日報」1942年5月29日付夕刊2面

南方で働く半島同胞／国語の普及が先決だ／石田厚生局長

本府厚生局長石田千太郎氏は国民動員について中央と折衝中のところ、二十八日朝釜山上陸、急行「大陸」で京城へ帰つたが、鉄道ホテルに少憩中、左の如く語る。

欧州大戦当時は「金」であり、支那事変当時は「物」であつたが、現在では「人」である。この金から物へ、物から人への移行によつて、労務の拡充が現下最大の用務となつてゐる。そのうちでも朝鮮は人的資源が豊富なるために重要役割を負荷されてゐるわけだが、特に一般の大衆も

また大東亜戦に何かの形で参加したいとの念願鮮烈なるものがあるところから、国家目的の国民動員計画に占める地位は甚だしく高価となつてゐる。然も内地及び共栄圏内に行つて働いてゐる人たちは頗る好評を博してゐる。これから多数の青少年が内地や、南方へ□きに行くのであるが、質のよいものを出すことは朝鮮のために極めて必要なことである。南方に行つてゐる朝鮮の青年たちが国語を解しないやうでは、真に皇国臣民としての御奉公を全うすることは出来ない。今後は一層皇国臣民としての教養を高めるやうにすることが必要である。この素質の向上については、中央と総督府の間に意見は全く一致してゐる。（写真は石田厚生局長＝鎮海湾要塞司令部検閲済）

「釜山日報」1942年5月30日付夕刊2面

#### 国語全解運動／慶南道のお膳立成る

徴兵制度実施をめぐる国語全解運動は、急速に展開する必要に迫られた慶南道では、府尹、郡守会議における各府尹、郡守の諮問答申に基づき、積極的に施策を行ふことになつた。道としては国語全解と常用に関しては、先づ聯盟運動を通じて最下部に講習会を開くことゝ、他面国民学校を通じて部落聯盟に講習会を開催する一方、官庁など指導階級は極力常用し、国語生活に徹することゝし、一方、警察では全面的に普及宣伝に努めることになつてゐる。

「釜山日報」1942年5月30日付夕刊2面

#### 国語全解運動／大和塾乗出す

【京城支社電話】全鮮各地の大和塾では昭和十九年度から実施される徴兵検査に応ずる適齡青年に対し、国語を全解させる趣旨から猛烈な運動を起すことになつたが、この一手段として新たに青年部を開講する。先づ京城から第一歩を踏み出すが、昼夜間の二部とし、国語の他に教練等も実施。満十六歳から十八歳までとし、授業料は無料で、京城では来月七日に締切

る。各地の詳細は順次、各地で計画発表されることになつてゐる。

「釜山日報」1942年5月31日付夕刊2面

国語普及／学校から家庭へ

馬山府内各中初等学校（半島人側）では国語常用運動に一大拍車をかけるべく、校内は無論、校外に於いても絶對的に之を慫慂すると共に、あらゆる場合を通じて生徒児童をして各家庭へ積極的に普及せしめてゐる。

「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

一人残らず国語開眼／本府社会教育課で独自の大運動

【京城支局電話】全鮮に繰展げられた熾烈な国語習得の要望に応へて、総督府及び総力聯盟が主体となつて各種の施設を行ひ、更に明年度に於ては新たな計画の下に、これが運動を促進せんとしてゐるが、学務局社会教育課に於ては関係部課と緊密なる連絡の下に、同課独自の立場から国語普及への大運動を明年度から展開することになり、明年度予算に膨大な経費を要求した。

この内容の一は、全鮮の青年隊を中心として、三十歳以下の者に対し男女を問はず明年度から三ヶ年計画を以て、一人残らず国語への開眼を為さんとするもの。更に他の一は、各地方に部落集会所を新設せんとするもので、これが建設に当つては若干の国庫補助と青年隊の勤勞奉仕に依るが、同集会所は国語講習の他に娛樂場ともなり、または修養道場ともなる一石二鳥を狙ふものである。

さきに計画された全鮮三百ヶ所に近い文廟を利用する国語講習と共に、社会教育課の国語普及運動は同課独自の立場から積極的に軌道に乗せられて来た訳である。

「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

五年間で千円貯へ国語普及費に献金／九龍浦一商人の隠れた努力

【大邱】大東亜戦争の中核体として、今や国語の普及は燎原の火の如く熱烈な情熱をもつて共栄圏内に燃上り、殊に我朝鮮としては名誉ある徴兵制度を二年後に控へ、一層これが必要を痛感し、到る処に普及施設が講ぜられ、幾多の美談佳話を□しつつあるとき、之は又感心すべき特殊の美挙として大々的に推称すべき美談がある。慶北東海岸九龍浦の市場内で牛肉商を営む某氏は、今から五年前、支那事変が勃発するや、国語の将来性を痛感し、一日も早くこれが普及を念願したが、奈何せん独力をもつては目的を達成し得ない。その日暮らしの境遇にあつたので、せめて些かの貯蓄なりとも実行して目的達成の一助にも資せんと思ひ立ち、恰度昭和十二年の八月二十七日、即ち事変勃発の翌月から自宅に貯金箱を備へつけ、満五ヶ年の決心をもつて実行に移つたところ、去る八月二十七日が満期の日になるので、喜び勇んで堅く閉じた貯金箱を開けて見ると、驚くべし五ヶ年の努力は偉大もので、積み積もつて実に九百九十五円といふ巨額に達して居たので、夢かとばかり喜び早速家人にも打明けると、中には欲が出て反対するものもあつたが、当人は頑として所信を枉げず、更に五円を追加して一千円とし、これをそのまゝ面事務所に持参し、国語普及施設費の一端に加へていたゞきたいと申出たので、並居る係員は勿論、今や九龍浦を中心とする附近一帯の感激美談として津々浦々に伝へられ、近く道当局に於いても本府に申達する模様である。

「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

興洞里／国語常用会第二期講習会を開く

【金海】国民総力興洞里一区聯盟は金海平野の一角、邑内を去る二キロ余□虎山麓にありて、至つて貧弱な部落であつた。然るに、偶々松島源氏を理事長に迎へ、其の指導宜しきを得て村民一致団結、共同精神の培養、生産拡充、貯蓄励行等、専ら郷土啓発に努めたる結果、其の実績顕著なもの

あり。全鮮的模範部落として数次に亘り□賞されたが、同部落は百十五戸四百八十人を有し、部落会館、共同倉庫、部落事務所を構へ、昨年十二月八日大東亜戦勃発するや、朝鮮民衆は従来指導を受けたが、今後は東亜の指導者たるの地位を得、其の立場を替へたと為し、皇民鍊成の具現化の積極的方法として国語講習会を開催し、本年三月第一期を終へた三十名を以て国語常用会を組織し、日常、国語以外は絶対使用せざる方針をとり、若し常用会員にして朝鮮語を使用するものに対しては違約金を徴する申合せを為す等積極的方法を講じ、国語普及徹底に全幅の力を傾注して居たが、今回更に全部落民国語全解を期する目的を以て、第二期国語講習会を開催する事に計画を樹て、去る一日午後八時より郡邑関係職員臨席の下に国語講習会開会式を挙行したが、熱□溢れる部落民は吾も吾もと押入り、男女老若全部落民受講希望者にして到底一時に収容し切れず、場所の関係上、今回は遺憾乍ら希望者の大部を断り、男四十二名、女四十名、計八十二名に対し国語を教授する事に決定の上、同十一時解散した。

「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

#### 型破りの国語講習／儒林団の老年組開講

【大邱】国語全解者運動は朝鮮青年の徴兵制実施と共に俄然沸騰し、国語を解さざるものは皇民にあらずとの声は全鮮的に熾烈となり、大邱府内の儒林層に於ても“孫たちが遠慮して家庭で国語を使はぬ”いぢらしさに動かされ、俄然年齢を超越した四十歳以上のものが集まつて国語講習会を開設することゝなり、南山町文友観を会場として三十一日開講式を挙げたことは既報の如くであるが、元来この文友観は崔克□氏の所有で、古くから儒林が集まり漢詩の道場に使用されてゐたものであるが、今回率先してこれを会場とし老年組の国語講習会を思ひ立ち、現在受講者は六十歳乃至七十歳の高齢者が十七名あり。其他の二十六名も四十歳以上のもので、毎夜七時より十時迄道社会課の金永囑託を講師として九月一日から開講したものである。(写真を受講の老儒林達)



「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

一夜も欠かさず／咸安郡山仁面の国語講習

【咸安】「国語を知らずんば国民にあらず」と咸安郡山仁面巴山面長は八千面民に一日一語主義の徹底的普及をやつてゐるが、面民の国語常用熱も之と同様白熱化し、面内の国語講習所六ヶ所に受講生七百余名、先生は山本□□氏、巴山□甲氏が正教師となり、面内国民学校卒業生を補助教師とし、一夜も抜かさず講習を進めて居り、受講生の中には四十の坂を越えた婦人層並に男老人達が孫と共に日常用語から真剣に「アイウエオ」を受講する□い姿は、山間僻地たる山仁面の隅から隅へと広がり、今や男女老幼□とも国語常用の花を咲かしてゐる。

「釜山日報」1942年9月4日付朝刊2面

下手な国語も使へば上手／地で行く晋陽郡の松圃道議

本社募集の国語常用運動の標語の中に、「下手な国語も使へば上手」と云ふのがある。

或る日、晋陽郡守室で道會議員松圃永樹氏は山本郡守と対話中に、記者は丁度其の時郡守室を訪問し、三人が出会つたのである。

記者は隅の椅子に腰を下し、暫く二人の話を黙つて聴いて居つたが、松圃氏は下手な国語を少しも恥かしさを面に現はさず、泰然とした態度で話続け、途中難しい話をする際は暫く考へてゆつたりと言ふ丈の話をお仕舞まで語り尽し去つたが、記者は非常に感心し、特に気を付けて聴き乍ら偶々一言を投げて試みたが、氏は非常に苦心しながらお仕舞まで国語にてやり通したのには、感激せざるを得なかつた。「下手な国語でも、使へば上手になる」と記者は郡守に□を向けて、「松圃氏は実際、感心なものですね。年が五十にもなつてゐるのに——。」「え、全く感心です。以前は訪問の際は朝鮮語ばかり話したのですが、国語常用運動が展開後は一語も朝鮮語で語らぬ。非常に苦心はするけれども、大抵意味は通りました。斯くして行けば、段々と上手に話せるでせう。」

郡守も痛く感激の言葉を繰返した。

「釜山日報」1942年9月5日付朝刊2面

### 婦女子六十名厳選／大邱府南山町聯盟の国語講習会

【大邱】日本人たる私達が、日本の地にて日本語を解せざることは恥である。全鮮を挙げて一大民衆運動を展開中の国語常用徹底化に呼応して、今や男も女も老いも若きも一致団結して国語修得に経上つてゐる。茲大邱府南山町第五区聯盟でも去る一日より同町実習学院の教室を借受け、每晚八時より十時まで二時間、婦女子講習会を開催することになったので、記者開講初日の状況を参観し、大いに感激せざるを得なかつた。以下はその状況である。

七時半頃になると、既に四辺はうす暗い闇に包まれたので、会場には百燭以上の電燈がつけられ、愈よ待ちに待つた感激の一瞬だ。十四、五歳の乙女から五十を越えたお婆さんや、倅を大学に迄学ばしてゐると云ふ母親も教室目指して押寄せた。それを講師の円城迎主さんを初め町聯盟相談役の金山裕氏や愛国班長らが汗だくで整理し、漸く落着かせたものゝ、なにしろ生れて初めての教室とて背負つて来た子供を膝にのついたり、泣く児に乳を与へたり種々雑多であるが、□て石渡聯盟理事長の開講挨拶について円城女教師を紹介、愈よ授業が開始された。

初めてのせいか、一同頗る緊張した態度で黒板に書かれた「アイウエオ」の片仮名をちつと見詰めては頭をひねる婦人もあり、定員六十名の受講生は互ひに顔を見合せながら、ときどき先生の声に驚くやうな表情であつたが、この夜は約三十分間の授業に留め、後は席に着く練習、「お互いに教室をきれいにしませう」等の心得を脳裏にしつかりと植込んだ。なほ、講師の円城迎主先生は慶北高女第十一期卒業生で、京城淑明女専を修了して家事にいそしんでゐたが、講習会が計画されるや自ら進んで講師を引受けた。明朗な女性で、次のやうに語つた。

受講希望者は最初百数十名に達したので、町聯盟の方にも非常に面食ひ、

厳選の結果六十名に留めた訳で、同晩来られた方々は何れも是非国語が学びたいといふ熱心な方のみで、私達朝鮮婦人の国語全解こそは刻下の急務で、一日も早く修得せねばならぬ問題だと思ひます。及ばずながら全力を尽して、一日も早く全解せしめるやう努力する覚悟で、先づ三ヶ月間を一期とし、その後も継続するつもりです。（写真は講習会の実況）

「釜山日報」1942年9月5日付朝刊2面

農閑期利用／全南で国語教本配布

【光州】全南道では凡ゆる機関を動員して国語の全鮮普及に全努力を傾注してゐるが、農閑期を利用して道内一斉に国語の講習会を開催し、道幹部も出動して之が督励に努め、本年度開講する場所は実に二千五百余所に上つて、之に収容する受講人員は大体十三萬五千人と言はれてゐる。尚、道総力課に於ては国語講習会用の国語教本二十萬部を作成し、道内各地へ洩れなく配布すべく準備を整へてゐる。

「釜山日報」1942年9月5日付朝刊2面

国語全解の熱意／三千浦で今や最高潮

【三千浦】国語全解へ火の玉となつて突撃の火蓋を切つた三千浦邑では、来る七日より一週間、日の出国民学校に於て先づ国語講習会開講と同時に、指導に当る講師三十六名の講習を行ひ、各区単位として四十歳以下全部の未解者に対し、三ヶ月を一期とする講習期間の講師として各地へ配属し、徹底的国語普及運動に乗り出す事となつたが、三ヶ月で講習を受け、修了すれば更に他の未解者への講習を行ひ、全鮮に萬全を期する方針で、目下各区では開講期日は何時かと区へ申出る者もあり、国語全解への熱意は既に最高潮にあり、結果は頗る期待がかけられてゐる。

「釜山日報」1942年9月5日付朝刊2面

講習会開催／大和塾河東支部

【河東】大邱大和塾河東支部では九月一日午前十時より河東耶蘇教会堂に於いて大邱保護観察所長、大邱大和塾会長である□□（覆新？）法院□□行森□氏臨席のもとに官民有志多数参列して、国語講習会の開校式を盛大に挙行了た。

「釜山日報」1942年9月5日付朝刊2面

勇士の母講師に／固城邑職員家族の講習会

【固城】国語普及に拍車を加へ一般に範を示すには、先づ役人の家庭からの建前から、既報の通り固城郡職員聯盟では郡会議室を開放し、職員家族中未解者国語講習会を開催したが、この報一度伝はるや流石一般郡民に多大な刺戟を与へ、郡内至る処に国語熱が漲つてゐる。これに倣ひ、固城郡職員聯盟でも理事長遠藤邑長のとり計らひに依り、家族講習会を開催すべく準備中の処、金融組合側でも申込みがあつたので、それ等婦人たちを合せて国語を教へ込むことに決定、去る一日目出度開講式を上げた上、同夜から向ふ六ヶ月間を講習期間とし、勇士の母□□（横道？）八千代女史が講師となり、教へる人も教はる人も渾然一体となつて、目下懸命に国語を勉強してゐる。

「釜山日報」1942年9月6日付朝刊2面

一日一語から全解へ／府内百の講習会大活動

学べ国語！普及と常用に積極的に乗出した府聯盟では、既報の如く府内全般に亘り講習会等を開催せしめ未解者の一掃に努力してゐるが、現在府内に於ける講習会設立件数は百余件、五千名が一日一語から全解へと頼母しい歩みをみせてゐる。同府聯盟では整理等の都合もあり、現に講習会を開催し未だ届出なきもの、至急届出を要望してゐる。

### 星州郡で講習会

【星州】来るべき昭和十九年度！唯々唯々感謝して感激に迎ふべき名誉の徴兵制度実施の日を差し控へて、与へられたこの機会に我々朝鮮二千四百萬民衆は尚一段の努力と自負心を持つて、その総ての実生活において皇民の誠を顕現し、皇民我等<sup>ひと</sup>齊しく鴻大無辺なる皇恩に浴すべき重大なる鍊成期に際会し、知らぬ国語の悲哀をば解いて「使ふ国語に皇民の誇り」と、その国語普及全解運動が全鮮到る処、澎湃として湧き起つて居るとき、こゝ星州郡総力聯盟に於いても、爾今当運動の先駆たらんとして、さきに国語指導委員会を組織し、諸般具体的な方□（策？）を樹立する等、全□（郡？）総力を挙げて絶大なる努力を傾注して居る折柄、去る一日よりはこれがいよいよ実践運動への移行出発と云ふことゝ定まり、全郡一斉に講習所を開設、目下着々習得に邁進して居るが、その初日に於いてニツポン、キュージョーヨーハイ、テンノーヘイカバンザイと、力強き一步を踏み出した。□町は勿論のこと、野にも山にも朗々として正に国語一色の状を呈し、近き将来に偉大なる効果を□さんとしてゐる。その概況を見るに、

講習所二百三十七箇所収容人員一萬八千九百六十名であり、講師七百十一名の中、女講師が三分の一の割にて二百三十七名である。

「釜山日報」1944年1月12日付朝刊4面

国語へ、増産へ、熱の進軍／皇民へ同胞は努む／昌原郡模範部落をみる

非人道極まる米英の魔手を東亜の天地から駆逐して、その東亜民族による東亜に建て直さうとする古史上□たる光輝を放つべき大□は、世界の新秩序を樹立し、世界の平和確保せんとする帝国の大義正道を明かに中外に示し、十億東亜民族をして欣然と帝国の□□傘下に□□するの敬仰心を□□なく煽り上げる秋、半島二千五百萬同胞を内鮮一体の理念を具現し、皇民化の途へ進軍又進軍の物すごい前進を続ける際、皇民化の捷徑は国語習得にあり、皇民化の実践は増産報国にありとの堅い信念の下において、共

に励み合い、互ひに助け合つて、増産に、供出に、貯蓄に、国語の習得に部落民一致団結、抜群の好成績を挙げた昌原郡内の模範部落の敢闘美談を拾つて見よう。

昌原郡東面松亭里は山間の一寒村であつて、戸数七十四戸、人口三百八十五人の小部落であるが、元来恒産な□の部落民は勤儉力行の恒心なく、雨を見て耕し、秋に至つて□るといふ原始的営農に甘じ、最大の人力を□□して最□の条件を克服するの氣概に乏しく、従つて年々重ねる貧苦に部落民は全く疲れ果てたのであつた。この儘放任せんか、この部落□全住民流散敗北するの外なかつたのであつた。「この秋<sup>とき</sup>にこそ。」と勢ひ厥起した部落の有志春岡敬錫氏は、咽喉が裂けるばかり部落民に呼びかけたのであつた。

「皆さん、われわれには財は無くても力はある。魂はある。この力と魂とをもつて、更生の途に進まうではないか。」

この同胞愛に満ちた熱と涙で励み合ふ春岡氏の掛声は、全部落民の遊惰性分を征服するに至つたのである。それからの松亭部落民の勤労振りは、朝には星を戴いて野良に出て、夜は月を帯びて帰るの、文字通りの不眠不休を続けること数年、「天不能窮力□家」の鉄則は遂に□いられて、数年を出でずして部落の共同倉庫は立ち、共同耕作地は儲けられたのである。こゝにおいて、初めて部落民ははつきり自覚したのである。「天自から助くるものを助くる」と。「空論に傾くな。われわれは実地で行かう」と、堆肥増産に、農□改良に血みどろの力闘を続け、昭和十七年には前古未曾有の大旱魃を見事に征服して、供出は郡内に魁けて完了すると、もに、棉花の供出も完全に遂げたのであつた。聖戦いよいよ苛烈を加ふるや、同部落民は「仇敵米英□□の武器を、われわれの手にて前線に送らう」と貯蓄□に□□し、昭和十七年度貯蓄目標額六千四百十四円を見事に突破し、昭和十八年度は更に二割増加の成績を勝ち得たのではないか。われわれは早く皇民化しようと、聯盟理事長春岡敬錫氏の陣頭指揮の下に、男も女も老も若も国語の習得に熱中し、今や日常語は国語で話せることゝなり、物心

両方面から皇民としても面目を備へるやうになつたのである。この部落を生かした歴史は不屈不撓、同胞愛に満ちた春岡氏の努力の□りではなからうか。

昌原郡内西面斗尺里部落は山間に散在せる小部落であるが、全部落民の傾ける財産と落ちぶれる生活状態を眺めた部落有志広安同徳氏は、彼等を救うのはこの時であると厥然起ち上がつて、部落民の啓蒙に取掛かつたのであつた。「皆さん、ともに働かう。わが部落には一人怠けもの、なきまでに。皆さん、ともに親まう、わが部落には一人の怒るもの、なきまでに。」と熱と涙で励み合う広安氏の掛声に、部落民は完全に引きずられたのである。そうして、昭和十四年より負債償還運動に着手し、昨年末まで総額三千円を奇麗に返済を全うした上、貯蓄高三千五百円を獲得したのであつた。聖戦の苛烈を思ふ部落民は、征けぬ代りに銃後の責務を果さうと、何時も供出米も収も□も部内に□けて、供出を完うするのである。われわれの皇民化の捷徑は国語常用からと、国語の習得に励んだ結果、今は全住民の五割が国語で日常語が話せるやうになつて、街頭にも路上にも「お早うございます。今日は。」の花を咲せるといふ、時局下まことに麗しい限りの美談でなからうか。

「釜山日報」1944年1月18日付朝刊4面

#### 徹底した国語熱／昌原郡聯盟講習会の成果

昌原郡聯盟では皇民化の捷徑たる国語常用に各部落聯盟毎に国語講習会を開催、面職員、部落中堅人物の滅私奉公心の顕現で講師となり、着々とその成果を挙げ、今は殆ど日常語を流暢に語る程で、一視同仁の御聖旨に添はしめてゐるが、家庭的に見ても常用家庭が少いので、これが徹底を期すると共に、他に範を示す優良愛国班を表彰して一層奮励努力を期すべく、来る紀元節を卜し、表彰すべく調査を進めてゐる。

「釜山日報」1944年2月13日付朝刊4面

方言や雑言を排す／統営高女の「正しい国語生活」

万邦をして各々その所を得しめ、兆民をして悉くその堵に安んぜしめんとする皇国の道義のもとに、大東亜は新なる発展を遂げつゝある今日、日本語は今や東亜十億の言葉として飛躍してゐるにかんがみ、統営高女校では正しき国語の使ひ方に万全を期してゐるが、統営は内地と最短距離にある関係上、各地方の方言が流れ込んで、折角学校において教へた国語が純化されないので、最も多く使用されてゐる方言等を左の如くとりあげて、正しい国語の使ひ方を同校生徒ならびに一般父兄へ注意を喚起してゐる。

(上) 直さねばならぬ言葉

うち、わっち  
あんた。うん  
ちょっと見んかね  
福順さんまつとつて  
お掃除しとかう  
こうしようや  
どうしたの  
とらんね  
はやうおいで  
狭いからのかんね  
くれんね

(下) 正しい言葉<sup>61</sup>

わたくし  
あなた。はい  
ちょっと御覧なさい  
福順さんお待ち下さい  
お掃除しておきませう  
こうしませう  
どうしたんですか  
おとり下さい  
早くいらっしゃい  
狭いからのいて下さい  
下さい

「釜山日報」1944年2月24日付朝刊1面

青訓に別科附設／未入所者訓練に万全／四月一日から

【京城電話】半島青年に対し、徴兵制実施に備へる入営前の訓練は、国民学校以上の修了者を対象とする青年訓練所と、国民学校未修了者を対象と

---

61 本来、縦書きの紙面を横書きに変えて本稿に掲載したため、(上)は「左」、(下)は「右」を意味することになる。



する特別錬成所の二本建で進んでゐるが、国民学校以上の修了者で青年訓練所に入所してゐないものも相当あるので、晴の入営に備へる準備訓練に万全を期するため、事務局では四月から新たに青年訓練所別科を開設し、既設の青訓、特別錬成との三本建とすることに決定、半島青年の入営前訓練は青訓別科の開設によつて完璧が期せられることゝなつた。この青訓別科は全鮮一千七百四十四ヶ所の公立青年訓練所に附設するが、これだけでも収容し切れぬ場合は、全鮮に一千八百十二ヶ所ある私立訓練所にも随時附設し、専ら国民学校卒業者で青訓未入者を対象として一ヶ年の訓練を行ふが、本年第一回の壮丁として既に予備検査に合格したものも入所せしめる。この場合、訓練期間は入営の時期までとすることになつた。なほ、別科生徒の使用する青年教本は目下編修課で編纂中である。この教本は国語、算数、地理、歴史等の総合教本である。